



私流文化人類学入門

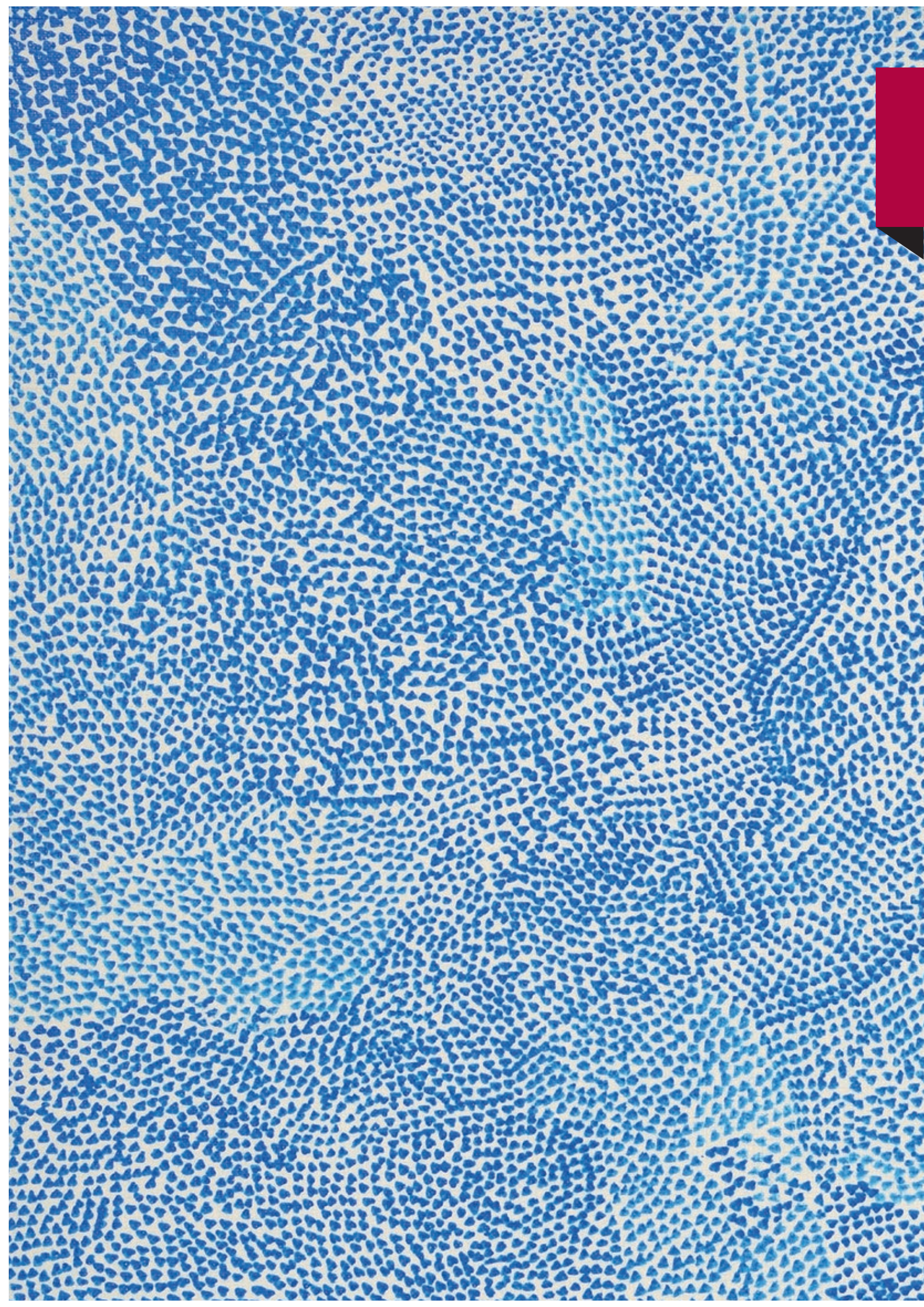
田中雅一

語ったことと書いたこと (1981—2022)

私流文化人類学入門

田中雅一

語ったことと書いたこと(1981-2022)



私流文化人類学入門

田中雅一 語ったことと書いたこと(1981-2022)

凡例

- *業績の各項目には記号が付与されています。参照の際はこの番号が使われています。
- *オンラインでアクセスできるものもありますが、これについては網羅していません。
- *一部には解説を加えました。
- *研究会での発表は煩雑になるので大幅に削除しています。

目次

Don't get it right, get it written!	2
略歴	6
博士論文審査担当一覧	9
語ったこと・書いたこと	11
助成金 [A・B]	12
共同研究 [C・D]	15
企画 (パネル、シンポジウムなど) [E]	21
研究発表 (学術大会、シンポジウムなど) [F]	24
講演 [G]	32
コメント その他 (合評会、座談会、シンポジウムなど) [H]	35
学術雑誌掲載論文 [I・J]	40
単行本所収論文 [K・L]	44
新聞・雑誌記事 [M]	51
編著書・著書 [N・O・P]	54
報告書 [Q・R]	58
翻訳 [S]	61
教科書 [T]	62
事典項目 [U]	64
書評 [V]	66
インタビュー 文化人類学サイコー!	69
再録	103
妖術と邪術	104
川村邦光さんから学んだことなど	108
春歌としての文化相対主義	110
カワイイが越境するのは国境だけではない。	112
犠牲区域・水俣の犠牲区域	113
人・環での四半世紀	114

Don't get it right, get it written!

「研究に期日なんかない。」三浦しおん『愛なき世界』（中公文庫、2021年、下巻131ページ）より。

本書は、私が2022年6月までに学術とその周辺について語ったことと書いたことの記録です。

私は索引作りが好きだ。本作りの工程の中で一番熱中する作業です。上から下、左から右あるいは右から左へと、統辞的な秩序に支配されているテキストに、語彙からなる索引は新しい読み方を可能にします。索引を読むことで、書籍の隠された相貌が見えてきます。索引は統辞的秩序を破壊しますが、アイウエオ順など、異なる秩序のもとにおかれ、新たな隣接関係が生まれます。本作りという創造の過程の裏で密かに行われる破壊という隠微な実践に私は惹かれるのです。

残念ながら本書に索引はありません。しかし、「語ったことと書いたこと」のタイトルを集めた本書は、それ自体(テキスト不在の)大きな索引集とも言えます。だからこそ、私は本書の作成に対し、多大な情熱を持って関わる事ができたのかもしれませんが。本書に索引はないと書きましたが、それに近いものが各扉を飾るワードクラウド(11、69、103ページ)です。これらは、タイトルやインタビューの中でどのような単語がどれくらい使われているかを、文字の大きさや位置によって図式化したものです。

昔、山口昌男さんだったか、研究には「播種型」と「収穫型」があると述べていましたが、どちらかと言うと、私は播種型です。アイデアが浮かぶと、申請書を書いて助成金を取り、共同研究を組織し、みんなで議論して、こんな面白いテーマがありますよ、文化人類学だからこそできるテーマではないですか、と問いかけるような論文集を出版する。これを繰り返して新しい分野を切り開いてきました。種を撒くには田畑が必要ですから、「開墾型」とも言えるかもしれません。本書は「開墾型」の入門書です。

本書の構成は、こうした私の活動の流れを反映する形で、助成金→共同研究・シンポジウムなどの企画→学会・シンポジウムでの発表→論文→編著・単著→その他書いたもの、というような流れ(目次の記号A~V)になっています。他の研究者の活動に参加する場合でも、同じ流れになります。このため通常の業績目録と異なり、単著や編著を最初に記載していません。また、多くの場合省略される発表や講演の記録も掲載しています(研究会での発表は煩雑になるため例外もありますが、省略しました)。読みにくいかもしれませんが、私の研究活動を時系列で辿ることを主眼においた構成であるをご理解ください。研究活動を可視化するという意味で「入門」なのです。

アイデアが論文に結実すると、さらに大きなプロジェクトへと発展したり、他のプロジェクトと呼応して大きくなり、骨太の研究へとつながるのが理想ですが、現実はそううまくいくわけではありません。発表はしたけれど論文にまで行きつかなかったプロジェクトや、論文を書いたものの「ポツンと一軒家」状態になって発展しなかったものもあります。

例えば宮大工・西岡常一を論じた論文「ヒノキは二度死ぬ——宮大工西岡常一の世界」(1998年→K 25(注))は、英語にも訳されている(1997年→K 20)ので、たまに海

外から問い合わせも受けますが孤絶状態です。同じくシェアハウスについての調査報告「シェア居住における主体形成に関する文化人類学的研究——日英の比較を通じて」（2015年→R21）も、調査で知り合った若いインフォーマントとは今も付き合いがありますが、学術的には行き詰まりの典型です。あまりにも孤立していて現物が見つからず、今回の記録にタイトルを掲載することができなかったスリランカの下水道を扱った短文もあります（『琵琶湖特定水域高度処理基本計画 資料編』滋賀県土木部、1996年→J4）。

タイトルについてここで説明したいと思います。Don't get it right, get it written!は、アメリカの作家で漫画家のジェイムズ・サーバー（James Thurber, 1894-1961）の言葉で、「とにかく何か書け、完璧を目指すな」というような意味です。私がこの言葉に初めて接したのは、LSE(London School of Economics and Political Science =ロンドン大学経済政治学院)のセリグマン・ライブラリーで開催された何かのパーティーの席上、ピーター・ロイゾス先生と彼の指導学生Mとの会話を、たまたま側で聞いていたときでした。なかなか博論執筆にとりかからないMを励ますためだったのでしょうか。うまいこと言うなあ后感心しました。当時の私は、これが有名な言葉とは知りませんでした。私はそれ以来、この言葉をつねに思い出しながら、原稿を用意して語り、書いてきました。

とは言っても、語ってはきたけど、なかなか論文にまで至らなかったものも多々あります。論文にはやはり何らかの「get it right」さが必要なのです。学術論文に仕上げるには、まず形式が整っていなければなりませんし、先行研究のレビューも必要です。データは十分なのか。論文完成までにクリアしなければならないことがらは少なくありません。今日の文化人類学ではセオリー重視への反発のせい、フィールドワークの経験が中心の書き物が溢れているように見えますが、論文については「見た！聞いた！語った！書いた！」というわけにはいきません。

私は、日本文化人類学会の『文化人類学』の裏表紙見返しに記載されている『『文化人類学』の目的』で文化人類学者は4つの対話を通じて独自の知を生産してきたと書いています。それらは、フィールドで出会う人たち、先行研究の著者たち、一般の人たち（教育もここに含めてもいい）、そして同時代の研究者たちとの対話です。これらの中で一番面倒で時間がかかるのが、先行研究の著者たちとの「対話」ではないでしょうか。この場合の対話は、そこに何らかの批判が込められているから雑談や歓談ではありません。しかも、先人との対話は相手の応答が期待できませんから、独善的になるかもしれません（その結果、独自の境地を切り開くこともありますから、私は誤解を否定しません）。そこで頼りになるのが同時代の研究者です。彼らが、先人に対する一方的な批判が適切かどうか判断してくれる重要な他者になります。

本書に収められている「書いたもの」は、こうした対話を重ねて生まれました。この2種類の対話こそが、「見た！聞いた！語った！書いた！」をコアとする他の類似の活動からアカデミアたる文化人類学者の活動を区別していると私は考えています。そして、文

化人類学者を他のアカデミアから区別しているのはフィールドで出会った人たちとの「対話」です。こうした対話が「語ったこと・書いたこと」の内的な倫理であるとするなら、以下に述べることは外的な倫理——簡単に言えば、締め切りについてです。

私の学術活動においては、共同研究活動が大きな位置を占めてきました。その背景にあるのはもちろん、かつて所属していた国立民族学博物館(民博)や京都大学人文科学研究所(人文研)が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)と同じく、共同研究を活動の中核に位置付けていたということがあります。またチームによる調査や研究が当然という文化人類学の性格も大きな役割を果たしていたと思われま

以前、こうした共同研究などのプロジェクトと論文執筆の関係について論じたことがあります(「共同研究会三昧あるいは数値化の試み」『人文』57号、2010年→M26)。新しいデータを含めて類似の計算をしてみますと、1986年4月から2022年3月までの36年間に参加した研究会(継続中のものを含む)の総数は88で、そのうち24(27.6%)は私自身が代表として組織したもの、残りの64が他の研究者が組織したものです(私が実質副代表である3つの研究会を含む)。前者については、人文研や民博など機関がベースになっているものが9、科研などの助成金による研究会が13あります。両方に関わるものが2です。後者については機関ベースが48(人文研15、AA研14、民博12ほか)、助成金による研究会が14(科研が12)、両方に関わるものが2です。

共同研究の延べ年数は280年なので、1つの研究会は平均3.2年となります。280年を私の共同研究生活36年で割ると7.8となります。つまり、単純化して述べると、私は1年に8つの共同研究に常時参加しているということになります。実際には1年に10回以上実施されているような人文研での共同研究もあれば、年に2、3回しか行われな

次に、この共同研究の成果について数値化を試みたいと思います。実施期間が1年間の短期の研究会と2022年に入っても継続中か終了したばかりのものを除く75の研究会を母数にして考えます。成果を論文集としてまとめることは必ずしも義務ではないので、ここではたんに事実として見てください。75のうち59(78.6%)の研究会において成果となる論文集が出ています。このうち、私は10の論文集に寄稿できていません。つまり、75のうち49(65.2%)にしか論文を書いていないのです。これを論文総数から考えますと、1986年4月から2022年3月までに書いた論文総数(単行本所収論文Kのみ、コラムLや報告書Rは含まない)は82本で、そのうち研究会の成果とみなすことのできるものは58本(70.7%)です。36年間に執筆した学術雑誌掲載論文I42本のうち、共同研究の成果とみなすことのできるもの(I17、I19、I20など)は18本(42.9%)です。つまり1年に平均3.4本執筆し、2.1本(61.3%)が研究会の成果なのです。

成果論集に寄稿できなかった大きな理由は、締め切りに間に合わなかったからです。論文を寄稿できなかった10の論文集のうち2つは論文ではなくコラム執筆(→L6、L8)

の依頼でしたが、これも論文の依頼なら締め切りに間に合わないと編者が判断したからかもしれません。しかし、締め切りがあるから6.5割の確率で論文が書けたとも言えます。締め切りのせいで書けなかったのではなく、締め切りのおかげで書けた。冒頭の三浦しおんの言葉は、「研究に期日なんかないが、原稿に締め切りはある」と言い直すほうが正確でしょうし、“Don’t get it right, get it written.”という言葉も、毎回締め切りに追われていたサーバーにとって「get it written」こそ、はるかに切実な問題だったからかもしれません。

私の学術活動を一言で述べるなら、先行研究を吟味し共同研究のメンバーたちと対話を重ね、発表や論文執筆の締め切りに追われる生活、つまり内的な倫理 (get it right) — 論文として恥ずかしくないものを書こう — と外的な倫理 (get it written) — 締め切りはできるだけ守ろう — に挟まれてなんとか語り、書き続けてきた36年間でした(もちろん、フィールドワークや教育・社会還元での対話と倫理も重要でしたが、それは本書のテーマから逸れるので省きます)。したがって、“Don’t get it right, get it written.”は、参与観察 (participant observation) のように2つの相反する理念が込められている言葉で、あえて言い換えるなら “Get it written, but remember, get it right” のほうが真実に近いのです。

最後になりましたが、30年以上の長きにわたって私の研究活動を支えてくれた人文科学研究所と人間・環境学研究科の関係者の方々に感謝の意を表したいと思います。本書の企画と制作にあたっては、民博でのご縁から30年近い付き合いのある石川泰子さん(編集工房is 代表)に大変お世話になりました。表紙については田主誠画伯にお願いしたところ、快く引き受けていただきました。本書は『人類学の誘惑』(2010年→07)とともに、お二人のお力を借りての仕事になります。ここに深く感謝申し上げます。データ収集と整理は、朝日美佳さんと島田有紗さん、中屋敷千尋さん、内山絵理華さん、沈恬恬さんに手伝っていただきました。ありがとうございました。

本書は、2019年2月に開催された私の退職記念講演会(<https://www.youtube.com/watch?v=3fTlkjgtvzE>)の際にお配りしたかったのですが、過去の記録を探すのが思ったより難航したこともあり、完成は3年後になってしまいました。

本書には、当時大学院生だった飯塚真弓さんと江原等子さんによるインタビューや、目に触れることが少ないエッセーもいくつか再録していますので、そちらもご笑覧いただければ幸いです。

2022年6月15日 田中雅一

注 各業績の頭に付した記号に対応しています。

略歴

田中雅一 たなか まさかず

1955年3月24日 和歌山市で生まれる。

学歴

- 1960年4月 私立青い鳥幼稚園 入園
- 1961年4月 世田谷区立桜新町小学校 入学(1963 富山市立奥田小学校 転入、1965 和歌山市立砂山小学校 転入)
- 1967年4月 和歌山市立西和中学校 入学
- 1970年4月 和歌山県立桐蔭高等学校 入学
前身は旧制和歌山中学校。明治16年3月卒業生の中に南方熊楠がいます。
- 1973年4月 東北大学文学部哲学科(宗教学宗教史) 入学
- 1978年4月 東北大学大学院文学研究科 哲学科(実践哲学) 博士課程前期 進学
- 1980年4月 同上 博士課程後期 進学、1983.9 中退
- 1980年9月 ロンドン大学経済政治学院 研究生 (Research Fee Student)
- 1981年1月 同上 M.Phil/Ph.D課程 進学
1982年6月より1983年11月までスリランカ・ペラデニヤ大学人文社会科学研究科・社会学科に研究生として留学。
- 1986年7月 ロンドン大学 Ph.D(Anthropology)取得 修了

職歴

- 1986年8月-1988年5月 国立民族学博物館第二研究部 助手
- 1988年6月-2004年3月 京都大学人文科学研究所 助教授
- 2004年4月-2019年3月 京都大学人文科学研究所 教授
- 2006年4月-2013年3月 京都大学人文科学研究所 人文学国際センター長
- 2009年4月-2011年9月 京都大学人文科学研究所 副所長
人文研在職中、運営上の唯一の貢献は教授会を月2回から月1回に変更したことです。
- 2019年4月1日-現在 国際ファッション専門職大学 副学長・教授／京都大学名誉教授

併任

- 1990年4月-1997年3月 国立民族学博物館 助教授(併任)
- 1993年4月-2019年3月 京都大学大学院人間・環境学研究科 協力教員
- 2013年4月-2015年3月 総合地球環境学研究所 教授(併任)
- 2015年4月-2019年3月 日本学術振興会学術システム研究センター 主任研究員
研究員としての貢献の一つは、公募期間3年間限定の特設分野研究「オラリティと社会」の公募を企画・実施できたことです。これは、会話分析の領域で学術的成果を上げることができなかった私の期限切れの恩返しでもあります。平成29年度 応募数182、採択数22、平成30年度 応募数190、採択数20、令和1年度 応募数202、採択数12でした。

学位論文

- 1978年 卒業論文『宗教の社会人類学的考察——E.E.Evans-Pritchardの諸論をめぐって』（東北大学文学部）
一部をK13で公刊しました。
- 1980年 修士論文『ヒンドゥ社会における浄と不浄——宗教学的アプローチ』（東北大学文学研究科）
- 1986年 Ph.D.Thesis, *Sacrifice and Divine Power: Hindu Temple Rituals and Village Festivals in a Fishing Village, Sri Lanka*. (London University)
P1、P2として出版しました。

受賞歴

- 2017年 日本文化人類学会 日本文化人類学会賞
神戸大学で記念講演会を行いました(G27、I40、I42)。

主たる調査地

スリランカ(1982-83)、南インド(1988-98)、在日米軍基地(1997-2015)、ポーランド(2014-)、西インド(2015-)。

非常勤講師勤務先

平安女子短期大学(1987)、聖母女学院短期大学(1988-89、94)、大阪大学(1991、98)、大阪市立大学(1993)、同志社大学(1995-)、京都文教大学(2000)、立命館大学(2001-04、2006-13)、奈良県立医科大学(2008-13)、甲南女子大学(2014-18)、集中講義：島根大学(1990)、富山大学(1991、2003)、北海道大学(1998)、東北大学(2001、2013)、九州大学(2002)、筑波大学(2004、2016)、広島大学(2006-13)

出講：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修(1987)、桃山学院大学(1992)、放送大学(2015)、明治大学(2020-)など。

一般向け講座：佛教大学四条センター(1988)、京都市国際交流会館(1990)、NHK京都文化センター(1991)、高槻市磐手公民館(1991)、西宮市鳴尾公民館(1993)、朝日カルチャーセンター新宿(1995)、朝日カルチャーセンター神戸(1996)、しがぎん経済文化センター(2000-01)、朝日カルチャーセンター京都(2018)など。

各種外部委員

関西日印協会評議委員(1992-2003)、島根県古代文化センター客員研究員(1993-2006)、滋賀県琵琶湖特定水域高度処理基本計画検討委員会委員(1995)、文化庁「海外の宗教事情に関する調査」調査協力員(2000-04)、関西学院大学出版会常任委員(2002-)、南山大学人類学研究所外部評価委員(2008)、宗教文化教育推進センター連携委員(2011-)、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構専門委員(2016)、国立民族学博物館共同研究体制評価委員会(2015)、国立民族学博物館研究水準外部評価委員会(2019-)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究専門委員会委員(2019-)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会委員(2019-)など。

学会

日本文化人類学会(旧日本民族学会)、日本南アジア学会、日本宗教学会、美学会、(東北)印度学・宗教学会(1995年退会)、観光学術学会(2015年退会)、「宗教と社会」学会(2018年退会)、環境社会学会(2018年退会)、日本平和学会(2019年退会)、日本オーラル・ヒストリー学会(2020年退会)。『宗教と社会』『南アジア研究』『オーラル・ヒストリー研究』『文化人類学』など学会誌の編集に携わる。

査読誌

American Ethnologist, *Annals of Tourism Research*, *Anthropological Quarterly*, *Current Anthropology*, *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 『文化人類学』、『南アジア研究』、『宗教と社会』、『オーラル・ヒストリー研究』、『アジア経済』、『現代インド研究』、『ジェンダー&セクシュアリティ』(国際基督教大学)、『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』(京都大学)、『国立民族学博物館研究報告』、『人文学報』(京都大学)、『人間文化創成科学論叢』(お茶の水大学)、『FAB』(国際ファッション専門職大学紀要)、『文化人類学研究』(早稲田大学)など。

国外受け入れ教員

Jonathan.P.Parry(JSPS、1993.3-4)、Timothy Yun Hui Tsu(人文研、1997.4-12)、Jan van Bremen(人文研、2002.2-2003.9)、Sabine Frühstück(人文研、2003.2-8)、Eyal Ben-Ari(人文研、2005.9-2006.3)、田村恵子(人文研、2009.2-5)、Timothy Fitzgerald(人文研、2009.7-2010.1)、Benjamin Penny(人文研、2011.1-3)、Bernhard Hadolt(人文研、2011.7-10)、Frank Fanselow(人文研、2012.5-9)、Reddy Sreedevi(博報堂教育財団、2015.9-2016.8)、Rupert Cox(JSPS、2015.12-2016.1)、Nissim Otmazgin(人文研、2016.7-2017.1)など。

その他

*Anthropology Today*のEditorial Panel(1988-2007)に参加する。1996年5月に発足した京都人類学研究会の立ち上げに関わり、2年目以後複数回代表を務める。雑誌『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』(2007-2019、N19)の編集代表を務める。LSEのThesis Writing-Up Seminarをモデルに、南アジアをテーマに博士論文や投稿論文の執筆を支援するセミナーを組織した。1998-2008年の10年間で100回、延べ131人の発表があった。京都大学、総合研究大学院大学(国立民族学博物館)、立命館などから参加。1994年9月近畿民具学会第4回実測図講習会修了。日本学術振興会特別研究員等ならびに基盤研究等2段(文化人類学・民俗学)審査員、松下国際財団研究助成選考委員、公益信託澁澤民族学振興基金・澁澤賞選考委員などを務める。

博士論文審査担当一覧

学位授与年、対象者、論文タイトルの順に記載

1993年に開設した京都大学人間・環境学研究科で大学院教育に携わりました。在籍中に博士論文審査の主査になったのは17本。退職した後も8人の学生の指導にあたっています。副査のほとんどは、同僚だった福井勝義、菅原和孝、山田孝子の各先生の指導学生が提出した論文の審査でした。

京都大学

[主査] (課程博士)

2002年	石井 美保 『精霊たちのフロンティア —— ガーナ南部のココア開拓移民地域における宗教実践の変容』
2003年	川村 清志 『近代日本における故郷表象の動態と文化概念の節合 —— 石川県鳳至郡門前町七浦地区1915~2000』
2005年	岩谷 彩子 『南インドの商業移動民ヴァギリの生活実践と信仰変容 —— ミメーシスの文化人類学に向けて』
2008年	李 雯文 『重層的な社会空間としてのカトリック村 —— 中国陝西省におけるカトリック村落についての文化人類学的研究』
2008年	Tina Vesselinova Peneva <i>The Invention of Wagyu Beef and Contemporary Meat-eating Practices in Japan: An Anthropological Study of Omi Beef Production and Consumption</i>
2008年	小池 郁子 『西アフリカ、ヨルバの神々をもとめて —— アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動』
2009年	山本 達也 『伝統／現代を生きるディアスポラ —— 北インド・ダラムサラのチベット難民舞踏集団TIPAを事例に』
2009年	宮西 香穂里 『沖縄における米軍兵士と日本人女性との結婚と家族生活 —— 軍隊の文化人類学に向けて』
2012年	松嶋 健 『現実のユートピア —— イタリアにおける精神医療の生態学的転回と制度化』
2013年	河西 瑛里子 『女神運動から紡ぎだされるつながり —— イギリス南西部グラストンベリーにおけるオルタナティブ・スピリチュアリティの文化人類学的研究』
2016年	神本 秀爾 『ジャマイカと日本における「生き方」としてのラスタファラーイの変容に関する文化人類学的研究』
2017年	ケイトリン・C・コーカー (Caitlin Christine Coker) 『アフェクトの人類学 —— 暗黒舞踏における生成変化』
2017年	中屋敷 千尋 『つながりの文化人類学 —— インド・チベット系社会における親族と非親族をめぐって』

[副査] (課程博士)

2001年	李 仁子 『移住者の「故郷」とアイデンティティ —— 在日済州道出身者の移住過程と葬送儀礼からみる「安住」の希求』
2001年	尾張 睦 『異郷の中の故郷 —— ヴァルター・ベンヤミンにおける幼年時代の意味について』
2003年	Anka Veronica Badurina <i>Creating Gendered Television Advertisements: Anthropological Studies in a Japanese Advertising Agency</i>
2004年	佐藤 知久 『HIVと他者性 —— 合州国ブルックリンの事例から』
2006年	三田 牧(川端 牧) 『糸満における海と魚の民族誌 —— ウミンチュウとアンマーの自然を読む知識』
2006年	風戸 真理 『モンゴル国牧畜地域における政治経済変化と遊動的牧畜 —— 社会主義から市場経済への移行のなかで』
2006年	城田 愛 『エイサーにみるオキナワ人たちのアイデンティティ —— ハワイ沖縄系移民における「つながり」の創出』
2008年	高橋 そよ 『サンゴ礁資源利用に関する人類学的研究 —— 沖縄・佐良浜の事例から』
2010年	熊谷 瑞恵 『中国新疆ウイグル族の食べかたと住まいかたに関する人類学的研究 —— 女性のつきあいの場となる住居をめぐって』
2010年	大野 哲也 『冒険的な旅から冒険的な生き方へ —— アジアにおける日本人バックパッカーの「自分らしさ」の軌跡から』
2011年	田村 うらら 『市場経済と接合するものづくりの生活世界 —— トルコ南西部絨毯生産の維持と変容』
2012年	渡辺 文 『オセアニア芸術のうまれるとき —— アートの集合性をめぐる人類学的研究』
2013年	比嘉 夏子 『相互行為から生成する経済 —— トンガ王国村落における贈与とふるまいの民族誌』
2014年	趙 芙蓉 『シャマンとして生きる —— 中国内モンゴルのホルチン・シャマニズムの再活性化の事例より』
2016年	岡安 裕介 『日本という言語空間における無意識のディスコース』

[主査] (論文博士)

- 2005年 舟川 美和(金谷 美和) 『布がつくる社会関係——インド・グジャラート州カッチ県の染色業者カトリーの事例より』
- 2008年 棚瀬 慈郎 『インドヒマラヤのチベット系諸社会における婚姻と家運営——ラホール、スピティ、ラダック、ザンスカールの比較とその変化』
- 2014年 中生 勝美 『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』
- 2016年 福浦 厚子 『交霊会におけるシャーマンの実践——シンガポール華人系寺廟の文化人類学的研究』

[副査] (論文博士)

- 2001年 林 行夫 『北タイ農村における実践仏教の生成と変容——ラオ人社会の宗教民族誌』
- 2005年 串田 秀也 『会話における参加の組織化の研究——日本語会話における「話し手」と「共一成員性」の産出手続き』
- 2006年 宮脇 幸生 『境界の構築——エチオピア国家支配に抗する少数民族ホルの生存戦略』
- 2006年 神田 柳蘭(王 柳蘭) 『「難民」から「華」人への道——戦乱と越境に生きる北タイ雲南人の民族誌』

他部局・他大学副査

- 1995年 Tarini Rajadhyaksha (University of Delhi) *Symbolism of the Female Life-Cycle with Special Reference to the Female Body in Everyday Life: A Case from Maharashtra* (書面審査)
他に、Annamalai大学をはじめとするインドの大学に提出された博士論文を多数書面審査しました。
- 1998年 杉本 星子(総合研究大学院大学) 『南インドの農村におけるカースト内関係としての親族——コング・ヴェッラーラの事例研究』
- 2004年 近藤 光博(東京大学) 『宗教・ナショナリズム・暴力——ヒンドゥー・ナショナリスト運動のイデオロギーに関する研究』
- 2005年 橘 健一(東京外国語大学) 『市民という名の民族——ネパール、プラジャにおける4つの異人表象から見た象徴世界と民族的自己イメージに関する研究』
- 2010年 有蘭 真代(京都大学) 『国立ハンセン病療養所における集合的实践——政治的实践・文化的实践・生活实践を事例として』
- 2013年 土井 清美(東京大学) 『サンティアゴ・デ・コンポステラへの徒歩の旅に関する民族誌的研究——「あいだ」における生』
- 2014年 安井 大輔(京都大学) 『現代日本社会の多文化接触領域におけるエスニシティ生成過程の研究——横浜市鶴見区にみられる沖縄移民の文化実践を事例にして』
- 2016年 古川 直子(京都大学) 『セクシュアリティ概念の刷新に向けて——S・フロイトの精神分析の視点から』
- 2019年 工藤 さくら(東北大学) 『現代ネワール社会における初潮儀礼と《テーラヴァーダ》』
- 2021年 張 詩雋(京都大学) 『宗教美術の身体美学——チベット・タンカの人類学的研究』

語ったこと・書いたこと

売春街 Chidambaram フィールド ナショナリズム Globalization
Power 時間 U.S. 水 フェティシズム シンガポール
裸 Sexuality ムンバイ 親族武器 カースト 知 ヒンドゥー寺院
Hinduism 旅 在日米軍 構造 タミル漁村 India イヤラシ War
Culture 共同体 軍事身体 南アジア Anthropology 村落
歴史人類学 南インド ヒンドゥー 母地 曳網漁 兵士
神 Temple 展開 女たち 歴史 スリランカ South 聖
神々 トラウマ 技術 米軍 アジア 暴力 証 ヒンドゥー 教 血
個 女性 供儀 ヒノキ 経験 父 女神 労働 組織 実践
Japan 愛 漁村 人類学 客 世界 癒し
技術 米軍 漁村 人類学 寺院 感情 顔
村 調査 男性 変容 王ノ 売春 性 変貌 体験
原爆 在日社会 環境問題 基地 現代インド 夜 宗教 儀礼 文化 日本 Hindu sati
感情労働 民族 戦友性暴力 祭祀 チダンバラム ジェンダー Military 技法 ひと 供物
Male Traumatic 感情労働 民族 戦友性暴力 祭祀 チダンバラム ジェンダー Military 技法 ひと 供物
邦語 ファッション ギョウキョウ セクシュアリティ セックスワーカー タミル人
妖術 Patrons セクシュアリティ セックスワーカー タミル人
Experiences アウシュヴィッツ エロス 初潮 Korea Religion
オーガズム 抵抗 資源 Devotees 比較 民族紛争

助成金 (代表者になったものに限る)

期間(年度)、助成団体・課題名、その関連プロジェクトや成果(→項目記号)、コメントの順に記載

私にとって助成金の申請は楽しみの一つです。採択された研究課題は当時の関心を反映しています。スリランカ・インドから軍隊へ、さらにジェンダー暴力へという大きな流れを見ることができます。助成金なしで学術書を出すことは極めて困難です。この点で人文科学研究所には感謝しております。

研究助成

- A1** 1982年 Malinowski Memorial Award
A1、A2、A3、A4はスリランカでの調査を支援する助成金でした。
- A2** 1982年 Radcliffe-Brown Memorial Award
- A3** 1982年 Wenner-Gren Research Fund for Anthropological Research
- A4** 1982年 London University Central Fund
- A5** 1983-1984年 Honda Award 奨学金
この奨学金を受けることがわかったおかげで、いつになったら終わるのか分からなくなっていたフィールドワークにケリをつけて急遽ロンドンに戻ることとなります。調査開始から17ヶ月を経た頃でした。
- A6** 1988年 南葵育英会研究助成
「環インド洋社会の人類学的研究」
- A7** 1992-1994年 科学研究費補助金 一般研究(C)
「南アジアを中心とする女神崇拜の社会人類学的研究」 →C2
- A8** 1993年 味の素食の文化センター食文化研究助成
「南インドの寺院儀礼と家庭祭祀における供物の人類学的研究」 →I27、R4
- A9** 1993-1994年 旭硝子財団研究助成
「スリランカの漁民組織への民族紛争の影響について——社会変化と海洋資源利用の関係についての文化人類学的研究」
- A10** 1995-1998年 科学研究費補助金 重点領域研究
「文化人類学における家族・親族領域を中心としたフィールドデータの処理と分析」
その後メンバーの杉藤重信さんが中心となってアライアンス(Alliance 3.3)という親族データを処理して図解するためのソフト開発を始めました。
- A11** 1995-1997年 科学研究費補助金 基盤研究(C)
「南インド・タミルナード州の寺院管理法の文化的・政治的背景と訴訟記録の分析」 →Q3
- A12** 1997-1998年 旅の文化研究所研究助成
「在日米軍関係者の観光活動——その生活世界と日本観の人類学的研究」 →K38、R7
授賞式で宮田登先生に励まされたこともあり、『都市のフォークロア』にならって『在日米軍のフォークロア』を夢想しました。この助成金をきっかけに科研費や民間の助成金に採択されることとなります(A13、A14、A15、A16、A17)。
- A13** 1998-2000年 科学研究費補助金 基盤研究(B)
「個をめぐるミクロ人類学確立に向けての基礎研究」 →C5

-
- A14 1998-2000年 科学研究費補助金 萌芽的研究
「基地内活字メディアの分析を中心とする在日米軍社会の文化人類学的研究」
- A15 2000年 庭野平和財団研究助成
「軍隊における聖職者の役割」 →I20
- A16 2001-2003年 科学研究費補助金 基盤研究(C)
「米軍と自衛隊に属する女性兵士の実態と表象についての文化人類学的研究」 →Q6
- A17 2003年 京都大学教育研究振興財団 学術研究推進助成
「アジアの軍隊の歴史・人類学的研究——ジェンダー規範、地域社会、表象を中心に」 →A17、A18、C8
- A18 2004-2006年 科学研究費補助金 基盤研究(B)
「東アジアと東南アジアを中心とする軍隊の歴史人類学的研究」 →C9
- A19 2008-2011年 科学研究費補助金 基盤研究(B)
「アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究」 →C13
- A20 2011-2014年 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究
「現代日本社会におけるグローバル化する性産業についての文化人類学的研究」 →E18、E19、I36
- A21 2012年 総合地球環境学研究所
「紛争と環境問題」(IS) →A21
環境をキーワードに軍隊の研究から基地と地域社会との関係の研究へと視点を変えることになりました。
- A22 2013-2014年 総合地球環境学研究所
「軍事環境問題の領域横断的研究」(FS) →A24、C16
- A23 2013-2014年 一般社団法人住総研研究助成
「シェア居住における主体形成に関する文化人類学的研究——日英の比較を通じて」 →R21
- A24 2013-2015年 科学研究費補助金 基盤研究(B)
「地中海から西・南アジア地域の人々に関わる「名誉に基づく暴力」の文化人類学的研究」
→A25、C17、E24、E25、O14
拙著「名誉殺人」(I34)に関心を示してくれた辻上奈美恵さんと村上薫さんに刺激を受けて応募した科研によるプロジェクト。彼女らとは、椎野若菜さんの研究会(D41)で一緒でした。その後拡大し(A25、C20)、最終年度に原稿を集めて出版助成に応募(B10)、これが採択されプロジェクト終了の翌年に論文集(O17)を出版します。休みなしで大変でしたが、とんとん拍子に進んだという点では恵まれたプロジェクトでした。
- A25 2015-2017年 三菱財団人文科学研究助成
「アジア・太平洋地域を中心とする軍事環境問題の比較研究」 →C18
- A26 2016-2019年 科学研究費補助金 基盤研究(A)
「〈ジェンダーに基づく暴力複合〉の文化人類学的研究」 →C20、O17
- A27 2019-2023年 科学研究費補助金 挑戦的研究(開拓)
「もの、語り、アート、宗教にみるトラウマ体験の共有と継承——ホロコーストと原爆投下」 →C23
- A28 2021年 JR西日本あんしん社会財団助成
「メモリアル・ファッションの文化人類学的研究——衣服に見る記憶、慰霊、癒し」
-

出版助成

- B1 1997年 科学研究費補助金 成果公開促進費(学術図書)
田中雅一編『暴力の文化人類学』 →N1
- B2 2001年 科学研究費補助金 成果公開促進費(学術図書)
田中雅一著『供犠世界の変貌』 →P3
- B3 2002年 トヨタ財団「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成
ルイ・デュモン『ホモ・ヒエラルキクス』 →S2
- B4 2009年 科学研究費補助金 成果公開促進費(学術図書)
田中雅一編『フェティシズム研究 1 フェティシズム論の系譜と展望』 →N4
- B5 2010-2012年 京大人文学研究所出版助成
田中雅一他編『コンタクト・ゾーンの人文学』3巻 →09、010、012
- B6 2013年 科学研究費補助金 成果公開促進費(学術図書)
田中雅一編『フェティシズム研究 2 越境するモノ』 →N5
- B7 2014年 科学研究費補助金 成果公開促進費(学術図書)
田中雅一編『軍隊の文化人類学』 →N7
- B8 2016年 京大人文学研究所出版助成
田中雅一編『フェティシズム研究 3 侵犯する身体』 →N8
- B9 2017-2018年 京大人文学研究所出版助成
田中雅一他編『トラウマ研究』2巻 →015、016
- B10 2020年 科学研究費補助金 成果公開促進費(学術図書)
田中雅一他編『ジェンダー暴力の文化人類学』 →017

共同研究

研究会名(プロジェクト基盤機関)、期間(年度)、代表者、その成果や関連プロジェクト(→項目記号)、コメントの順に記載

プロジェクトは助成金によるものと大学の活動の一部として実施されるものの二つに大きく分かります。両者が密接に結びついている場合(C11、C21、D3、D6)もあります。機関によって、また代表者によってもプロジェクトのスタイルは多様です。人文研の共同研究は月2回、年15回ほどの会合から成っていましたが、他の機関だと年に数回です。「女神クラブ」(F26)や「セックスワークセミナー」(F93)など、私的なものは省略しています。

代表プロジェクト(発表は省略)

- C1 「儀礼的暴力の研究」(人文研)
1990-1993年 田中 雅一 →N1
初めて組織した共同研究会です。民博で田辺繁治氏が組織していた研究会「文化的プラクティスとイデオロギー」の後継という意識も強く、そのメンバーに大変助けられました。
- C2 「女神——性と聖をめぐる比較文化論」(民博)
1991-1993年 田中 雅一 →N2
民博の併任助教授就任に伴って組織した共同研究会。
- C3 「主体・自己・情動構築の文化的特質」(人文研)
1994-1997年 田中 雅一 →C5、O5
- C4 「文化人類学における家族・親族領域を中心とするフィールド・データの処理と分析」(科研・重点領域)
1995-1998年 田中 雅一
- C5 「個をめぐるマイクロ人類学確立に向けての基礎研究」(科研・基盤研究(B))
1998-2000年 田中 雅一 →O5
- C6 COE「西欧知識人のインド体験と近代知の形成」(特別推進研究(COE))
1998-2000年 田中 雅一
D26の一部として実施しました。
- C7 「フェティシズム研究の射程」(人文研)
2000-2004年 田中 雅一 →C10
- C8 「アジアの軍隊の歴史・人類学的研究——ジェンダー規範、地域社会、表象を中心に」(京都大学教育研究振興財団)
2003年 田中 雅一 →C9
- C9 「東アジアと東南アジアを中心とする軍隊の歴史人類学的研究」(科研・基盤研究(B))
2004-2006年 田中 雅一 →C13、E6、E7、F60、Q7
- C10 「フェティシズムの社会・文化的脈絡」(人文研)
2005年 田中 雅一 →E10、E11、N4、N5、N8
- C11 「複数文化接触領域の人文学」
(人文研、2006-08年 稲葉穰代表・科研・基盤研究(B)「複数文化接触領域としての中央アジアにおける宗教史の再構築」)
2006-2009年 田中 雅一 →E8、E9、E11、O9、O10、O11、O12
- C12 京都大学サステナビリティ・イニシアティヴ(サステナビリティ学連携研究機構・京都大学拠点)
2007-2009年 田中 雅一 →E12、F69、Q8、R13

- C13 「アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究」(科研・基盤研究(B))
2008-2011年 田中 雅一 →N7
- C14 「多文化世界としての現代インド」(人間文化機構プログラム・現代インド地域研究プロジェクト・京都大学中心拠点)
2009-2014年 田中 雅一 →I34、O18
- C15 「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究——物語からモニュメントまで」(人文研)
2010-2014年 田中 雅一 →C23、E20、E22、E26、H34、O15、O16
- C16 「軍事環境問題の領域横断的研究」(総合地球環境学研究所)
2013-2014年 田中 雅一 →C18、E23、F81、F85、G23
- C17 「地中海から西・南アジア地域の人々に関わる「名誉に基づく暴力」の文化人類学的研究」(科研・基盤研究(B))
2013-2015年 田中 雅一 →C20、E24、E25、O14
- C18 「アジア・太平洋地域を中心とする軍事環境問題の比較研究」(三菱財団)
2015-2017年 田中 雅一 →F91
- C19 「ウメサオ・スタディーズの射程」(人文研)
2015-2017年 田中 雅一
- C20 「<ジェンダーに基づく暴力複合>の文化人類学的研究」(科研・基盤研究(A))
2016-2019年 田中 雅一 →C21、O17
- C21 「暴力・宗教・性の語りをめぐる」(人文研, 2016-19年 科研・基盤研究(A)「<ジェンダーに基づく暴力複合>の文化人類学的研究」)
2018-2019年 田中 雅一/菊地 暁 →O17
私が予定より一年早く退職したこともあり、2年目は菊地暁さんが代表となりました。
- C22 「コンタクト・ゾーンとしての現代ファッション」(国際ファッション専門職大学)
2019-2021年 田中 雅一 →H65
- C23 「もの、語り、アート、宗教にみるトラウマ体験の共有と継承——ホロコーストと原爆投下」(科研・挑戦的研究(開拓))
2019-2022年 田中 雅一
- C24 「メモリアル・ファッションの文化人類学的研究——衣服に見る記憶、慰霊、癒し」(JR西日本あんしん社会財団)
2021年 田中 雅一
- C25 「ファッション教育の比較研究」(国際ファッション専門職大学)
2022年 田中 雅一
- C26 「人間・生物・時間」(けいはんなプラザ)
1992-1997年 横山 俊夫・田中 雅一 →F32
横山俊夫さんが主導し理系の方も何人か参加した異色の研究会でした。途中からでしたが、京都南部に位置するけいはんなプラザホテルで年に2回2泊3日で実施されました。主要メンバーの井上民二さんが調査地に向かう途中、飛行機事故で亡くなっています。成果論集は出せませんでしたが、活動記録は冊子として残っています。当時助手だった安富歩、池上高志、四方哲也、郡司幸夫ら錚々たる若手メンバーに加え、鏡リュウジ、深井晃子、楽吉左衛門ら豪華ゲストの参加がありました。
- C27 「植民地主義と人類学」(人文研)
1997-1999年 山路 勝彦・田中 雅一 →O2
山路勝彦さん(関西学院大学教授)を招聘し、人文研で開催した研究会。その成果は大部の論文集(O2)に結実しました。

C28 「グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性」(人文研)

2010-2012年 奥山直司・田中 雅一

国立大学附置研究所の共同利用・共同研究拠点化に伴い、人文研は2010年度から「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」に認定されます。その活動の一環として行われた最初の公募で採択された研究会です。

主要参加プロジェクト

D1 「文化的プラクティスとイデオロギー——人類学的認識論との関連において」(民博)

1984-1987年 田辺 繁治 →F7、K1

D2 「民族誌記述の方法をめぐって」(人文研)

1986-1988年 谷 泰 →F4、K3

D3 「ASIANIZED INDIAの宗教と言語」

(民博、1987-89年 科研・海外学術「ガンジス河流域の複合文化形成動因の比較研究——アリア文化と土着文化の相互関係」)

1987-1989年 長野 泰彦 →I11、K5

D4 「ヒンドゥー的世界観に関する民族学的研究」(民博)

1988-1990年 永ノ尾 信悟

D5 「性と文化表象に関する比較研究」(民博)

1988-1990年 須藤 健一 →I9、K8

D6 「上座部仏教社会の宗教」

(民博、1989-91年 科研・国際学術「上座部仏教圏における宗教と社会——東南アジア・雲南・スリランカの比較研究」)

1988-1990年 田辺 繁治 →F16、K6

D7 「家族とハウスホルドの比較史的研究」(人文研)

1989-1991年 前川 和也 →K7

D8 「人文学のアナトミー」(人文研)

1991-1993年 山田 慶兒 →K13

D9 「東南アジアにおける「正統」の波及・形成と変容」(AA研)

1991-1994年 石井 溥

D10 「コミュニケーションの自然誌」(人文研)

1991-1995年 谷 泰

D11 「宗教体系と民族誌記述の方法」(民博)

1992-1993年 田村 克己

D12 「ステイタスと職業」(人文研)

1992-1994年 前川 和也 →K18

D13 「数理民族学——その応用的研究」(民博)

1993-1994年 小山 修三 →A9

-
- D14 「ヒンドゥー儀礼の歴史性、地域性及び社会階層性に関する研究」(科研・総合研究(A))
1993-1995年 永ノ尾 信悟
- D15 「日本人はキリスト教をどのように受容したか」(国際日本文化研究センター)
1993-1996年 山折 哲雄 →K26
- D16 「島根半島祭礼行事調査」(島根県古代文化センター)
1993-1996年 白石 昭臣 →Q4、R6
- D17 「水産資源利用の人類学的研究——生態・歴史・文化」(民博)
1994-1995年 秋道 智彌
- D18 「民族誌的現在の歴史的文脈」(民博)
1994-1996年 栗本 英世 →I16、K27
- D19 「アジア諸国における環境観——持続可能な開発との関連において」((財)アジア太平洋センター国際連合大学プログラム)
1994-1996年 山折 哲雄 →F31、K20、K25
福岡のアジア太平洋センター主催で実施された国際共同研究。2回目は神戸・淡路大震災の直後に京都で開催され、メンバーのVeena Das教授が感動的なスピーチを行いました。
- D20 「近代社会における研究者の組織化——研究所・学会・学派」(人文研)
1994-1997年 阪上 孝 →I17
- D21 「ジェンダー」(FACID)
1997年 内山田 康
- D22 「認知と実践——人類学的アプローチ」(民博)
1997-1998年 田辺 繁治 →D27
- D23 「環太平洋地域の文化とシステムのダイナミクスに関する研究」(科研・基盤研究(A))
1997-1999年 小泉 潤二 →I21、K33
- D24 「「進化論」を読む」(人文研)
1998年 阪上 孝 →D28
- D25 「南アジア世界の構造変動とネットワーク——多元的共生社会の発展モデルを求めて」(科研・特定領域研究(A))
1998-2001年 長崎 暢子 →E2、F43
- D26 「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・変容・転成」(特別推進研究(COE))
1998-2002年 白石 隆 →Q5
- D27 「実践コミュニティの再検討」(民博)
1999年 田辺 繁治 →K32
- D28 「「進化論」と社会」(人文研)
1999-2001年 阪上 孝 →K34
- D29 「ポルノグラフィ研究——エロスとその表象をめぐって」(人文研)
1999-2001年 大浦 康介 →I25、K50
-

-
- D30 「映像による国際理解に向けての障害と可能性の学際的検証／越境する民俗文化」(トヨタ財団)
1999-2001年 山下 博司
国際シンポジウム「インド映画」(2000.10.20)を国際交流基金で開催し、コメンテータとして参加した。
- D31 「戦死者をめぐる宗教・文化の研究」(科研・基盤研究(B))
2000-2002年 川村 邦光 →F44
- D32 「アフリカ・アジアにおける政治文化の動態」(AA研)
2000-2002年 小川了
- D33 「海外の宗教事情に関する調査」(文化庁)
2000-2003年 阿部 美哉 →R10
- D34 「社会空間と変容する宗教」(AA研)
2000-2004年 西井 涼子 →K38
- D35 「日本における文化人類学教育の再検討——新たな社会的ニーズのなかで」(科研・基盤研究(B))
2001-2002年 山下 晋司 →T14
- D36 「「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究」(科研・基盤研究(B))
2001-2003年 竹沢 泰子
- D37 「贈与交換経済における貨幣資源の浸透」(科研・特定領域研究)
2002-2006年 春日 直樹 →K41
- D38 「人間社会の進化史的基盤研究(1)」(AA研)
2005-2008年 河合 香吏 →K44、K54
- D39 「南アジア諸国における宗教的マイノリティと宗教的共存に関する比較研究」(科研・基盤研究(B))
2006-2008年 外川 昌彦 →D48
- D40 「社会空間論の再検討——時間的視座から」(AA研)
2007-2009年 西井 涼子 →K47
- D41 「「シングル」と社会——人類学的研究」(AA研)
2007-2009年 椎野 若菜 →K57、K58
- D42 「「もの」の人類学的研究——もの、身体、環境のダイナミクス」(AA研)
2007-2009年 床呂 郁哉 →K46、K69
- D43 「日本における人類学研究の歴史」(民博)
2007-2009年 山路 勝彦 →K52
- D44 「第一次世界大戦の総合的研究に向けて」(人文研)
2007-2014年 山室 信一・岡田 暁生 →L6
この研究会への参加をきっかけに、2010年以後ベルギー・イープルを繰り返し訪れることになる。
- D45 「平和・紛争・暴力に関する人類学的研究の可能性」(民博)
2008-2010年 小田 博志
-

-
- D46 「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(科研・基盤研究(A))
2008-2010年 星野 英紀 →D49
- D47 「人間社会の進化史的基盤研究(2)」(AA研)
2009-2011年 河合 香吏 →K53、K66
- D48 「南アジア地域における宗教紛争と平和構築に関する比較研究」(科研・基盤研究(B))
2010-2012年 外川 昌彦 →R18
- D49 「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(科研・基盤研究(B))
2011-2014年 井上 順孝
- D50 「平成 24 年度宗教法人等の運営に係る調査」(文化庁)
2012年 石井 研士 →R19
- D51 「人間社会の進化史的基盤研究(3)」(AA研)
2012-2014年 河合 香吏 →K62、K70
- D52 「「もの」の人類学的研究(2)——人間／非人間のダイナミクス」(AA研)
2014-2016年 床呂 郁哉 →K71
- D53 「環世界の人文学——生きもの・なりわい・わざ」(人文研)
2015-2016年 大浦 康介 →D56
- D54 「人間社会の進化史的基盤研究(4)」(AA研)
2015-2017年 河合 香吏 →K75
- D55 「「わざ」の人類学的研究——技術、身体、環境」(AA研)
2017-2019年 床呂 郁哉
- D56 「生と創造の探究——環世界の人文学」(人文研)
2017-2019年 岩城 卓二 →L8
- D57 「人類学／民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」(民博)
2017-2022年 中生 勝美
- D58 「社会性の起原——ホミニゼーションをめぐる」(AA研)
2018-2020年 河合 香吏 →D60
- D59 「南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究」(AA研)
2018-2020年 外川 昌彦
- D60 「社会性の起原と進化——人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」(科研・基盤研究(S))
2019-2023年 河合 香吏
- D61 「環境問題の社会史的研究」(人文研)
2020-2022年 岩城 卓二
- D62 「身体性の人類学」(AA研)
2022-2024年 床呂 郁哉
-

企画(パネル・シンポジウムなど)

タイトル、実施年月日、企画名、会場、その成果(→項目記号)、コメントの順に記載

発表者として参加した場合はF、司会やコメンテーターとして参加した場合はHの項目に詳述しています。

- E1** 「暴力の人類学・人類学の暴力」
1996年11月30日 京都人類学研究会季節例会、京都文教大学
1996年に発足した京都人類学研究会の最初の季節例会。この研究会は梅棹忠夫が開始した「近衛ロンド」を前身としています。最初は近衛ロンドのシステムを引き継いで会員制で会費を徴収していましたが、事務が煩雑なため廃止し、代わりに参加費を取ることになりました。近衛ロンドの正式名称は京都大学人類学研究会でしたが、京都人類学研究会と名を改め、京都にある複数の大学に所属する研究者や学生へと活動の場を拡大することにしました。
- E2** 「南アジアの聖地をめぐるPolitics / Poetics/ Pop」
2000年12月7-8日 科研／特定領域(A)「南アジア世界の構造変動とネットワーク」シンポジウム、コープ・イン・京都、京都市 →F45
- E3** 「現代ファッションと人類学」
2000年12月16日 京都人類学研究会季節例会、京都大学
- E4** 「人類学のワイルド・サイドを歩こう」
2002年12月14日 京都人類学研究会季節例会、京都大学
- E5** 「複製技術時代の文化人類学」
2004年7月10日 京都人類学研究会季節例会、京都大学 →F53
- E6** 「戦争と軍隊の研究〈が／を〉変える文化人類学」
2005年5月21日 第39回日本文化人類学会分科会、北海道大学 →F55
- E7** Military Studies in an Anthropological Perspective
2006年2月18-19日 科研・基盤(B)「東アジアと東南アジアを中心とする軍隊の歴史人類学的研究」国際シンポジウム、三沢国際交流教育センター(Eyal Ben-Ari氏との共同企画)、三沢市 →F60、Q7、R11
- E8** 「複数文化接触領域の人文学のために」
2006年6月29日 京都大学人文科学研究所・人文学国際研究センター設立記念講演会、京都大学
2006年に設置された人文学国際研究センター主催の最初の公開講演会。ポスター・デザインは伊藤恵氏。彼女は私の企画だけでなく、人文研アカデミーのような人文研主催のシンポジウムのポスターを数多く手がけることになります(本書68ページ参照)。
- E9** 「コンタクト・ゾーンを生きる——複数文化接触領域の人文学のためにII」
2006年12月21日 京都大学人文科学研究所・人文学国際研究センター講演会、京都大学
- E10** War, Peace and Military in Asia
2007年4月6-7日 国際ワークショップ(Eyal Ben-Ari氏との共同企画)、パレスサイドホテル、京都市 →F66
- E11** 「コンタクト・ゾーンへの視角」
2007年6月28日、7月2日 人文研アカデミー連続国際セミナー、京都大学
- E12** 「社会・環境に与える人災と天災の影響」
2008年3月22日 京都大学グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」イニシアティブ4「地域の知的潜在力研究：生存基盤と社会ネットワーク・文化イニシアティブ」シンポジウム、京都大学 →F69、Q8、R13

-
- E13 「侵犯する身体・増殖する身体」
2008年5月31日 日本文化人類学会第42回研究大会大会事務局企画分科会、京都大学 →N4、N5、N8
久々に京都で開催された日本文化人類学会研究大会。参加者、発表者ともに想定外の多さで、懇親会場も超満員でした。その後、発表数の上限が設定され、懇親会の事前予約も徹底されます。本大会の経験に基づきプログラム作成の要点をまとめました。
- E14 「身体=フェティッシュをめぐる技術」
2008年6月5、12、20、26日 人文研アカデミー共同研究セミナー、京都大学 →G16、N4、N5、N8
- E15 「歓待の人類学」
2009年7月17日 京都人類学研究会季節例会、京都大学
- E16 「人類学の誘惑——京都からの回顧と発信」
2010年4月17日 京都大学人文科学研究所社会人類学部門創設50周年記念シンポジウム、京都大学 →07
懐かしい先生方から大学生まで多数の参加者で京大会館ホールに立ち見が出るほど盛況でした。今西錦司、梅棹忠夫両氏の影響力の大きさを確認する機会になりました。
- E17 Cute/Kawaii/Cawaii in the Age of Globalization: Japanese Fashion and Manga for Girls
2011年11月27日 京都大学人文科学研究所・人文学国際研究センター共催国際シンポジウム
(小野原教子氏との共同企画)、京都国際マンガミュージアム、京都市 →H32、Q11、R17
- E18 Sex Work in the Age of Globalization: Australia, Korea, Taiwan and Japan
2012年5月18日 科研費挑戦的萌芽研究「現代日本社会におけるグローバル化する性産業についての文化人類学的研究」国際ワークショップ(SWASHとの共同企画)、京都大学 →Q12
- E19 「客を叱りつける女たち——水商売・セックスワーク・感情労働」
2012年6月24日 第46回日本文化人類学会研究大会分科会、広島大学 →F78
- E20 Sexuality, Trauma and Social Suffering in East Asia
2013年5月18日 人文科学研究所共同研究「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」
国際ワークショップ(成定洋子氏との共同企画)、パレスサイドホテル、京都市
- E21 On Negative Commons: Bases, Battlefields, Nuclear Testing Grounds and other Military Sites
2013年6月5日 国際コモンズ学会第14回世界大会パネル(Chris Ames氏との共同企画)、
郡内地域産業振興センター、富士吉田市
本パネルで提示した「負のコモンズ」という視点は、後に「ダークコモンズ」となって刷新されることとなります(G37)。
- E22 War, Traumatic Experiences and the Arts
2013年11月10日 総合地球環境学研究所共同研究「軍事環境問題の領域横断的研究」国際ワークショップ、
京都大学
- E23 「軍事環境問題の現在——基地・戦争・核実験」
2014年5月29日、6月5、12、19、26日 人文研アカデミー連続セミナー、京都大学 →G23
- E24 「名誉に基づく暴力」
2015年5月31日 日本文化人類学会第49回研究大会分科会、大阪国際交流センター(国立民族学博物館)、
大阪市 →O14
- E25 「名誉・暴力・ジェンダー——中央アジア、インド、中東からの視点」
2015年12月12日 科研・基盤研究(B)「地中海から西・南アジア地域の人々に関わる「名誉に基づく暴力」の
文化人類学的研究」公開講演会、京都大学東京(品川)オフィス、港区 →G25、O17
-

-
- E26** | **Social Sufferings and Traumatic Experiences: An Anthropological Perspective**
2016年1月9日 京都大学人文科学研究所共同研究「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」
国際シンポジウム、京都大学
暴力など社会的苦悩について多大な成果をあげたVeena Das教授を迎えてのシンポジウム。 →[H46](#)
- E27** | 「液状化する親密圏」
2016年6月16、23、30日、7月7、14日 人文研アカデミー10周年記念連続セミナー、京都大学東京(丸の内)
オフィス、千代田区 →[G26](#)
- E28** | 「「紛争」と「和解」の正義論」
2016年11月19日 京都人類学研究会11月シンポ、京都大学
- E29** | 「医療人類学にとってナラティブとは何か？」
2017年2月4日 人文科学研究所シンポジウム(澤野美智子氏との共同企画)、京都大学 →[H54](#)
→『Contact Zone／コンタクト・ゾーン』10、2018年
- E30** | 「証言・告白・愁訴——医療と司法における語りの現場から」
2017年11月11日 人文科学研究所シンポジウム(澤野美智子氏との共同企画)、京都大学 →[H55](#)
→『Contact Zone／コンタクト・ゾーン』11、2019年
- E31** | 「いま、グローバルにジェンダー暴力を考える」
2019年4月13日 京都人類学研究会シンポジウム、京都大学 →[O17](#)
- E32** | 「越境するジェンダー暴力——ローカルからグローバルへ」
2019年10月5日 南アジア学会第32回全国大会分科会、慶應義塾大学 →[O17](#)

研究発表(学術大会、シンポジウムなど)

タイトル、実施年月日、詳細(イベント名、会場)、その成果(→項目記号)、コメントの順に記載

学術大会やシンポジウムでの発表を中心に掲載しました。研究会での発表は、記録に値すると判断したものに厳選しました。

- F1** 「浄・不浄の構造について——インドの一事例」
1979年6月17日 東北印度学・宗教学会第22回学術大会、東北福祉大学
初めての学会発表。
- F2** 「ヒンドゥ供犠論からみた憑依と司祭職」
1986年9月15日 日本宗教学会第45回学術大会、京都大学 →I6
- F3** 「ヒンドゥ村祭におけるカーリー女神の変貌」
1986年11月2日 日本人類学会・民族学会第40回連合大会、九州大学 →I3
日本民族学会(現・日本文化人類学会)での初めての発表。司会は小西正捷先生でした。
- F4** 「ヒンドゥ・パンテオンの体系的記述における諸問題」
1986年11月10日 京都大学人文科学研究所共同研究「民族誌記述の方法をめぐって」(代表：谷 泰)、
京都大学 →K3
その後長いお付き合いとなる人文研での最初の発表です。
- F5** 「ドラヴィダの文化と民族」
1986年12月2日 国立民族学博物館共同研究「日本語系統論の方法に関する基礎的研究」(代表：崎山理)、
国立民族学博物館
- F6** 「スリランカにおける地曳網漁の労働組織について」
1987年1月28日 近衛ロンド第768回例会、京都大学
楽友会館で毎週開催されていた近衛ロンドにおける初めての発表。幹事を含め参加者は数名というのが常態でした。この後、論文
化(K40)に向けて繰り返し発表することになります(F10、F12、F28、F51)。近衛ロンドでは、その後1995年まで10回発表します。
- F7** 「ヒンドゥ儀礼における「個人主義」——誓願儀礼カーヴァディをめぐって」
1987年2月28日 国立民族学博物館共同研究「文化的プラクティスとイデオロギー——人類学的認識論との
関連において」(代表：田辺繁治)、国立民族学博物館 →K1
- F8** 「ヒンドゥ誓願儀礼における救済の構造」
1987年5月23日 東北印度学・宗教学会第30回学術大会、東北大学 →K1
- F9** 「ヒンドゥ村落祭祀のシンボリズム」
1988年5月21日 東北印度学・宗教学会第31回学術大会 課題研究「宗教とシンボリズム」、大正大学
- F10** 「スリランカ地びき網漁の変容」
1988年6月25日 The研究会(代表：足立明)、京都大学
足立さんが北大に就職する前後に実施していた研究会。春日直樹、富山一郎氏らが参加していました。
- F11** 「スリランカ、タミル漁村の憑依」
1988年9月15日 日本宗教学会第47回学術大会、佛教大学
- F12** 「スリランカ漁村の地引網漁業」
1988年10月2日 日本南アジア学会創設大会、東京大学
京都までわざわざいらしてくれた原忠彦先生(1990年1月に55歳で急逝)から発表依頼がありました。先生にはインドの
ティルチラパッリでお世話になりました。ただし、学会誌創刊号には別稿I5を投稿。

- F13** 「子供たちによって裸にされた王様、さえも —— 南アジアの事例より」
1990年3月21日 国立民族学博物館特別研究『アジア・太平洋地域における民族文化の比較研究』
第1回シンポジウム「王権の位相」(代表: 松原正毅)、国立民族学博物館 →K2
タイトルは、デュシャンの「彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも」(通称・大ガラス)から。
- F14** 「南インドの寺院政策」
1991年11月23日 日本宗教学会第50回学術大会、早稲田大学
その後、時代や視点を変えて繰り返し発表することになるチダンバラムのナタラージャ寺院に関する研究成果です(F15、
F24、F30、F34、F40、F45)。
- F15** 「宗教・民族・国家 —— スリランカのヒンドゥー寺院政策をめぐって」
1992年3月11日 シンポジウム「上座部仏教社会の宗教」(代表: 田辺繁治)、国立民族学博物館 →K6
- F16** 「年中行事の重層性 —— 南アジアの祭祀を中心に」
1992年3月27日 第3回京都国際セミナー「安定期社会における人生の諸相: 年中行事」
(代表: 横山俊夫・藤井譲治)、京都ゼミナールハウス、京北町、京都府北桑田郡 →R2
- F17** 「女神の水・女神の血 —— スリランカと南インドの聖河信仰」
1992年7月18日 シンポジウム「水の原風景 —— 自然と心をつなぐもの」(代表: 福井勝義)、
白鳥ロードの会、安来市 →K16
清水寺改修の完成を祝って福井さんの故郷・安来市で行われた「清水」についてのシンポジウム。
その後長く続く島根との関係の端緒になりました(D16)。
- F18** 「ダルマ・バクティ・近代法 —— ヒンドゥー共同体観念の変貌と宗教」
1992年11月26日 国立民族学博物館特別研究『アジア・太平洋地域における民族文化の比較研究』
第4回シンポジウム「再生する宗教」(代表: 田辺繁治)、国立民族学博物館 →K14
- F19** 「自慰・オーガズム・愛という外部」
1993年2月24日 近衛ロンド第968回例会、京都大学 →I25、K50
この後、民博(院・特別ゼミ1994.7.19)、宇和島(F26)、愛知学院大学(F27)、人文研(助手会ゼミ1994.11.10)、葉山(G6)、
民博(H15)、ランカスター大学(F63)、上智大学(F74)、九大(集中講義夜の部2002.10.17)と、場所を変えて繰り返し行った
AV監督代々木忠作品についての初めての発表。嵩張るVHSを会場に持ち込んで代々木忠作品を上映しました。
- F20** 「宗教共同体と法・権力 —— インドの場合」
1993年5月8日 日本法社会学会学術大会ミニ・シンポジウム「法社会学のフロンティア 法の言説と権力」
(代表: 和田仁孝)、専修大学
当時注目されていたヒンドゥー・ナショナリズムについての発表。このテーマについても依頼に応じて繰り返し発表しました
(F21、F22、F23、F37)。 →『法秩序の近代と現代(法社会学46号)』日本法社会学会編、有斐閣、1994年、pp.86-92
- F21** 「現代インドの宗教情勢 —— Hindu-Fundamentalismの背景」
1993年6月23日 乾燥アジア談話会(代表: 桑山正進)、京都大学
- F22** 「インドのファンダメンタリズム」
1993年6月27日 「宗教と社会」学会第1回学術大会シンポジウム「“ファンダメンタリズム”の視点」、明治大学
→「ヒンドゥー・ファンダメンタリズム」として『ファンダメンタリズムとは何か —— 世俗主義への挑戦』井上順孝・大塚和夫編、
新曜社、1994年、pp.37-53に所収。
- F23** 「宗教と政治システム」
1993年7月9日 日本未来学会シンポジウム「宗教の未来」、学士会館、千代田区
→「スリランカ・インドにおける宗教問題」として『宗教の未来』日本未来学会編、東京書籍、1994年、pp. 191-197に所収。

- F24 「南インドにおけるヒンドゥー寺院管理法の歴史的展開」
1993年7月18日 第299回法制史学会近畿部会、同志社大学
- F25 「ポスト湾岸戦争時代の日本民族学」
1994年6月12日 日本民族学会第28回研究大会分科会「日本の人類学はあるか、ありうるか」
(代表：山下晋司)、東北大学
- F26 「知の技法と性の技法が交わる時」
1994年9月3日 女神クラブ(代表：田中雅一) 第1回会合、国民年金保養センターうわじま、宇和島市
民博で主催していた女神の研究会(C2)の後継親睦会。宇和島の後には、琵琶湖(2000.2.26-27)や天王寺・和歌山加太
(2001.3.3-4)などで不定期に会合を開催しました。翌日には関西国際空港が開港します。これを事前に知っていれば、
松山ー関空で帰ったのに、と少し後悔しました。
- F27 「癒しのポルノグラフィ」
1994年10月7日 癒し研究会(代表：林淳)、愛知学院大学
林、山中弘、島岩、引田弘道氏らが参加、この研究会でお会いした吉岡郁夫氏から大量の医学論文の複写をいただく。
これがK19の執筆につながりました。
- F28 「スリランカの地曳網漁——大きな歴史と個人の歴史」
1995年8月18日 第1回京大海洋人類学の会(代表：田中雅一)、京都大学
- F29 「スリランカ・タミル漁村の交叉イトコ婚」
1995年10月14日 日本人類学会・日本民族学会第49回連合大会、千葉大学 →I24、I29
調査から12年後に発表。論文(I24)になるのはさらに11年後。スロー・アカデミアの典型です。
- F30 「インド・ヒンドゥー寺院をめぐる訴訟」
1995年11月11日 日本宗教学会第54回学術大会、沖縄国際大学
- F31 「ヒノキは二度死ぬ——宮大工西岡常一の世界」
1995年11月25日 (財)アジア太平洋センター国際連合大学プログラム「アジア諸国における環境観——持続
可能な開発との関連において」(代表：山折哲雄)、福岡国際ホール、福岡市 →K20、K25
- F32 「エクスタシーの時間——性器的セクシュアリティ再考」
1996年3月12日 けいはんなマラソンセミナー第8回研究会(代表：横山俊夫・田中雅一)、けいはんなプラザ、
京都府相楽郡
→『けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」第八回研究会記録』株式会社けいはんな交流部、1997年、pp.24-28
- F33 「大東亜共栄圏のインド——戦中の邦語文献におけるカーストと民衆ヒンドゥー教」
1996年7月27日 第29回 南アジア研究集会、諏訪湖イン有賀、諏訪市 →F35、K29
大学院時代に初めて参加した集会は、1978年7月に戸隠で扇風機だけの2泊3日でした。直後に臼田わか子・松岡環両氏の
編集による『インド通信』(1978.10-2018.10)が発刊されます。
- F34 「19世紀における南インドの宗教と政治——チダンバラム・ナタラージャ寺院をめぐる」
1996年10月5日 日本南アジア学会第9回全国大会、東洋大学 →K30
- F35 「戦中の邦語文献におけるインド論——今日の民族誌記述問題によせて」
1996年10月18日 日本人類学会・日本民族学会第50回連合大会、佐賀医科大学 →K29
- F36 「女神の初潮と月経——南インド・アイパッシ・プーラム祭とアーディ・ペルック祭」
1997年5月22日 日本民族学会第31回研究大会、国立民族学博物館

-
- F37 「南アジアの政治と宗教——インド・スリランカ」
1997年7月9日 第5回アジア太平洋地域とのネットワークのあり方に関する研究会、大阪国際交流センター、大阪市
- F38 「基地に住む女たち——在日米軍の調査から」
1999年5月29日 日本民族学会第33回研究大会、東京都立大学
米軍基地についての初めての発表。戦後基地の調査をした祖父江孝男先生に声をかけられました。盛況でした。
- F39 「在日米軍の宗教生活——従軍牧師の調査から」
1999年9月15日 日本宗教学会第58回学術大会、南山大学 →I20
- F40 “Hindu Priests under Secular State: A Case of Nataraja Temple of Chidambaram, South India”
1999年12月3日 国際シンポジウムThe State in India: Past and Present(Organizer: Masaaki Kimura),
Kyoto International Community House(京都国際交流会館), Kyoto City →K37
Peter van der Veer氏と久しぶりにお会いする。
- F41 “Hinduism in Singapore: A Case of Ethno-nationalization”
2000年2月29日 国際シンポジウム Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim (Organizer:
Junji Koizumi), The Nara Civic Conference Center(奈良県新公会堂), Nara City →I21、K33
- F42 「親族制度(研究)の成果——モーガン、レヴィ=ストロース、ニーダム」
2000年6月23日 京都大学人文科学研究所共同研究「『進化論』と社会」(代表: 阪本孝) →K34
- F43 「インドの男性セクシュアリティ」
2000年11月18日 研究会: 科研費・特定領域研究(A)「南アジア世界の構造変動とネットワーク——多元的共生社会の発展モデルを求めて」第5班「南アジアにおけるジェンダーと構造変動」(代表: 押川文子)、京都大学
- F44 「死者とともに歴史をふりかえる——在日米軍陸軍創設記念日パーティのテキストとビデオの分析」
2000年11月24日 研究会: 科研費・基盤研究(B)「戦死者をめぐる宗教・文化の研究」(代表: 川村邦光)、大阪大学 →T10
- F45 「ヒンドゥー寺院と法的管理——南インド・チダンバラム・ナタラージャ寺院をめぐる(1850-1980)」
2000年12月7日 シンポジウム「南アジアの聖地をめぐるPolitics / Poetics / Pop」(代表: 田中雅一)、
コープ・イン・京都、京都市 →K30
- F46 「消えた戦友とともに歴史をふりかえる——在日米陸軍創設記念舞踏会の分析」
2001年5月19日 日本民族学会第35回研究大会、神戸大学 →T10
- F47 「共同体と暴力——ジェンダー問題を通して」
2001年8月8日 公開研究会「共同体と暴力」: 科研費・基盤研究(C)「近代日本の共同体思想をジェンダーから解明する」(代表: 大越愛子)、神戸市勤労会館、神戸市
- F48 「母の暴力・父の暴力」
2001年12月7日 京都大学霊長類研究所COE形成基礎研究「類人猿の進化と人類の成立」
人類学連携シンポジウム「暴力の進化史」(世話人: 菅原和孝他)、京都大学
- F49 「在日米軍オキナワ・バトル・サイト・ツアーに見るガイドの役割」
2002年6月1日 日本民族学会第36回研究大会、金沢大学 →K38
- F50 「サブジェクト・エージェント論から見たアザンデ社会の妖術と邪術」
2002年7月6日 日本民族学会教育検討委員会、東京大学 →R8
-

-
- F51 「歴史の中の抵抗——スリランカの地曳網漁をめぐる」
2002年10月19日 九州人類学研究会2002年度10月例会、九州大学
- F52 「Bay of Bengal Programme (FAO)から見るベンガル湾の地域性——国際機関と国家の狭間で」
2003年7月12日 第36回南アジア研究集会 シンポジウム「リージョン・ネーション・グローバリゼーション」
休暇村伊良湖、愛知県田原市 →I23
- F53 「剥製技術から複製技術へ」
2004年7月10日 京都人類学研究会季節例会「複製技術時代の文化人類学」(代表：田中雅一)、京都大学
- F54 “Everyday Practice of Othering in post-War Japan: On Sex Industries and Sex with Foreigners”
2004年10月28日 国際シンポジウム(国際日本文化研究センター主催) Globalization, Localization,
and Japanese Studies in the Asia-Pacific Region, Orchard Parade Hotel, Singapore →R14
- F55 「なぜ、いま戦争と軍隊か？——在日米軍研究からみえてくるもの」
2005年5月21日 日本文化人類学会第39回研究大会分科会「戦争と軍隊の研究〈が／を〉変える文化人類学」
(代表：田中雅一)、北海道大学
- F56 「痛みが快樂に変わるとき、暴力が信頼の証となる——性進化の極北へ」
2005年7月16日 日本人類学会進化人類学分科会第14回シンポジウム「「快樂」としての性？——性行動の
もたらす意味」(代表：椎野若菜)、京都大学
- F57 「資源としての暴力」
2005年8月1日 研究会：科研費・特定領域「文化資源の生成と利用」(代表：山下晋司)、
熊野・山村開発センター、和歌山県田辺市
- F58 「信仰の証としての暴力——シンガポールのタイ・プーサム祭」
2005年9月10日 日本宗教学会第64回学術大会、関西大学
- F59 「身体あるいは誘惑する資源」
2006年1月28日 資源人類学総括班・研究集会：科研費・特定領域「資源の分配と共有に関する人類学的
統合領域の構築——象徴系と生態系の連関をとおして」(代表：内堀基光)、京都大学
- F60 “Perspectives on the Anthropology of the Military: The National and the Transnational”
2006年2月19日 国際会議 Military Studies in an Anthropological Perspective: An International
Conference(Organizer: Masakazu Tanaka & Eyal Ben-Ari), Misawa International Education Center
(三沢国際交流教育センター), Misawa City →R12
- F61 “Taming the Armed Forces in Japan”
2006年4月9日 国際学会 Reconfiguring Militarism in Postwar Japan(Organizer: Sabine Frühstück),
Association of Asian Studies, 2006 Annual Conference, Marriott Hotel, San Francisco
Sabine Frühstück氏に誘われて初めて参加したメガ学会。Harry D. Harootunian氏がコメンテーターでした。日本ではまだ
珍しかったクロックスを購入する。
- F62 「宗教とセクシュアリティ——サティーとFGM/FCをめぐる」
2006年6月4日 「宗教と社会」学会第14回学術大会 テーマセッション「「ジェンダーで学ぶ宗教学」の可能性」
(代表：川橋範子)、同志社大学
同日日本文化人類学会第40回研究大会(東京大学駒場キャンパス)にて「天皇家のおくりもの——外交贈答台帳の分析」を
発表予定でしたが、ダブルブッキングのためキャンセルし、翌年再チャレンジすることになります(F67)。
-

- F63** “Cult-like Nature of the Activities of a Japanese Porn Director, Tadashi Yoyogi”
2006年9月28日 国際シンポジウム Gender and Spiritual Praxis in Asian Contexts(Organizer: Hiroko Kawanami), Lancaster University
川並宏子氏の招待で参加。デリー大学のMeenakshi Thapanと久しぶりに会う。彼女にとってその後始まる日本との学術交流のきっかけとなりました。彼女が参加したAspects of Gender and Religion in South Asia(代表:國弘暁子・M.Thapan: 早稲田大学, 2017.11.23-25)には、初日のみ参加しました。
- F64** “The Liminal Nature of a U.S. Military Chaplain”
2006年10月3日 Military in Asian Seminar(Organizer: Eyal Ben-Ari), The Harry S. Truman Institute for the Advancement of Peace, The Hebrew University of Jerusalem
- F65** “Indians in Kobe” with Yuki Tsubakitani
2006年10月27日 国際シンポジウム Rising Indian in East Asia(Organizer: K. Kesavapany, A. Mani & P. Ramasamy), The Institute of Southeast Asian Studies, Singapore →**K42**
椿谷友希氏の修論をもとに私が発表しました。
- F66** “U.S. Military Chaplain in the Time of Peace and War”
2007年4月7日 国際ワークショップ War, Peace and Military in Asia(Organizer: Masakazu Tanaka & Eyal Ben-Ari), Palace Side Hotel, Kyoto City →**I28**、**R12**
- F67** 「天皇家のおくりもの——外交贈答台帳の分析」
2007年6月2日 日本文化人類学会第41回研究大会、名古屋大学
- F68** 「合衆国陸軍従軍牧師の性格——関連文書の分析から」
2007年9月17日 日本宗教学会第66回学術大会、立正大学 →**I28**
- F69** 「構築主義・戦略・モラル——伝統的な生態学的知識(TEK)再考にむけて」
2008年3月22日 京都大学サステナビリティ・イニシアティブ・シンポジウム「社会・環境に与える人災と天災の影響」(代表:田中雅一)、京都大学 →**Q8**、**R13**
- F70** 「強壯剤から見た男性身体」
2008年6月1日 日本文化人類学会第42回研究大会、京都大学 →**K46**、**K69**
- F71** 「わたしがこわれるとき——売春経験を考える」
2008年12月6日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「社会空間論の再検討——時間的視座から」(代表:西井涼子)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- F72** “Education on Religious Culture in Religious Studies and Education in Britain: Some Findings”
2009年8月10日 国際シンポジウム Management and Marketing of Globalization Asian Religions (Organizer: Hirochika Nakamaki), 国立民族学博物館
- F73** 「多文化世界としての現代インドの可能性」
2009年12月5日 人間文化研究機構・現代インド地域研究プロジェクト2009年度全体集会、京都大学
- F74** “Transgressive Sexual Contacts in the Works of Tadashi Yoyogi”
2010年10月2日 Workshop on Sexual Boundary Crossings and Sexual Contact Zones in East Asia (Organizer: James Farrer), Sophia University
吉野耕作氏を通じての参加依頼。国際交流基金の招きで日本に滞在中だったフォーギア・サイードさんと出会いました。

-
- F75 “Anthropology of Religions in Post-War Japan”
2010年12月17日 Workshop on Religious Studies in Asia (Organizer: John Whalen-Bridge, Tan Sor-hoon & Andrea M. Pinkney), National University of Singapore
- F76 「下着が脱身体化するとき——悉皆調査から考える身体・欲望・モノの集まり」
2011年10月30日 第10回九州人類学研究会オータムセミナー「モノから見る人の集まり、モノの集まりから見る人」(代表: 渡辺文)、国民宿舎ひびき、福岡県宗像市 →K64
- F77 「西部戦線戦跡ツアー——トレンチアート、墓地、記念碑の世界をめぐって」
2012年2月18日 「宗教とツーリズム」研究会(代表: 山中弘)、國學院大學
- F78 「セックスワーカーが叱りつけるとき——感情労働の視点から」
2012年6月23日 日本文化人類学会第46回研究大会 分科会「客を叱りつける女たち——水商売・セックスワーク・感情労働」(代表: 田中雅一)、広島大学
- F79 「女性への暴力と社会変化」
2012年11月24日 人間文化研究機構・現代インド地域研究プロジェクト2012年度全体集会「現代インドにおける社会変動とデモクラシー——格差と参加のダイナミズム」、京都大学
- F80 「スリランカの漁村と内戦」
2012年11月29日 PARCIC「スリランカ北部・ジャフナ県乾燥魚プロジェクト報告会——内戦後の漁村女性たちの暮らし」、東京連合会館、千代田区
- F81 「紛争と環境問題」
2013年2月3日 総合地球環境学研究所プロジェクト「軍事環境問題の領域横断的研究」研究会、ニュー山王ホテル、港区
豪勢なランチで著名な米軍施設内での研究会。
- F82 「マンチェスター学派人類学——コンタクト・ゾーンの人類学の視点から」
2013年2月22日 卓越セミナー第3回(「コンフリクトの人文学」セミナー第87回)(代表: 栗本英世)、大阪大学
- F83 「SEX × 感情労働 × 官能労働」
2013年5月24日 京都人類学研究会、京都大学 →I36
橋下徹の慰安婦発言があった直後でもあり、参加者が人文研第1セミナー室に入りきらず、一部廊下で聞いていただくという事態に発展しました。
- F84 「セックスワーカーにとっての客と恋人——日本人女性セックスワーカーへのインタビュー事例から」
2013年6月8日 日本文化人類学会第47回研究大会、慶應義塾大学 →K58
- F85 「軍事環境問題の領域横断的研究」
2013年12月4日 総合地球環境学研究所年次大会、コープ・イン・京都、京都市
- F86 「緊縛／縛りからkinbaku/shibariへ——グローバル化する日本の性文化」
2014年5月18日 日本文化人類学会第48回研究大会、幕張メッセ、千葉市 →T20
- F87 「文化人類学と宗教研究の20年」
2014年6月22日 「宗教と社会」学会第22回学術大会「宗教と社会」学会20周年常任委員会企画セッション
「『宗教と社会』誌からみた『宗教と社会』学会の20年」、天理大学
→『宗教と社会』21:133-137, 2015年
-

- F88** 「身体・エロス」
2014年7月5日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」公開シンポジウム「〈情動〉と〈社会的なもの〉の交叉をめぐる人類学的研究」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 →<http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/joudou.pdf>
- F89** “The Cultural Anthropology of Military Environmental Issues: Based on Interviews from Around MCAS Futenma in Okinawa”
2015年7月28日 国際ワークショップ The Anthropology of Contemporary Civil-Military Entanglements Workshop (Organizer: Eyal Ben-Ari & Birgitte Sørensen), Ayala House (The Open University of Jerusalem), Tel Aviv →[K74](#)
デンマーク、イスラエルと日本の共同プロジェクトに基づくワークショップ。2015年11月にコペンハーゲン大学で2回目を開催しました。企画者の一人、Birgitte Sørensen氏は2019年12月に急逝します。
- F90** 「インド・ムンバイの売春街に見る宗教要素あるいはその不在」
2015年9月6日 日本宗教学会第74回学術大会、創価大学
- F91** 「基地とともに生きるということ——普天間基地周辺に住む住民の聞き取り調査から考える軍事環境問題」
2015年11月28日 日本平和学会2015年度秋季研究集会、琉球大学 →[I38](#)、[K74](#)
- F92** 「アウシュヴィッツのガイドたち——オラリティと感情労働の視点から」
2016年9月3日 日本オーラル・ヒストリー学会 (JOHA) 第14回大会、一橋大学 →[I41](#)
- F93** 「文化人類学の根本問題——最近のフィールドから」
2016年10月21日 日本学術振興会学術システム研究センター人文・社会科学班会議、日本学術振興会、千代田区主任研究員会議では、就任直後の2015年8月7日と任期終了直前の2019年2月14日に発表しました。
- F94** 「ふしだらな女とは誰か？ 日本とインドにおける売春言説の役割」
2016年10月29日 セックスワークセミナー(代表：田中雅一)、京都大学
人文研で2012年から17年にかけて不定期に行われた研究会での発表。
- F95** “Crossing the Fence with Children and in Childhood: Local People’s Everyday Experiences of U. S. Military Bases in Okinawa”
2017年3月19日 国際学会 Crossing the Fence: Japanese Civilians and the U.S. Military, Association of Asian Studies (Organizer: Carl Gabrielson), 2017 Annual Conference, Sheraton Centre Hotel, Toronto →[K74](#)
- F96** 「アウシュビッツ博物館のガイドの可能性と戦争経験の継承に関する比較考察」
2017年9月3日 日本オーラル・ヒストリー学会 (JOHA) 第15回大会 シンポジウム「戦争経験の継承とオーラルヒストリー」(代表：蘭信三)、近畿大学 →[I41](#)
- F97** 「女神とゾンビ——「サイボーグ宣言」の前夜と〈その後〉から考える」
2018年2月3日 一橋大学社会学研究科先端課題研究16ワークショップ「アフター・サイボーグ」(代表：久保明教)、一橋大学
→https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/72493/0492100106.pdf?fbclid=IwAR3fqwAuYwBaUlqV2B7A0kpz6heZ_l6xryREepKMUNIDMfsV5xzxL29-6v4
- F98** 「貞淑な女性とふしだらな女性」
2019年1月24日 国際シンポジウム「アジアの女性」、成均館大学東アジア学術院、ソウル市
人文研、東京大学東洋文化研究所、成均館大学東アジア学術院が2011年から毎年開催している共催学術シンポジウムに参加。
- F99** 「南アジアにおけるモノや神との結婚をめぐる」
2020年10月4日 日本南アジア学会第34回全国大会、京都大学(オンライン)

- G1 「スリランカの漁民たち」
1987年9月19日 第113回みんぱくゼミナール、国立民族学博物館
- G2 「現代に語り継がれるマハーバーラタ」
1988年8月3日 京都大学人文科学研究所夏期公開講座「歴史と現在」、京都大学
- G3 「神々のかたち —— 民衆ヒンドゥー教の世界」
1992年11月7日 京都大学市民講座「かたち」、京都大学
- G4 「南アジアにおける宗教ナショナリズム —— スリランカとインド」
1994年7月6日 慶應義塾大学地域研究センター講座「現代アジアの民族と国家」、慶應義塾大学
→『民族・宗教・国家——現代アジアの社会変動』慶應義塾大学地域研究センター編、慶應通信、1995年、pp.67-103
- G5 「現代インドの宗教ナショナリズムが語る過去」
1995年7月7日 京都大学人文科学研究所夏期公開講座「物語としての過去」、京都大学
- G6 「南アジアにおける暴力・性・聖」「癒しとイヤラシのポルノグラフィー —— 激しい夜を過ごさないためのノート」
1996年7月17日 湘南レクチャー『現代人類学の諸問題』(代表：清水昭俊)、
総合研究大学院大学、神奈川県葉山町湘南国際村
講師は清水昭俊、関一敏、山本真鳥、栗本英世、ツー・ユンフイさんら。全国から集まった博士課程の学生たちと過ごした濃密な合宿セミナー(7.14-19)で、最後の日は昼休みにプールで泳ぎ、徹夜という体力勝負の6日間でした。
- G7 「インドの宗教と政治」
1996年11月13日 「アジアボランティア養成講座」、アジアボランティアセンター、
日本聖公会大阪聖パウロ教会、大阪市
- G8 「越境するスリランカのタミル人」
1997年11月28日 立命館大学国際言語文化研究所・連続講座「国民国家と多文化社会」・第7シリーズ
国民国家のはざまの南アジア第2回、立命館大学
→『立命館言語文化研究』10(2): 19-36、1998年
- G9 「軍事共同社会の文化人類学 —— 『暴力の文化人類学』以後」
1998年11月5日 京都大学人文科学研究所69周年記念公開講演会、京都大学
開所を記念する講演会。その後廃止になりました。
- G10 「もうひとつの在日 —— 米軍基地の人類学的研究をめぐって」
2003年3月14日 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学 トランスナショナリティ研究
プロジェクト」(代表：小泉潤二) 第4回トランスナショナリティ研究セミナー、大阪大学 →P4
→『トランスナショナリティ研究 場を越える流れ』大阪大学21世紀COEプログラムインターフェイスの人文学
2002-2003年度報告書、小泉潤二・栗本英世責任編集、大阪大学大学院・人間科学研究科、2003年、pp.31-41
- G11 「未開からワイルド・サイドへ —— 人類学における他者像の変貌」
2003年3月20日 阪上孝教授退職記念シンポジウム「他者の思想史」、京都大学
数日前にアメリカによるイラク侵攻が始まりました。
- G12 「フェンスの中の記念と祈念 —— 米陸軍生誕舞踏会」
2004年7月2日 京都大学人文科学研究所夏期公開講座「記念日の創造」、京都大学 →T11

-
- G13 「父の暴力と母の暴力」
2005年3月9日 千里文化財団午餐会、ホテル阪急インターナショナル、大阪市
講演後、梅棹忠夫民博名誉館長と食事をする会。
- G14 「誘惑するインド——性とエージェンシーの視点から」
2007年7月15日 第40回南アジア研究集会、旅館伯梁、静岡市
土砂降りでキャリアバッグにも水が……。三保で行われた合宿での講演会。
- G15 「宗教学におけるジェンダー研究の位置づけ」
2008年1月29日 筑波大学宗教学・比較思想学研究会公開講演会、筑波大学
- G16 「野生の技法——強壯する男性身体」
2008年6月5日 人文研アカデミー共同研究セミナー「身体＝フェティッシュをめぐる技術」（代表：田中雅一）、
京都大学
- G17 「誘惑する宗教学」
2008年9月13日 日本宗教学会第67回学術大会・公開シンポジウム「現代社会における宗教学の役割を
問う」、筑波大学 →I30
- G18 「世界の宗教の現状について——特にアジア地域を中心として」
2008年12月2日 文化庁宗教法人指導者講習会、ルビノ京都堀川、京都市
- G19 「セックス——語りたがいの？ 語れない？」
2009年3月14日 京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言——21世紀の日本を考える」
第4回「学問のつながりのユニークさ——それがつくる明るい未来」、名鉄ホール、名古屋市
高校生(受験生候補)相手に、名古屋ネタや予備校ネタをちりばめてのセックス話。
→『京都大学・附置研究所・センターシンポジウム 京都からの提言——21世紀の日本を考える 第4回「学問のつながりの
ユニークさ：それから作る明るい未来」報告書』京都大学東南アジア研究所内京都大学「京都からの提言」事務局編、
2009年、pp.59-74
- G20 「軍隊——ナショナルとトランスナショナル」
2009年11月14日 日本文化人類学会公開講演会「文化人類学から世界を見る」(代表：春日直樹)、
大阪ビジネスパークTWIN21、大阪市 →T17
- G21 「異に触れ、異に交わる——文化人類学の立場から」
2009年11月20日 特定非営利活動法人『シーズとニーズの会』シーズとニーズ2009年度一般例会(6)
「2009年晩秋、京都にて」、京都テルサ、京都市
- G22 「文化をめぐる寛容と非寛容の対立を超えて——文化相対主義から省察的他者論へ」
2010年5月1日 印度学宗教学会第53回研究大会公開講演、大阪国際大学
- G23 「軍事環境問題総論」
2014年5月29日 人文研アカデミー連続セミナー「軍事環境問題の現在——基地・戦争・核実験」
(代表：田中雅一)、京都大学
- G24 「共生を拒否する宗教と共生を試みる宗教」
2015年10月3日 京都大学人間・環境学研究科主催公開講座「共生社会に向けて」(「京の府民大学」
対象講座)、京都大学
会場は近衛ロンドが開催されていた楽友会館でした。 →『人環フォーラム』 35: 14-17、2016年
-

- G25 「インド・ムンバイの売春街におけるジェンダー、宗教、カースト」
2015年12月12日 科研費・基盤研究(B)「地中海から西・南アジア地域の人々に関わる「名誉に基づく暴力」の文化人類学的研究」公開講演会「名誉・暴力・ジェンダー——中央アジア、インド、中東からの視点」
(代表：田中雅一)、京都大学東京(品川)オフィス、港区
- G26 「結婚と売春」
2016年7月14日 人文研アカデミー10周年記念連続セミナー「越境する親密圏」(代表：田中雅一)、
京都大学東京(丸の内)オフィス、千代田区
- G27 「格子と波とナショナリズム——〈巨大な遺体安置所〉で*Love Trip*を聴きながら考えたことなど」
2017年5月28日 日本文化人類学会大51回研究大会第12回学会賞受賞記念講演、神戸大学 →I40、I42
「これまでの受賞記念講演の中で一番おもしろかった」(文字通り、笑えた)という感想をいただきました。
- G28 「アジアの軍隊」
2017年10月30日 公開講座「アジア共同体論」第4回、東亜大学東アジア文化研究所、下関市
- G29 「現代インド世界における売春・宗教・ジェンダー暴力」
2018年7月1日 広島大学21世紀科学プロジェクト環境平和学公開講演会、広島大学
- G30 「ムンバイの売春街に見る女性の自己管理、家族関係、女神との結婚」
2018年8月4日 第51回南アジア研究集会、山喜温泉、静岡県伊東市
- G31 “Fetishism and its Social Significance”
2018年9月25日 中国藝術人類学国際学術集会キーノートスピーチ、東南大学(南京)
楊小平さんの誘いで参加した中国での学会。南京は2011年12月以来、2回目の訪問でした。
- G32 「身近なものや出来事から異なる民族・文化を考える」
2018年11月29日 「人と文化のフォーラム」、(株)IHI横浜エンジニアリングセンター横浜ゲストハウス、横浜市
- G33 「私流文化人類学におけるヘウレーカ、現代思想、不在のイマージ」
2019年2月22日 田中教授退職記念講演会、京都大学益川ホール
→<https://www.youtube.com/watch?v=3fTlkjgtvzE>
- G34 「フィールド人文学の光と闇」
2019年4月27日 京都大学人社未来形発信ユニット第1回全学シンポジウム「アジア人文学の未来」
(代表：出口康夫)、京都大学
- G35 「トレンチ・アートあるいはアートと武器のエージェンシーが交わるとき」
2021年7月1日 現代文化人類学会第24回研究集会公開講演、早稲田大学(オンライン)
2010年に第一次世界大戦についての研究会(D44)で発表して以来、遅々として論文化の道筋が見えなかったトレンチ・アートについて、やっとオリジナルな見解を提案することができました。
- G36 「女性が兵士になるということ」
2022年6月10日 女性学インスティテュート主催特別講演会、神戸女学院大学
- G37 「なぜ今エッジワークなのか？——共同研究に開かれたフィールドワークを求めて」
2022年6月25日 海外学術調査フォーラム・海外学術調査ワークショップ：共通テーマ「フィールドサイエンスと共同研究の可能性」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(オンライン)
エッジワーク、ダークコモンズ、アサイラム／アジュールといった概念を使って新しいフィールドワークの可能性を検討しました。「しびれた。未だにしびれている」という感想をいただきました。

コメント その他 (合評会、座談会、シンポジウムなど)

内容・代表者、実施年月日、会場、その成果(→項目記号あるいは書名)、コメントの順に記載

- H1** フィールドワーカー懇話会第3回シンポジウム「フィールドワークからわかるということ」(代表：松田素二他)
1989年4月1日 京都大学
→『季刊人類学』20(3): 101-105、1989年
- H2** 「討論：歴史の中の家族」人文研「家族とハウスホールドの比較的研究」(代表：前川和也)
1990年7月10日 京都大学
→『JUSTITIA ユスティティア』2: 40-94、1991年
- H3** 国立民族学博物館特別研究『アジア・大平洋地域における民族文化の比較研究』第2回シンポジウム
「海人の世界」(代表：秋道智彌)
1991年1月14-17日 国立民族学博物館
→『海人の世界』秋道編、同文館出版、1998年
- H4** 第2回大阪・アジア文化フォーラム「インド」(代表：井狩彌介・田中雅一)
1991年9月3日 国立文楽劇場、大阪市 →Q1、Q2
インドからVeena Das(社会人類学者)とKumar Shahani(映画監督)両氏を迎えての公開座談会。
- H5** 谷口国際シンポジウム「東南アジアにおける精霊祭祀——民衆知識のダイナミズム」(代表：田村克己)
1991年11月7-12日 国立民族学博物館、東洋紡研修所求是荘、大津市
本シンポで知り合ったAnanda Raja氏(2007年1月に逝去)にはシンガポールのBob's Tavernで大変お世話になりました。
- H6** 「文化人類学概論」研究会「文化人類学のエデュケーショナル・デザイン」(代表：米山俊直)
1992年7月20日 京都大学
→「付録資料(1)研究会記録『学部専門教育カリキュラムの研究開発』(モデル・カリキュラムの制作)」米山俊直・福井勝義編
『放送教育研究開発センター59 研究開発課題：文化人類学教授法プロジェクト報告書』pp.27-51、1993年
- H7** 国立民族学博物館特別研究『20世紀における諸民族文化の伝統と変容』3「観光の20世紀」(代表：石森秀三)
1994年10月13-15日 国立民族学博物館
→『観光の20世紀』石森編、ドメス出版、1996年
- H8** シンポジウム「「開発」とオリエンタリズム」(代表：足立明)
1994年11月23日 京都大学
発表者やコメントータに太田好信、小熊英二(当時東大院生)、富山一郎、北大からは櫻井義秀、石井美保(学部3年生!)と豪華でした。→総合的地域研究成果報告書シリーズ『「開発」とオリエンタリズム』足立編、1997年
- H9** 鼎談：「神々の解剖学——女神の時代に」(代表：鏡リュウジ)
1995年8月5日 朝日カルチャーセンター新宿、新宿区
『魔女術』の著者で占星術研究家の鏡リュウジ氏の講座に、『月がくれた愛人』の作者・水上洋子氏と私が招かれました。
- H10** 国立民族学博物館特別研究『アジア・大平洋地域における民族文化の比較研究』
第7回シンポジウム「時間とことば」(代表：長野泰彦)
1995年10月30-11月2日 国立民族学博物館
後に*Art and Agency*で日本でも有名になるAlfred Gellを初めて日本に招聘。→『時間・ことば・認識』長野編、ひつじ書房、1999年
- H11** Europe-Asia Forum: 'Message of Venice',
1996年1月18-19日 Giorgio Cini Foundation, Venice →R5
私の英語本を書評したGabriella Eichinger Ferro-Luzzi (1931-)に会いました。
- H12** Japanese Perspective on Asian Religions: The Ethnographic Approach (Organizer: Timothy Yun Hui Tsu)
1996年3月30日 National University of Singapore, Singapore

-
- H13 コメント：シンポジウム「方法としての身体——比較社会史の試み」(代表：川越修)
1996年8月23日 大阪市立大学文化交流センター、大阪市
- H14 Japan in Hong Kong / Hong Kong in Japan Workshop (Organizer: Wong Heung Wah)
1999年12月10-12日 Bishop Lei International Guest House, Hong Kong
- H15 ゲストトーク「『20世紀のエロス』オーガズム～身体を超える意志」
2000年4月29日 企画展『みんぱくミュージアム劇場——からだは表現する』(代表：野村雅一)、国立民族学博物館
民博では最初で(たぶん)最後の成人指定の公開座談会。特別展示場地下で開催。藤本由香里、大浦康介、藤本純子の三氏と登壇。
- H16 コメント：国際シンポジウム「グローバリゼーションと日本文化——地域研究の新しい地平を求めて」(代表：池田恵子)
2003年7月4-5日 同志社大学
その後長い付き合いとなるEyal Ben-Ariとの最初の出会(いや、シンガポールでチラッと会っていました)。
- H17 コメント：国際ワークショップ The Permeation of Monetary Resources into Gift-Exchange Economies
(Organizer: Naoki Kasuga) (科研・特定領域研究「贈与交換経済における貨幣資源の浸透」)
2004年2月17日 Palulu Plaza, Kyoto City
久しぶりにChristina Torenと会う。当時はCOEの申請準備でヘトヘトでした。
- H18 コメント：Suwanna Satha-Anand Keynote Speech "Fluid Boundaries, Institutional Segregation and Buddhist Sexual Tolerance" The 19th World Congress of the International Association for the History of Religions
2005年3月28日 高輪プリンスホテル、港区
→Gerrie ter Haar & Yoshio Tsuruoka eds. *Religion and Society: An Agenda for the 21st Century*. Koninklijke Brill NV: Leiden, The Netherlands, pp.161-164, 2007
- H19 コメント：日本文化人類学会第39回研究大会「システムが稼動するとき——ローカルな活動から見た技術・制度・知識」(代表：森田敦郎&モハーチ・ゲルゲイ)
2005年5月21日 北海道大学
- H20 国際ワークショップ The Permeation of Monetary Resources into Gift-Exchange Economies (Organizer: Naoki Kasuga) (科研・特定領域研究「贈与交換経済における貨幣資源の浸透」)
2005年12月18日 Taj Exiatica, Goa
informal sectorという言葉を作ったことで有名なKeith Hartに会う。彼がはじめた出版社がのちにPrickly Paradigm Pressとなって、D.グレーバーの*Fragments*を出版します。
- H21 コメント：「宗教と社会」学会第15回学術大会「映像宗教学の射程」(代表：新井一寛)
2007年6月10日 駒沢大学
- H22 コメント：井合進「変動に強い社会の構築に向けて」、KSI京都サステナビリティ・イニシアティブ
学内ワークショップ「環境変化への現実的対応」(代表：佐和隆光)
2008年2月22日 メルパルク京都、京都市
- H23 コメント：GCOE生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点イニシアティブ4
「生のつながりへの想像力——再生産再考」(代表：速水洋子)
2008年11月4日 京都大学
- H24 コメント：京都大学地域研究統合情報センター全国共同利用研究
第4回「映像実践による現代宗教復興現象の解明を通じた地域研究手法の開発」(代表：新井一寛)
2008年12月26日 京都大学
- H25 コメント：京都人類学研究会季節例会「歓待の人類学」(代表：田中雅一)
2009年7月17日 京都大学
-

- H26 コメント：日本宗教学会第68回学術大会パネル「ジェンダー宗教学の確立に向けて」(代表：川橋範子)
2009年9月12日 京都大学
- H27 コメント：南山大学人類学研究所60周年記念連続シンポジウム第1回『21世紀アジア社会の人類学 回顧と展望』
2009年12月9日 南山大学
- H28 コメント・総合討論：京都大学人文科学研究所社会人類学部門創設50周年記念シンポジウム
「人類学の誘惑——京都からの回顧と発信」(代表：田中雅一)
2010年4月17日 京都大学 →07
- H29 コメント：Erick Laurent “Just a Bunch of Softies and Sissies”? : Masculinities in the Ryukyus” KYOTO Lecture
2011年2月24日 京都大学
昆虫食の研究で京都にやってきたErickさんの発表でした。
- H30 コメント：日本文化人類学会第45回研究大会「軍隊がつくる社会、社会がつくる軍隊——トランスナショナル、ローカルの接合と再定義」(代表：上杉妙子)
2011年6月11日 法政大学
- H31 コメント：日本文化人類学会次世代育成セミナー
「吉田佳世：アクターとしての女性霊——位牌・墓祭祀における非主流派女性の死後の処遇に着目して」
2011年11月5日 京都大学
学会誌への投稿を促進するために企画されたセミナー。この手の催しに京大の若手研究者が動員されていたことに反発を覚えましたし、学会による指導体制への介入だと思いました。その後の調査でこのセミナーの当初の目的はほとんど達成されていないことが判明しました(J11)。
- H32 コメント：国際シンポジウム「越境するカワイイ！可愛い！Kawaii！——ファッションとマンガ」
(代表：小野原教子・田中雅一)
2011年11月27日 京都国際漫画ミュージアム、京都市 →Q11
- H33 コメント：INDAS 2011年度 現代インド・南アジア次世代研究者合宿「グローバル化と南アジア」
2012年3月5-6日 国民宿舎みやじま杜の宿、広島市
- H34 コメント：国際シンポジウム「精神病理からみる現代——うつ、ひきこもり、PTSD、発達障害」(代表：立木康介)
2012年6月30日 京都大学
トラウマ研究の大御所、アラン・ヤング目当てでしょうか、若手の医療人類学者が多数参加していました。
- H35 コメント：「宗教と社会」学会第21回学術大会「国家介入的な政教関係の近代——アジア諸国における宗教と政治の比較研究」(代表：矢野秀武)
2013年6月16日 皇学館大学
- H36 コメント：INDAS 2013年度 現代インド・南アジア次世代研究者合宿「来たるべき現代インド地域研究」
2014年2月28日 飛鳥の里 祝戸荘、奈良県高市郡明日香村
- H37 コメント：合評会：関西性欲研究会「井上章一・三橋順子共編『性欲の研究——東京のエロ地理編』合評会」
(代表：井上章一)
2015年4月19日 京都市
- H38 コメント：日本文化人類学会第49回研究大会 特別企画ラウンドテーブル「『国際化／グローバル化』の波動と文化人類学——複数性の岐路に立って」(代表：関根康正)
2015年5月31日 大阪国際交流センター(国立民族学博物館)、大阪市
→コメントのタイトルを「複数性の否定に抗するために……」から「文化人類学が滅びるとき」に変更して『文化人類学』80(2)：284-286、2015年に所収。

- H39 コメント：京都人類学研究会月例会アンドレア・デ・アントーニ「悪魔に触れられたとき——現代イタリアのカトリック教における悪魔祓いに関する言説・体験とその感覚性をめぐって」
2015年6月9日 京都大学
- H40 コメント：合評会：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」藤野陽平『台湾における民衆キリスト教の人類学』公開合評会
2015年7月4日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
→<http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/2015seminar.pdf>
- H41 コメント：京都人類学研究会季節例会
「世俗社会のなかのモラル／モラリティ——世俗的論理と宗教的論理の接合と非接合」(代表：神原ゆうこ)
2015年7月31日 京都大学 →『Contact Zone / コンタクト・ゾーン』8: 2-75、2016年
- H42 コメント：日本南アジア学会第28回全国大会分科会
「南アジア移住商人(マールワリー)の研究——1920-30年代に焦点をあてて」(代表：中谷純江)
2015年9月27日 東京大学
- H43 コメント：合評会：人間文化研究機構・南アジア地域研究プロジェクト年次大会
「杉本良男・三尾稔編『現代インド6 環流する文化と宗教』合評会」(代表：藤田幸一)
2015年11月1日 京都大学
- H44 合評会：軍隊社会学研究会会合「田中雅一編『軍隊の文化人類学』合評会」
2015年11月21日 京都大学
- H45 コメント：日本文化人類学会次世代育成セミナー
「古川勇氣：個人／社会——ペルー山村の酪農世帯が抱く都市との「距離感」を事例に」
2015年11月22日 国立民族学博物館
- H46 司会・コメント：国際シンポジウム Social Sufferings and Traumatic Experiences: An Anthropological Perspective
2016年1月9日 京都大学人文科学研究所共同研究「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究」
(代表：田中雅一)、京都大学
- H47 コメント：フィールドネット・ラウンジ企画セミナー
「装い／社会／身体——フィールドワーカーによる通文化比較研究」(代表：宮脇千絵)
2016年1月10日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
→『Contact Zone / コンタクト・ゾーン』9:264-366、2017年
- H48 コメント：川村邦光教授退職記念シンポジウム「弔い、そして死者との共闘——川村邦光と『弔いの文化史』を読む」
2016年3月5日 大阪大学
- H49 コメント：基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求——人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」公開シンポジウム「『もの』の人類学をめぐって——脱人間中心主義の人類学の可能性と課題」(代表：床呂郁哉)
2016年11月12日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
→http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/On_Anthropology_of_Things_Possibility_and_Challenge_of_Anthropology_beyond_Human.pdf
- H50 コメント：シンポジウム「帝国日本における人とモノの移動と他者像——台湾・朝鮮・沖縄を基点に」
(代表：植野弘子)
2016年12月3-4日 東洋大学

- H51 コメント：地域コンソーシアム(JCAS)次世代ワークショップ
「伝統文化とグローバルな観光現象のせめぎあい——みやげものを巡る政治・文化・ものがたり」(代表：山口睦)
2017年2月11日 京都大学
- H52 コメント：合評会：人間文化研究機構・南アジア地域研究プロジェクト・京都大学中心拠点／南アジア・インド洋世界研究会「中村紗絵『響応する身体——スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサの民族誌』」
(代表：中村紗絵)
2017年10月26日 京都大学
- H53 司会：特別セミナー「アフリカのジェンダー正義・宗教・女性器切除」(Rogaia Mustafa Abusharaf “Gender Justice and Religion in Sub-Saharan Africa: The Case of Female Genital Mutilation”)
2017年11月8日 京都大学
- H54 司会・コメント：シンポジウム「医療人類学にとってナラティブとは何か？」(澤野美智子氏との共同企画)
2017年2月4日 京都大学 →『Contact Zone / コンタクト・ゾーン』10:107-224、2018年
- H55 司会・コメント：シンポジウム「証言・告白・愁訴——医療と司法におけるかたりの現場から」(澤野美智子氏との共同企画)
2017年11月11日 京都大学 →『Contact Zone / コンタクト・ゾーン』11:233-311、2019年
- H56 合評会：第117回現代人類学研究会「田中雅一・松嶋健共編『トラウマ研究1』『トラウマ研究2』」
2019年11月9日 国際ファッション専門職大学
- H57 コメント：フィールドネット・ラウンジ企画セミナー「宗教におけるモノと「聖」」(代表：川本直美)
2020年2月8日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- H58 コメント：京都大学人社未来形発信ユニット・文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター主催
シンポジウム「緊縛ニューウェーブ×アジア人文学」(代表：出口康夫)
2020年10月24日 京都大学
- H59 コメント：日本文化人類学会次世代育成セミナー
「愛葉由依：トラウマ記憶の表出と沈黙について——日本・北米・韓国在住被爆者の事例を中心に」
2020年11月14日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(オンライン)
- H60 合評会：日本文化人類学会関東地区研究懇談会 徹底討論「ジェンダー暴力の文化人類学」
2021年6月26日 (オンライン)
著者の一人として「ジェンダー暴力研究のこれから」という発表をしました。
- H61 合評会：ジェンダーと宗教研究センターUnit1
「田中雅一・嶺崎寛子編『ジェンダー暴力の文化人類学：家族・国家・ディアスポラ社会』」
2021年7月24日 龍谷大学(オンライン)
- H62 合評会：科研費基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」(代表：長沢
栄治) 巣ごもり読書会「田中雅一・嶺崎寛子編『ジェンダー暴力の文化人類学：家族・国家・ディアスポラ社会』」
2021年7月29日 (オンライン)
- H63 コメント：国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」(代表：平藤喜久子)
2021年12月11日 國學院大学
- H64 コメント：合評会：人間文化研究機構・南アジア地域研究プロジェクト・京都大学中心拠点「初見かおり『ハレルヤ
村の漁師たち——スリランカ・タミルの村内戦と信仰のエスノグラフィー』刊行記念セミナー」(代表：中村紗絵)
2022年2月13日 京都大学(オンライン)
- H65 コメント：民族藝術学会第38回大会・シンポジウム「「手仕事」とarts／人類の創造的ないとなみを探る」(代表：金谷美和)
2022年4月16日 国際ファッション専門職大学(オンライン)

- I1 「ヒンドゥー教の人類学的研究における二つの立場——「原子論」と「全体論」」
1981年 『論集』 8: 81-100
ロンドン留学中に執筆した初めての論文を東北印度学宗教学会の機関誌に投稿。
同じ寮(Lillian Penson Hall)に滞在していた竹田いさみ氏に論文の書き方を学びました。
- I2 「礼拝・アビシェーカ・供犠——浄・不浄から力へ：スリランカのヒンドゥー寺院儀礼」
1986年 『民族学研究』 51(1): 1-31
日本で就職を希望しているなら日本語論文もあったほうがいいということで、博論執筆を一時中断して学会誌に投稿しました。
- I3 「カーリー女神の変貌——スリランカ・タミル漁村における村落祭祀の研究」
1989年 『国立民族学博物館研究報告』 13(3): 445-516
- I4 “For a Sociology of Hinduism: A Critical View of Holism”
1989年 *ZINBUN* 24: 291-314
- I5 「クリシュナーからクリシュナへ——スリランカ・タミル漁村における女神崇拜の「サンスクリット化」をめぐる」
1989年 『南アジア研究』 1: 96-114
- I6 「司祭と霊媒——スリランカ・タミル漁村における村落祭祀の分業関係をめぐって」
1990年 『国立民族学博物館研究報告』 15(2): 393-509
- I7 「スリランカ・タミル漁村における女性の地位——親族組織と経済の領域を中心に」
1991年 『西南アジア研究』 36: 48-69 →K12
国内的には、ジェンダーについての実証的な研究の先駆けとなった論文です。
- I8 「儀礼的暴力の変容——供犠からジェノサイドへの道程」
1993年 『情況』1993年1・2月合併号、第3期4(1): 55-77 →P3
- I9 「無限大の乳房、等身大の陽根——性幻想のインドから」
1993年 『imago(イマーゴ)』2月号、4(2): 182-191 →K8、P3
- I10 「漁業儀礼考——スリランカ・タミル漁村における地曳網漁をめぐって」
1993年 『国立民族学博物館研究報告』 18(1): 47-98
- I11 “Why are Brahman Temple Priests Highest in the Caste Hierarchy? : A Case of Chidambaram
Natarāja Temple, South India”
1993年 *Senri Ethnological Studies* 36: 85-123 (Yasuhiko Nagano & Yasuke Ikari eds.
From Vedic Altar to Village Shrine: Towards an Interface between Indology and Anthropology)
→日本語版 K5
- I12 「割礼考——性器への儀礼的暴力」
1994年 『現代のエスプリ』 320: 97-105 →T13
- I13 「現代スリランカの民族問題——1995年7月までの展開」
1995年 『歴史学研究』 675: 18-25 →P3
- I14 “Introduction: Writing on Gender, Sexuality and Religion in South Asia”
1999年 *Senri Ethnological Studies* 50: 3-17 (Masakazu Tanaka & Musashi Tachikawa eds.
Living with Śakti: Gender, Sexuality and Religion in South Asia) →日本語版 K29

-
- I15 “The Navarātri Festival in Chidambaram, South India”
1999年 *Senri Ethnological Studies* 50: 117–135 (Masakazu Tanaka & Musashi Tachikawa eds.
Living with Śakti: Gender, Sexuality and Religion in South Asia)
→日本語版 [K9](#)
- I16 “Sacrifice Lost and Found — Colonial India and Postcolonial Lanka”
2000年 *ZINBUN* 34(1): 127–146 →日本語版 [K27](#)
- I17 「英国における実用人類学の系譜——ローズ・リヴィングストン研究所をめぐって」
2001年 『人文学報 特集 研究者の組織化——その諸相』84: 83–109 →[P5](#)
- I18 「発達における儀礼の意義」
2002年 『教育と医学』50(2): 12–18
- I19 「軍隊の文化人類学的研究への視角——米軍の人種政策とトランスナショナルな性格をめぐって」
2004年 『人文学報 特集 アジアの軍隊の歴史・人類学的研究——社会・文化的文脈における軍隊』90: 1–21
- I20 「軍隊と宗教——米軍におけるチャプレン」
2004年 『人文学報 特集 アジアの軍隊の歴史・人類学的研究——社会・文化的文脈における軍隊』
90: 153–168
- I21 「多民族社会における宗教——シンガポールのヒンドゥー教をめぐって」
2005年 『人文学報』92: 1–39 →英語版 [K33](#)
- I22 “Towards an Anthropology of Agency: Performativity and Community”
2005年 *Japanese Review of Cultural Anthropology* 6: 3–17 →日本語版 [K32](#)
履歴から海外査読者が著名なバトラー研究者だと判明したこともあって、本論文のバトラー批判は妥当と理解しました。
- I23 「FAO Bay of Bengal Programme (1979–2000)における地域概念——その出版物の分析」
2006年 『人文学報』93: 1–23
- I24 「身内で結婚する——スリランカ・タミル漁村における婚姻をめぐって」
2006年 『社会人類学年報』32: 1–24 →英語版 [I29](#)
親族研究についての本格的な論文。これで私も「社会人類学者」になりました。
- I25 「癒しとイヤラシのポルノグラフィ——代々木忠監督作品をめぐって」
2007年 『人文学報』94: 101–147 →[K50](#)、[P4](#)
1992年頃から始めたAV調査の成果です。
- I26 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」
2007年 『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』1: 31–43 →[K48](#)、[P5](#)
- I27 「神々への供物——南インド・チダンバラムにおける寺院儀礼と家庭祭祀をめぐって」
2007年 『人文学報』95: 1–39
- I28 「米軍チャプレンの研究——構造分析と主観的視点」
2007年 『国際安全保障』35(3): 95–112 →英語版 [R12](#)
- I29 “Marrying Within: A Case from a Tamil Fishing Village in Sri Lanka”
2008年 *International Journal of South Asian Studies* 1: 77–100 →日本語版 [I24](#)
-

-
- I30 「宗教学は誘惑する」
2009年 『宗教研究』 82(4): 37-57
後の誘惑論(P5)に発展する最初の論文です。
- I31 「スリランカの民族紛争——その宗教的位相」
2009年 『現代宗教 特集 変革期のアジアと宗教』、pp.165-182
ケアの宗教という考えが浮かんだ論文です。
- I32 「交叉イトコ婚からシマイ交換婚へ——スリランカ・タミル漁村における初潮儀礼と結婚式の分析」
2011年 『関西学院大学社会学部紀要』 111: 57-70
- I33 「コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン——「基地の女たち」をめぐって」
2011年 『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』 4: 163-189 →英語版 I35、K49、P4
- I34 「名誉殺人——現代インドにおける女性への暴力」
2012年 『現代インド研究』 2: 59-77
『ジェンダー暴力の文化人類学』(O17)に結実する企画の発端となった論文です。
- I35 “The Sexual Contact Zone in Occupied Japan: Discourses on Japanese Prostitutes or ‘Panpan’ for U.S. Military Servicemen”
2012年 *Intersections: Gender and Sexuality in Asia and the Pacific Issue 31* (On Line Journal)
→日本語版 I33
- I36 「やっとホントの顔を見せてくれたね！——日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について」
2014年 『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』 6: 30-59
2011年から本格的に始めたセックスワーク研究の成果です。
- I37 「ヒンドゥーの供犠とその残滓——宗教的性格を探求する」
2016年 『宗教研究 特集 食と宗教』 90(2): 55-80
大学院時代から気になっていたテーマでしたが、なんとか論文に仕上がりました。
- I38 「軍事環境問題の文化人類学——在沖・米海兵隊普天間航空基地周辺の聞き取り調査から」
2016年 『社会人類学年報』 42: 1-28 →英語版 K74
- I39 「特集 ムスリム社会における名誉に基づく暴力「序」」
2017年 『文化人類学』 82(3): 311-327
嶺崎寛子氏との共著です。
- I40 《第12回日本文化人類学会賞受賞記念論文》
「〈格子〉と〈波〉とナショナリズム——巨大な遺体安置所で*Love Trip*を聴きながら考えたこと」
2018年 『文化人類学』 82(4): 425-445 →英語版 I42
- I41 「アウシュヴィッツにてホロコーストの生存者に会うということ」
2018年 『日本オーラル・ヒストリー研究』 14: 43-54 →K73
- I42 “Grids, Waves and Nationalism: Some Thoughts by Listening to ‘Good Vibrations’ in a Big Morgue”
2019年 *Japanese Review of Cultural Anthropology* 19(1): 5-50 →日本語版 I40
英語版を準備するにあたって、「Love Trip」(AKB48)を“Good Vibrations”(ザ・ビーチ・ボーイズ)に差し替え、民博の建築構造とデザインを考察対象に追加しました。
-

-
- I43 「アーカイブ的統治とフェティシズムから考える考現学」
2019年 『現代思想 特集 考現学とはなにか』 47(9): 103-117
『現代思想』でのデビュー論文です。
- I44 「セクシュアリティ・ジェンダー体制とその宗教的攪乱—デーヴァダーシーと子宮委員長はるをめぐって」
2019年 『宗教研究 特集 ジェンダーとセクシュアリティ』 93(2): 107-134

短文

- J1 「バクティをめぐる一考察」
1987年 『民博通信』 35: 34-38
- J2 「女神研究への視座——北米の女神崇拜運動をめぐる」
1992年 『民博通信』 57: 35-43
- J3 「現代日本の宗教と性——川崎・かなまら祭考」
1996年 『創文』1996年9月号(通算380号)、pp.14-18 →P4
- J4 不明
1996年 『琵琶湖特定水域高度処理基本計画 資料編』滋賀県土木部
スリランカの下水道システムについて書きました。残念ながら、本体が見つかりませんでした。
- J5 「女神研究の可能性」
1998年 『ユリイカ 特集 女神』 30(15): 81-87
- J6 「良き場所からガイアへ——カルロス・カスタネダとスターホーク」
2004年 『人環フォーラム』 14: 38-41 →P5
- J7 「ラグジュアリーな女神、ラクシュミー」
2007年 『DRESSTUDY』 52: 10-17
- J8 「伝統のリズムにのって——一九九〇年以後の共同研究のあゆみ」
2010年 『人類学の誘惑——京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年』
谷泰・田中雅一編、京都大学人文科学研究所、pp.32-38 →O7、P5
- J9 「現代インドにおける女性に対する暴力——デリーにおける集団強姦事件の背景を探る」
2013年 『オンラインジャーナル SYNODOS』
→<https://synodos.jp/opinion/international/3730/>
- J10 「多宗教世界インドの怪談——暴力と姦通と名誉殺人」
2014年 『オンラインジャーナル SYNODOS』
→<https://synodos.jp/opinion/international/6642/>
- J11 「編集後記(+第26期編集委員会最終報告)」
2016年 『文化人類学』 81(1): 151-155
これまでのスタイルを刷新して、編集後記では掲載論文や特集の学術的あるいは社会的意義を書くことになりました。

論文集に掲載された主な論文です。

- K1** 「ヒンドゥ奉納儀礼の研究——カーヴァディとそのコンテキスト」
1989年 『人類学的認識の冒険』田辺繁治編、同文館、pp.301-331 →K36
ニューデリーのYWCAにて手書きで書き上げた論文。カーヴァディとの長い付き合いの始まりでした。カーヴァディとは、アーチ型のカバーがついた天秤棒(カーヴ)に牛乳を入れた小壺を両端に吊るして練り歩く儀礼です。
- K2** 「ヒンドゥー王権論再考——スリランカ、ムンネーシュヴァラム寺院の縁起と祭祀組織」
1991年 『王権の位相』松原正毅編、弘文堂、pp.3-37 →P3
- K3** 「ヒンドゥ教の神々——その「体系的記述」をめぐる」
1991年 『文化を読む——テキストとフィールドのあいだ』谷泰編、人文書院、pp.78-124
本書のサブタイトルは、宮川淳の「紙片と眼差とのあいだに」を意識して提案しました。
- K4** 「漁業儀礼論再考——スリランカ・タミル漁村における地引網漁業をめぐる」
1992年 『文化人類学的彷徨——杉山晃一先生還暦記念文集』私家版、pp.29-43 →I10
東北大学で杉山先生(1932-2014)の薫陶を受けた研究者たちによる論集。杉山先生は、指導教員だった石田英一郎の東北大学文学部附属日本文化研究施設への異動にともない同施設に技官として赴任、1993年4月に文化人類学講座の初任教授となります。
- K5** 「南インドの寺院組織と司祭たち——自立への志向と相互依存」
1993年 『インド＝複合文化の構造』長野泰彦・井狩彌介編、法蔵館、pp.111-159 →英語版 I11
1988年から調査を始めた南インドの聖地、チダンバラム・ナタラージャ寺院についての最初の論文です。
→「書評論文再論 杉本良男氏への反論」『南アジア研究』7:178-180
- K6** 「スリランカのヒンドゥー寺院政策——少数民族の宗教への視座」
1993年 『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』田辺繁治編、京都大学学術出版会、pp.257-288
→P3
- K7** 「スリランカ・タミル漁村の家族と世帯——クドゥンバムをめぐる」
1993年 『家族・世帯・家門——工業化以前の世界から』前川和也編、ミネルヴァ書房、pp.42-72
- K8** 「性のオリエンタリズム——インドの性幻想とその解釈をめぐる」
1993年 『性の民族誌』須藤健一・杉島敬志編、人文書院、pp.340-360 →P3
世界で初めて大学で精神分析の講義を開設したインド。そんなインドでの精神分析の実践を学ぶきっかけになったのは、インドを対象とする大阪・アジア文化フォーラム(H4)準備のためにムンバイを訪れたときでした。
- K9** 「女神たちの夜・女たちの夜——チダンバラムの^{ナヴァラートリ}九夜祭」
1994年 『ドラヴィダの世界(インド入門Ⅱ)』辛島昇編、東京大学出版会、pp.70-82 →英語版 I15
- K10** 「スリランカの民族紛争——その背景と解釈」
1994年 『紛争地域現代史3 南アジア』岡本幸治・木村雅昭編、同文館、pp.267-295 →P3
- K11** 「南インドのヒンドゥー寺院政策——チダンバラムのナタラージャ寺院をめぐる」
1994年 『日本宗教への視角』岡田重精編、東方出版、pp.555-571 →P3
- K12** 「スリランカ漁民社会のジェンダー」
1995年 『コモングスの海——交流の道、共有の力』中村尚司・鶴見良行編、学陽書房、pp.238-271

- K13 「人類学のパラダイム転換——エヴァンズ＝プリチャードとリーチをめぐって」
1995年 『人文学のアナトミー——現代日本における学問の可能性』 山田慶兒・阪上孝編、岩波書店、pp.183-193
当時の人文研を構成する三部(東方部、西洋部、日本部)を横断する研究会の成果。元になっているのは卒論と留学生時代に隔週で提出していたレポートの一つでした。
- K14 「ヒンドゥー教の再生——アヨーディア問題の理解に向けて」
1995年 『アジアにおける宗教の再生——宗教的経験のポリティクス』 田辺繁治編、京都大学学術出版会、pp.358-385 →P3
- K15 「庶民信仰における自己肯定・自己否定・他者否定——ヒンドゥー奉納儀礼の構造と民衆宗教画の変貌をめぐって」
1995年 『宗教現象の地平——人間・思想・文化』 楠正弘編、岩田書院、pp.125-65 →P3
- K16 「女神の水・女神の血——スリランカと南インドの聖河信仰」
1996年 『水の原風景——自然と心をつなぐもの』 福井勝義編、TOTO出版、pp.116-133
- K17 「カースト社会に生きる」
1997年 『講座 差別の社会学 第3巻 現代世界の差別構造』 栗原彬編、弘文堂、pp.329-345 →P5
- K18 「二つのカースト・モデルと現世放棄——南インドのセンゲンダ・ムダリヤールをめぐって」
1997年 『ステイタスと職業——社会はどのように編成されていたか』 前川和也編、ミネルヴァ書房、pp.181-215
- K19 「世界を構築するエロス——性器計測・女性の自慰・オーガズムをめぐって」
1997年 『岩波講座 文化人類学 第4巻 個からする社会展望』 青木保他編、岩波書店、pp.287-322 →P4
エロ転回を果した記念すべき？論文。F27の研究会でお会いした吉岡郁夫氏からいただいた膨大な性医学関係の紀要論文と収集していたアダルト系女性(少女を含む)雑誌が主要な資料でした。提供した4枚の図版は2枚に減らされるも、『癒しとイヤラシ——エロスの文化人類学』(P4)で復活を果たしました。本書序論の船曳建夫氏の言葉に励まされました。
- K20 “Hinoki (Japanese Cypress) Lives Twice: the World of Tsunekazu Nishioka, a Temple Carpenter”
1997年 *Views of the Environment in Asian Countries: Their Relationship to Sustainable Development*, Tetsuo Yamaori ed., Asian-Pacific Center / The United Nations University, pp.9-18 →日本語版 K25
- K21 「暴力の文化人類学序論」
1998年 『暴力の文化人類学』 田中雅一編、京都大学学術出版会、pp.3-28 →N1、P5
論文集の構成と序論の内容が合致した理想的な序論です。
- K22 「女神と共同体の祝福に抗して——現代インドのサティ(寡婦殉死)論争」
1998年 『暴力の文化人類学』 田中雅一編、京都大学学術出版会、pp.409-437 →N1、P3、英語版 K35
デリーの女性センターで行われている新聞記事のスクラップが大変重要な役割を果たしていますが、同時にスリランカでの見聞がなければ書けなかった論文でもあります。「哀しみの共同体」と「名誉の共同体」という対比は、その後も繰り返し参照する概念です。
- K23 「女神研究序論」
1998年 『女神——聖と性の人類学』 田中雅一編、平凡社、pp.5-28 →N2
- K24 「女から女神へ——南アジアにおける神格化をめぐって」
1998年 『女神——聖と性の人類学』 田中雅一編、平凡社、pp.91-120 →N2

- K25** 「ヒノキは二度死ぬ——宮大工西岡常一の世界」
1998年 『アジアの環境・文明・人間』 山折哲雄編、法蔵館、pp.29-43 →英語版 **K20**
樹木と、これを加工する宮大工との関係は、環境を考える上で重要なテーマですが、その後展開することなく放置されている論文の一つです。アニミズムや北方狩猟採集民の「動物の王」への言及もあります。英語版(**K20**)のおかげで、たまに外国から問い合わせがあります。
- K26** 「インドにおける二つのキリスト教——村と聖地」
1998年 『日文研叢書17 共同研究 日本人はキリスト教をどのように受容したのか』
山折哲雄・長田俊樹編、国際日本文化研究センター、pp.287-305 →**P3**
南インドの海岸部に位置し、インドのルルドと称されるヴェーランガンニ教会の縁起を分析しています。
- K27** 「「供犠」のゆくえ——コロニアル・インドとポストコロニアル・ランカ」
1999年 『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』 栗本英世・井野瀬久美恵編、人文書院、
pp.263-288 →**P3**、英語版 **I16**
- K28** 「射精する性——男性のセクシュアリティ言説をめぐって」
1999年 『共同研究 男性論』 西川祐子・荻野美穂編、人文書院、pp.183-200 →**P4**
K19と対をなす男性版の論文。
- K29** 「大東亜共栄圏のインド——戦中の邦語文献におけるカーストと民衆ヒンドゥー教」
2000年 『植民地人類学の展望』 中生勝美編、風響社、pp.45-69 →**P3**、英語版 **I14**
京都大学附属図書館が所蔵していた文献を中心に分析しました。関連文献の発掘だけでなく関係者へのインタビューなど、さらに展開できるテーマの一つです。
- K30** 「ヒンドゥー寺院の法人類学——チダンバラム・ナタラージャ寺院の事例をめぐって(1850-1980)」
2002年 『植民地主義と人類学』 山路勝彦・田中雅一編、関西学院大学出版会、pp.181-206 →**O2**、**P3**
- K31** 「南インドの太陽崇拜——タイ・ポンガル祭をめぐって」
2002年 『世界の太陽神と太陽信仰』 松村一男・渡辺和子編、LITHON、pp.121-131
- K32** 「主体からエージェントのコミュニティへ——日常実践への視角」
2002年 『日常実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』 田辺繁治・松田素二編、
世界思想社、pp.337-360 →**K39**、**P5**、英語版 **I22**
その後『ミクロ人類学の実践』の序論(**K39**)と『誘惑する文化人類学』(**P5**)へと繋がる重要な論文です。
- K33** “Hinduism in Singapore: Ethno-nationalization in Process”
2003年 *Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies*,
Junji Koizumi ed., Osaka University Press, pp.15-34 →日本語版 **I21**
シンガポールについての最初の論文です。
- K34** 「親族研究における進化概念の受容——進化から変容へ」
2003年 『変異するダーウィニズム——進化論と社会』 阪上孝編、京都大学学術出版会、pp.159-189
- K35** “Defying Blessings of the Goddess and the Community: Disputes over *Satī* (Widow Burning) in Contemporary India”
2004年 *Three Mountains and Seven Rivers: Prof. Musashi Tachikawa's Felicitation Volume*,
Shoun Hino & Toshiro Wada eds., Delhi: Motilal Banarsidass, pp.529-548 →日本語版 **K22**
- K36** 「宗教による支配・抵抗から主体化へ——スリランカとシンガポールに見るタミル人たちの儀礼経験をめぐって」
2004年 『岩波講座 宗教9 宗教の挑戦』 池上良正他編、岩波書店、pp.163-190 →**P5**

- K37** “Hindu Priests under Secular Government: A Case Study of the Nataraja Temple at Chidambaram, South India”
2006年 *The State in India Past and Present*, Masaaki Kimura and Akio Tanabe eds., New Delhi: Oxford University Press, pp.270-281
チダンバラム寺院の訴訟についての英語版(日本語は**K11**、**K30**など)。
- K38** 「旅が照射する沖縄戦——二つのオキナワ・バトル・サイト・ツアーをめぐる」
2006年 『社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ』西井涼子・田辺繁治編、世界思想社、pp.417-436
私が米軍に関心を持ったのは、観光地での米兵たちとの出会いでした(**J3**、**R7**)。沖縄戦に関わるさまざまな「旅」を念頭に、米兵たちの観光活動を考察しています。
- K39** 「序論——ミクロ人類学の課題」
2006年 『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』田中雅一・松田素二編、世界思想社、pp.1-37 →**O5**、**P5**
- K40** 「網子たちの実践と社会変化——スリランカ・タミル漁村の地曳網漁をめぐる」
2006年 『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』田中雅一・松田素二編、世界思想社、pp.263-315 →**O5**、**P5**
20年近くかけてやっとまとまった経済活動についての論文です。
- K41** 「貨幣と共同体——スリランカ・タミル漁村における負債の贈与的資源性をめぐって」
2007年 『資源人類学05 貨幣と資源』春日直樹編、弘文堂、pp.59-107
社会関係だけでなく、神と人との関係における「負債」についても論じています。
- K42** “The Indian Community in Kobe: Diasporic Identity and Network”
2008年 *Rising India and Communities in East Asia*, K. Kesavapany, A. Mani and P. Ramasamy eds., The Institute of Southeast Asian Studies, pp.269-284, with Yuki Tsubakitani
椿谷友希氏の修論のデータを基にした英語論文。
- K43** 「序章 フェティシズム研究の課題と展望」
2009年 『フェティシズム研究1 フェティシズム論の系譜と展望』田中雅一編、京都大学学術出版会、pp.3-8 →**N4**、**P5**
- K44** 「エイジェントは誘惑する——社会・集団をめぐる闘争モデル批判の試み」
2009年 『集団——人類社会の進化』河合香史編、京都大学学術出版会、pp.275-292 →**P5**、英語版 **K54**
エイジェンシー論を念頭に、ジラルールや今村仁司らの社会理論を検討しました。
- K45** 「寡婦——都合のいい女？それとも悪い女？」
2010年 『「シングル」で生きる——人類学者のフィールドから』椎野若菜編、御茶の水書房、pp.127-140
- K46** 「男性身体と野生の技法——強精剤をめぐる自然・もの・身体」
2011年 『ものの人類学』床呂郁哉・河合香史編、京都大学学術出版会、pp.157-176 →英語版 **K69**
- K47** 「運命的瞬間を求めて——フィールドワークと民族誌記述の時間」
2011年 『時間的人类学——情動・自然・社会空間』西井涼子編、世界思想社、pp.115-140 →**P5**
- K48** 「コンタクト・ゾーンの人文学へ」
2011年 『コンタクト・ゾーンの人文学 第1巻 Problematique / 問題系』田中雅一・船山徹編、晃洋書房、pp.3-19 →**O9**、**P5**

-
- K49 「コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン——「基地の女たち」をめぐる」
2011年 『コンタクト・ゾーンの人文学 第1巻 Problematique / 問題系』 田中雅一・船山徹編、
晃洋書房、pp.187-210 →O9、P4、英語版 I35
- K50 「癒しとイヤラシのポルノグラフィ——代々木忠監督作品をめぐる」
2011年 『共同研究 ポルノグラフィ』 大浦康介編、平凡社、pp.203-251 →P4
- K51 「スリランカ——民族紛争と多元的視点の探求」
2011年 『世界政治叢書7 南部アジア』 山影進・広瀬崇子編、ミネルヴァ書房、pp.55-71
- K52 「探検と共同研究——京都大学を中心とする文化人類学」
2011年 『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』 山路勝彦編、
関西学院大学出版会、pp.573-609 →P5
- K53 「制度と儀礼化あるいは儀礼行動」
2013年 『制度——人類社会の進化』 河合香吏編、京都大学学術出版会、pp.59-78 →英語版 K66
- K54 “Agency and Seduction: Against a Girardian Model of Society”
2013年 *Groups: The Evolution of Human Sociality*, Kaori Kawai ed., Kyoto University Press,
pp.293-308 →日本語版 K44
- K55 「序章 越境するモノたちを追って」
2014年 『フェティシズム研究2 越境するモノ』 田中雅一編、京都大学学術出版会、pp.3-38 →N5
A.Gellの*Art and Agency*の議論を検討し、フェティッシュの特殊性を論じています。
- K56 「性を蒐集・展示する」
2014年 『フェティシズム研究2 越境するモノ』 田中雅一編、京都大学学術出版会、pp.395-416 →N5
日本各地で実施した秘宝館(セックス・ミュージアム)調査の成果を盛り込みました。
- K57 「現代インドにおける女性に対する暴力」
2014年 『シングルの人類学1 境界を生きるシングルたち』 椎野若菜編、人文書院、pp.187-205
- K58 「シングルを否定し、肯定する——日本のセックスワークにおける顧客と恋人との関係をめぐって」
2014年 『シングルの人類学2 シングルのつなぐ縁』 椎野若菜編、人文書院、pp.79-99
- K59 「序章 軍隊の文化人類学のために」
2015年 『軍隊の文化人類学』 田中雅一編、風響社、pp.1-26 →N7
- K60 「軍隊・性暴力・売春——復帰前後の沖縄を中心に」
2015年 『軍隊の文化人類学』 田中雅一編、風響社、pp.177-212 →N7
- K61 「スリランカの民族紛争と宗教——ソーシャル・キャピタル論の視点から」
2015年 『アジアの社会参加仏教——政教関係の視座から』 櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武編、
北海道大学出版会、pp.309-336
ソーシャル・キャピタル論に対する批判的見解を明らかにしました。
- K62 「道義と道具——他者論への実践的アプローチ」
2016年 『他者——人類社会の進化』 河合香吏編、京都大学学術出版会、pp.295-313 →英語版 K70
他者を自己の目的追求のための道具とみる視点と、道義的な関係を取り結ぶ視点との絡み合いを論じました。
-

-
- K63 「序章 侵犯する身体と切斷するまなざし」
2017年 『フェティシズム研究3 侵犯する身体』 田中雅一編、京都大学学術出版会、pp.3-45 →N8
- K64 「ランジェリー幻想——官能小説と盗撮、格子写真」
2017年 『フェティシズム研究3 侵犯する身体』 田中雅一編、京都大学学術出版会、pp.309-334 →N8
- K65 「ナンバリングとカウンティング——ポスト=アウシュヴィッツ時代の人類学にむけて」
2017年 『異貌の同時代——人類・学・の外へ』 渡辺公三・石田智恵・富田敬大編、以文社、pp.97-137
- K66 “Institution and Ritualization”
2017年 *Institutions: The Evolution of Human Society*, Koari Kawai ed., Kyoto University Press, pp.59-78 →日本語版 K53
- K67 「序章 いま、トラウマを考える」
2018年 『トラウマ研究1 ト라우マを生きる』 田中雅一・松嶋健編、京都大学学術出版会、pp.1-30 →O15
- K68 「女性への暴力、虐待、性暴力」
2018年 『トラウマ研究1 ト라우マを生きる』 田中雅一・松嶋健編、京都大学学術出版会、pp.233-267 →O15
- K69 “Nature and the Body in Male Sex Stimulants”
2018年 *An Anthropology of Things*, Ikuya Tokoro & Kaori Kawai ed., Kyoto University Press, pp.136-152 →日本語版 K46
- K70 “Morality and Instrumentality: A Practical Approach to Theorizing the Other”
2019年 *Others: The Evolution of Human Sociality*, Kaori Kawai ed., Kyoto University Press, pp.303-321. →日本語版 K62
- K71 「〈ひとでなし〉と〈ものでなし〉の世界を生きる——回教徒とフェティシストをめぐる」
2019年 『もの人類学2』 床呂郁哉・河合香史編、京都大学学術出版会、pp.197-212
- K72 「序章 ト라우マを共有する」(松嶋健氏との共著)
2019年 『トラウマ研究2 ト라우マを共有する』 田中雅一・松嶋健編、京都大学学術出版会、pp.1-18 →O16
- K73 「二次トラウマと感情労働——アウシュヴィッツのガイドたちの語りをめぐる」
2019年 『トラウマ研究2 ト라우マを共有する』 田中雅一・松嶋健編、京都大学学術出版会、pp.549-578 →O16
- K74 “Crossing over Barbed-Wire Entanglements of U.S. Military Bases”
2019年 *Civil-Military Entanglements: Anthropological Perspectives*, Birgitte Refslund Sørensen & Eyal Ben-Ari eds., Berghahn, pp.231-250
- K75 「極限を生きる売春女性——インド・ムンバイの調査から」
2020年 『極限——人類社会の進化』 河合香史編、京都大学学術出版会、pp.407-433
- K76 「開いた傷口に向き合う——アウシュヴィッツと犠牲者ナショナリズム」
2020年 『なぜ戦争体験を継承するのか』 蘭信三他編、みずき書林、pp.108-134
-

- K77 「ジェンダー暴力とは何か？」(嶺崎寛子氏との共著)
2020年 『ジェンダー暴力の文化人類学——家族・国家・ディアスポラ社会』 田中雅一・嶺崎寛子編、昭和堂、pp.1-37 →017
- K78 「南アジアにおける強制結婚——規定婚・児童婚・非人間との結婚」
2020年 『ジェンダー暴力の文化人類学——家族・国家・ディアスポラ社会』 田中雅一・嶺崎寛子編、昭和堂、pp.41-62 →017
- K79 「剥き出しの世界に向けて」
2020年 『インド・剥き出しの世界』 田中雅一・石井美保・山本達也編、春風社、pp.9-31 →018
- K80 「女性への暴力、売春、デーヴァダーシー」
2020年 『インド・剥き出しの世界』 田中雅一・石井美保・山本達也編、春風社、pp.137-163 →018
- K81 「宗教研究と日本の宗教人類学」
2020年 『宗教性の人類学』 長谷千代子他編、法蔵館、pp.33-56
- K82 「BDSMと性暴力——同意と痛みをめぐって」
2022年 『官能の人類学——感覚論的転回を超えて』 石井美保他編、ナカニシヤ出版、pp.97-117

コラム

論文集の短文です。

- L1 「マリナ・ビーチの漁民たち」
1991年 『都市の顔・インドの旅』 坂田貞二他編、春秋社、pp.169-173
- L2 「従軍牧師——越境する聖職者」
2004年 『従軍のポリティクス』 青弓社編集部編、青弓社、pp.148-167
- L3 「サティー」
2007年 『やもめぐらし——寡婦の文化人類学』 椎野若菜編、明石書店、pp.193-199
- L4 「『ホモ・ヒエラルキクス』によせて」
2010年 『仏教出現の背景(新アジア仏教史 01 インドI)』 奈良康明・下田正弘編、俊成出版社、pp.62-65
- L5 「タミル人の自決要求(1970年代)」
2012年 『世界史史料 11 二〇世紀の世界Ⅱ 第二次世界大戦後・冷戦と開発』 歴史学研究会編、岩波書店、pp.276-277
- L6 「武器をアートにする」
2014年 『現代の起点 第一次世界大戦 第3巻 精神の変容』 山室信一他編、岩波書店、pp.106-107
- L7 「川村邦光さんから学んだことなど」
2016年 『イシバシ評論(Cultures/Critiques 別冊)』 イシバシ評論編集部編、国際日本学研究会、pp.427-431
→本書に再録
- L8 「ゾンビの軌跡」
2020年 『環世界の人文学』 石井美保他編、人文書院、pp.305-310

- M1 「「スリランカの悪霊Garāについての一考察」へのコメント」
1987年 『民族学研究』 51(4): 410-417
- M2 「オミズヨオミズ、コノヨデイチバンミニクイノハダーレ？」
1989年 『民博通信』 43: 36-40
- M3 「現代に語り継がれるマハーバーラタ」
1989年 『人文』 35: 13-14
- M4 「シヴァ神に帰依した王たち —— インド、タンジャヴール美術館とタミル大学博物館」
1990年 『月刊みんぱく』 2月号、p.14
- M5 「ターバンを脱ぎすてたシク教徒」
1990年 『人文』 36: 36-37
- M6 「ある野生象の死 —— デリーのインド国立鉄道交通博物館」
1990年 『月刊みんぱく』 11月号、p.14
- M7 「「女性の時代」の女神研究」
1991年 『産経新聞』 6月6日夕刊
- M8 「東南アジアの精霊祭祀」(シンポジウム紹介)
1992年 『京都新聞』 1月15日夕刊
- M9 「スリランカ再訪で思ったこと」
1994年 『人文』 40: 37-38
- M10 「「在日インド人二世と語る会」の背景 —— ロンドンの南アジア・ネットワーク」
1994年 『日印文化』 創立35周年記念特集号、pp.103-106
- M11 「犠牲者の声を聞く(水曜フォーラム)」
1995年 『京都新聞』 2月22日夕刊
- M12 「性的人类学」
1995年 『AERA Mook8 人類学がわかる』 pp. 24-25
- M13 「ゲリラ青年と駆け落ち少女」
1995年 『月刊みんぱく』 10月号、pp.15-17
- M14 「宗教と暴力 —— 寡婦を殺す二つの方法」
1995年 『AERA Mook11 宗教学がわかる』 pp.107-111
- M15 「異文化の写真と人体計測」
1997年 『京都新聞』 11月26日朝刊
- M16 「人文コンという異種交流」
1999年 『じんもんこん』(特定領域「人文科学とコンピュータ」研究情報誌) 8: 79-80
- M17 「新世紀考 暴力4<民族>や<文明>を語る危うさ」
2001年 『京都新聞』 11月8日朝刊

-
- M18 「キンゼイ研究所を訪ねて」
2002年 『人文』 49: 40-41
- M19 「沖縄のパキスタン・カレー —— 在日米軍の文化人類学」
2004年 『月刊みんぱく』 5月号、pp.8-9
- M20 「今を読み解く 世界秩序と新しい「暴力」」
2004年 『日本経済新聞』 8月15日朝刊
- M21 「インタビュー 国境と民 見えない、もう一つの「在日」」
2004年 『産経新聞』 10月28日夕刊
- M22 「研究室紹介～文化人類学」
2006年 『京都大学新聞』 第2383号
- M23 「シンガポールの街角がスペクタクルになるとき」
2006年 『人環フォーラム』 19:56-57
- M24 「今村仁司と共同研究の作法」
2008年 『人文』 55: 44
- M25 「寄稿 人類学者、クロード・レヴィ=ストロースを読む」
2009年 『京都大学新聞』 12月1日
- M26 「共同研究会三昧あるいは数値化の試み」
2010年 『人文』 57:44-49
- M27 「鼎談 日本の人類学をめぐる(前編)」
2011年 『理』(関西学院大学出版会) 27:4-7
崔吉城、山路勝彦両氏との鼎談の2回(M28)にわたっての記録です。
- M28 「鼎談 日本の人類学をめぐる(後編)」
2011年 『理』(関西学院大学出版会) 28:10-14
- M29 「視る —— 「しかりつける」商売」
2012年 『朝日新聞』 8月1日夕刊
- M30 「女神の世界へ」
2014年 『季刊民族学』 149:10-13
- M31 「人あるところに官能あり —— クールなエロティック・ジャパン」
2015年 『週刊読書人+PONTO』 2:3
- M32 「春歌としての文化相対主義」
2015年 『人文』 62: 29-32 →本書に再録
- M33 「日本人が抱く、裸体への悲しき郷愁 女体盛りの深すぎる歴史を探る」(取材協力)
2015年 『サイゾー』 6月号、pp.84-88
- M34 「からだを美しく狂わせる方法」
2015年 『美学文芸誌 ESTHÉTIQUE 特集 狂』 2: 44-49
-

-
- M35 「資料と通信」第1回研究者訪問 東亜大学 崔吉城教授
2016年 『文化人類学』 81(1):108-115
上水流久彦氏と崔先生の自宅を訪問して行ったインタビュー。
- M36 「聖職者の禁欲は“今は昔”? 今流行りの教義は性の解放だ!」(取材協力)
2016年 『サイゾー』 7月号、pp.58-61
- M37 「宗教は女性を抑圧してきたのか? 三大宗教の女性観とその“功罪”」(取材協力)
2016年 『サイゾー』 11月号、pp.66-69
- M38 「秘された神道と黙示録のシンボル 『君の名は。』は宗教学的に秀作か?」(取材協力)
2016年 『サイゾー』 12月号、pp.50-53
那覇新都心で「君の名は。」を観て取材に応じました。「君の名は。」は、その後、共同研究「環境問題の社会史的研究」(D61)での発表で取りあげました(2021.11.8)。
- M39 「【討議】性という謎から霊長類をまなざす」
2016年 『『現代思想』特集 霊長類学の最前線』 44(22):42-62
山極寿一氏との対談。
- M40 「セクシュアリティの文化人類学が面白いわけ」
2018年 『トイ人 学問する人のポータルサイト』
→https://www.toibito.com/column/humanities/ethnology/1457?fbclid=IwAR3ZzjLSGDRc_k1XeH5aTX9UeEp762-0-qYkijDx62m23ZXVwZl0WXuWORw
- M41 「人・環での四半世紀」
2019年 『総人・人環広報』 63: 13-14 →[本書に再録](#)
- M42 「対談 フェティシズムって何だ?」
2021年 『ターザン』 2021年8月26日号、816: 46-47
朝井リョウ氏との対談。彼の『正欲』(新潮社)はすばらしい小説です。
- M43 「犠牲区域・水俣の犠牲区域」
2022年 『水俣学通信』 67: 2 →[本書に再録](#)

単独編集

- N1** 『暴力の文化人類学』
 1998年 京都大学学術出版会、476頁
 戦争、食人、生け贄…人類の歴史はまさに暴力とともにあった。人類学は、この問題にどのように取り組むことができるのか。暴力を、とくに「儀礼」を中心に学際的な展望を持って考察することで、暴力論の新たな地平を切り開く。(「BOOKデータベース」より)
 本書は、その後続く京都大学学術出版会とのお付き合いの始まりとなりました。残念ながら、事務局統括だった八木俊樹氏は本書の完成を待たずに1996年7月になくなりました。
- N2** 『女神——聖と性の人類学』
 1998年 平凡社、409頁
 女神は現代に降臨するか。文化人類学、民俗学、神話学、宗教学、美術史学、女性学など11名の執筆陣が、豊饒かつクリティカルな表象に迫る学際的共同研究の成果。「BOOKデータベース」より
 民博の客員助教授として実施した研究会。文化人類学より宗教学を意識して組織しました。
- N3** 「特集 アジアの軍隊の歴史・人類学的研究——社会・文化的文脈における軍隊」『人文学報』90号
 2004年 京都大学人文科学研究所、pp.1-214
 7本の論文が収められています。
- N4** 『フェティシズム研究1 フェティシズム論の系譜と展望』
 2009年 京都大学学術出版会、350頁
 無生物である「モノ」が人へとはたらきかける——「人とモノと身体」の相互関係をフェティシズム概念から斬るシリーズ、第1巻は理論編。宗教、経済、精神分析・性におけるフェティシズム概念、フェティッシュを考える上で無視できないモノ研究、そしてこうした理論的研究がわれわれにもたらす展望、この3部から問う。(京都大学学術出版会HPより)
- N5** 『フェティシズム研究2 越境するモノ』
 2014年 京都大学学術出版会、510頁
 近代は「未開」のモノ崇拜を「フェティシズム」と呼んで切断した。それが近代社会に刻印されたモノの呪いの始まりであった。モノをめぐる固着した植民地的関係の相対化を図りながら、「信仰」「蒐集」をキーワードに、領域と地域を軽やかに越境するモノの呪力に迫る。ヒトと身体とモノの目くるめく交歓を描くシリーズ第2巻。(京都大学学術出版会HPより)
- N6** 「特集・女神」『季刊民族学』149号
 2014年 千里文化財団、pp.3-68
 写真家・大村次郷氏の執念によって可能になった特集です。
- N7** 『軍隊の文化人類学』
 2015年 風響社、604頁 →H44
 特殊な集団であっても、兵士たちもまたひとりの生活者として暮らしを営んでいる。戦略や組織論から離れ「軍隊」の真実に迫る。(風響社HPより)
- N8** 『フェティシズム研究3 侵犯する身体』
 2017年 京都大学学術出版会、508頁
 身体について、メディア研究やカルチュラル・スタディーズなどの成果をも取り入れた専門横断的な成果。身体観が表象と肉体とに分裂したかに見える現代社会において、フェティシズムこそが両者を結びつける。そのフェティシズムを対象に、通文化的かつ研究領域横断的に現代社会におけるヒト・身体・モノの関係を究めるシリーズの完結編。(京都大学学術出版会HPより)
 時間がかかりましたが、おかげさまでなんとか全3巻出版されました。

N9 『Contact Zone／コンタクト・ゾーン』1-11号 →01、02、03、04

2007-2019年 京都大学人文科学研究所人文科学国際センター／人間・環境学研究所
2014年3月発刊の6号以降は、オンラインジャーナルに。編集代表として全号に関わりました。

共同編集(報告書を除く)

01 *Living with Śakti: Gender, Sexuality and Religion in South Asia. (Senri Ethnological Studies 50)*
1999年 Musashi Tachikawa & Masakazu Tanaka eds. National Museum of Ethnology, 293頁
民博の客員助教授として企画・編集した英語論集です。

02 『植民地主義と人類学』
2002年 山路勝彦・田中雅一編 関西学院大学出版会、576頁
人類学と歴史学の対話から生まれた共同研究の成果。複眼的視点から、日本を中心にアジア、アフリカ・南米の過去と現在を問う。植民地化とジェンダー、ポスト・コロニアリズムの表象と葛藤等のテーマを取り上げる。(関西学院大学出版会HPより)
山路氏を客員教授に迎えての共同研究の成果です。19800円(税込)と高額にもかかわらず初版は完売しました。

03 『文化人類学文献事典』
2004年 小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公三編 弘文堂、1072頁
「未開の地」が消失し、植民地が「解放」された現在、颯爽と登場し20世紀の知の中心的位置をしめた文化人類学は、もはや衰退したのか……、という素朴な疑問が聞こえてきます。一方で、「自分とはちがう人」と、どのようにコミュニケーションをするか、これが21世紀の課題であり、わたしたちには「他者」や異文化に対する、よりいっそうの理解が求められています。これまでの学問的蓄積を総括し、新しい挑戦に踏み出そうとする21世紀の人類学に、注目を!(弘文堂HPより)
私の発案で第3部「争点」が導入されました。この第3部では109のテーマが紹介されています。

04 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』
2005年 田中雅一・中谷文美編 世界思想社、334頁
世の中は男と女から成り立っている、というのは本当だろうか。世界には、女性と女性とが結婚する社会もある。常識を疑い、さまざまな文化から学んでみよう。ジェンダーとセクシュアリティの視点から世界をとらえなおすための斬新なテキスト。(世界思想社HPより)

05 『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』
2006年 田中雅一・松田素二編 世界思想社、476頁
交響する人類学へー人類学はフィールドワークという実践のなにを継承すべきか。鳥瞰図が与える全能感を拒否し、権力が作用する場としての日常生活に注目する。虫瞰図にこだわり、「全体化」の誘惑に抗するミクロ人類学の画期的論集。(世界思想社HPより)

06 『ジェンダーで学ぶ宗教学』
2007年 田中雅一・川橋範子編 世界思想社、280頁
躍動する宗教学へ!—もはやジェンダーの視点なしに宗教を語ることはできない。これまでの宗教学が掲げてきた客観性や中立性を問題視し、わたしとあなたと世界との望ましい関係をつくりだすためのスリリングなテキスト。(世界思想社HPより)

07 『人類学の誘惑——京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年』
2010年 谷泰・田中雅一編 京都大学人文科学研究所、92頁
京都大学人文科学研究所に社会人類学部門が創設されて50年を記念した文集。この部門に関わった方々に依頼し、その記憶のよすがとなることを書き留めた文章を、50年記念シンポジウムの記録や記録写真などとともに編みました。

- 08 『南アジア社会を学ぶ人のために』
2010年 田中雅一・田辺明生編 世界思想社、324頁
多種多様な民族・文化・言語・宗教をもつ人びとの、独特のまとまりとネットワークが展開する南アジア。カースト制や多宗教世界から民主政治やグローバリゼーションまで、インドを中心とする7カ国の織りなすダイナミックな動態を解き明かす。(世界思想社HPより)
- 09 『コンタクト・ゾーンの人文学 第1巻 Problematique／問題系』
2011年 田中雅一・船山徹編 晃洋書房、282頁
日本初のコンタクト・ゾーン(接触領域)をめぐる本格的共同研究。新しい人文学の可能性をここに問う!(晃洋書房HPより)
- 010 『コンタクト・ゾーンの人文学 第2巻 Material Culture／物質文化』
2011年 田中雅一・稲葉穰編 晃洋書房、280頁
衣食住という物質文化に注目してコンタクト・ゾーンを論じた論文集。日本の和牛からトルコ絨毯まで、インドのスラムや伝統家屋を取り上げる。(晃洋書房HPより)
- 011 『コンタクト・ゾーンの人文学 第3巻 Religious Practices／宗教実践』
2012年 田中雅一・小池郁子編 晃洋書房、336頁
祖先(租霊)、幽霊、妖怪など「宗教」領域にかかわる「超自然的存在」を想定し、神々との接触(コンタクト)を試みた。宗教の復興によって私たちの世界がどう変化していくのか、それを見きわめ、あらたな世界の可能性を呈示する。(晃洋書房HPより)
- 012 『コンタクト・ゾーンの人文学 第4巻 Postcolonial／ポストコロニアル』
2012年 田中雅一・奥山直司編 晃洋書房、285頁
人びとの生の実態に迫ろうという視点を表明するための概念—ポストコロニアル。コロニアルな経験の語りに耳を傾け、記述することは、私たち自身の生のかたちを創出するために必要不可欠な過程なのである。シリーズ全4巻完結。(晃洋書房HPより)
- 013 『世界宗教百科事典』
2012年 世界宗教百科事典編集委員会編 丸善出版、912頁
高島淳、矢野秀武らと「南アジア・東南アジア宗教」の項目を編集しました。
- 014 「特集 ムスリム社会における名誉に基づく暴力」
2017年 田中雅一・嶺崎寛子編 『文化人類学』82(3): 311-394
本誌初の「客員編集者」として編集に携わりました。
- 015 『トラウマ研究1 トラウマを生きる』
2018年 田中雅一・松嶋健編 京都大学学術出版会、652頁 →H56
トラウマという概念がどのような歴史的経緯を経て成立したのか、また、それが文化、社会的にどのように理解され、表現されてきたのか。さらに、トラウマを典型とする社会的苦悩が宗教や文化的実践においてどのように克服されてきたのかを、文化人類学をはじめとする人文・社会科学的な視点から、多角的かつ総合的に考察する。(京都大学学術出版会HPより)
人文研で行った実質的に最後の研究会の成果です。
- 016 『トラウマ研究2 トラウマを共有する』
2019年 田中雅一・松嶋健編 京都大学学術出版会、598頁 →H56
ユダヤ人ホロコースト、カンボジアの内戦、日本の植民地支配……歴史的トラウマは語り伝えられ、次世代へと引き継がれていく。研究者たちはその過程へ飛び込み、語りに耳を傾けた。経験を乗り越えるための、かすかな光に触れた証言者たちの苦闘。全2冊完結。(京都大学学術出版会HPより)

-
- 017** 『ジェンダー暴力の文化人類学—— 家族・国家・ディアスポラ社会』
2021年 田中雅一・嶺崎寛子編 昭和堂、472頁 →H60、H61、H62
当事者達の語る凄まじいまでの経験に私達は何を感じ、考え、学ぶのか。世界各地でのフィールドワークをもとに考察する。(昭和堂HPより)
2020年12月は、時期的に『FAB』(国際ファッション専門職大学)の創刊準備と『インド・剥き出しの世界』(018)の校正と重なり「ゲラまみれ」でした。
- 018** 『インド・剥き出しの世界』
2021年 田中雅一・石井美保・山本達也編 春風社、456頁
文化人類学者たちが〈剥き出しの生〉を現場から描いた、15章+6つのコラム。人びとが日常的に、またさまざまな事件や事故を通じて文化的・社会的属性を剥奪されて生きざるをえない状況に注目しながらも、グローバルな観点を失うことなく、そこから南アジア世界の強靱な生活世界とその多様性について論じる。(春風社HPより)
第1期INDASの成果論集です。グローバル化が進む中、イケイケムードの南アジア、インド像に一石を投じました。

単著

- P1** *Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka*
1991年 Institute for Research in Humanities, Kyoto University、228頁
1986年6月にロンドン大学に提出した博士論文に基づくスリランカ・タミル漁村の民族誌。
主として宗教実践と村の権力構造を扱っています。非売品でしたが多くの海外雑誌で書評されました。
- P2** *Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka*
1997年 New Delhi: Manohar、228頁
1991年に人文科学研究所から出版した前掲書(P1)のリプリント。来日したMalati de Alwisさんから、スリランカで一番有名な日本人研究者だ、と言われましたが、それはこの本のおかげです。
- P3** 『供犠世界の変貌 南アジアの歴史人類学』
2002年 法蔵館、409頁
本書は第1部「スリランカの宗教と政治」、第2部「インドの宗教と政治」、第3部「儀礼体験の変貌」、第4部「南アジアとわれわれ」の4部からなり、各々スリランカ、インドの宗教と政治についての考察と儀礼の分析、オリエンタリズムについての批判を行っています。→「言説が数億の女を殺す—— 内山田氏の書評に答える」『文化人類学』71(4): 582-586、2007年
- P4** 『癒しとイヤラシ—— エロスの文化人類学』
2010年 筑摩書房、238頁
現代日本の性のあり方や表象について、主として文献や映像作品を取り上げて論じています。内容はともかく、タイトルの評判はすこぶる高い。直接的な影響は不明ですが、風俗関係者の間にも「癒しとイヤラシ」という言葉が定着しています。
- P5** 『誘惑する文化人類学—— コンタクト・ゾーンの世界へ』
2018年 世界思想社、336頁
本書は大きく「誘惑」と「コンタクト・ゾーン」に分かれ、前者では誘惑という概念の意義を論じ、後者ではコンタクト・ゾーンという概念の可能性を論じています。邦語文献、外国語文献の引用・参考数がともに250点以上。本書に収められている10本の論文と2本の補論での議論が重ならないように配慮した結果です。

報告書やシンポジウムの記録などです(煩雑になるのを避けて一部はF、G、Hなどに記載しています)。

編集書

- Q1 『ひと・文化・インド——第2回大阪・アジア文化フォーラム』
1993年 井狩彌介・田中雅一監修 清文堂出版 →英語版Q2
- Q2 *People, Culture, India: The 2nd Asian Culture Forum in Osaka.*
1993年 Yasuke Ikari & Masakazu Tanaka (eds.) Seibundo Publishing →日本語版Q1
- Q3 『南インド・タミルナードウ州の寺院管理法の文化的・政治的背景と訴訟記録の分析』
(平成7～8年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書)
1997年 田中雅一著 京都大学人文科学研究所
- Q4 『島根半島の祭祀と祭祀組織』
1997年 田中雅一・浅沼政誌・品川知彦編 島根県古代文化センター
- Q5 *CD: Hindu Temple Disputes in South India (1876-1924) Database*
2003年 Masakazu Tanaka (comp.) 京都大学人文科学研究所
南インドの判例集データベースをCDにまとめたもの。HPでも公開中。
<https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/database/hanketsu.html>
- Q6 『米軍と自衛隊に属する女性兵士の実態と表象についての文化人類学的研究』
(平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書) 2004年 田中雅一著
京都大学人文科学研究所
- Q7 *Armed Forces in East and South-East Asia: Studies in Anthropology and History.*
2008年 Masakazu Tanaka (ed.) Institute for Research in Humanities, Kyoto University
- Q8 『京都大学サステナビリティ・イニシアティブ 人文科学研究所KSIプロジェクト班研究報告』
2010年 田中雅一編 京都大学人文科学研究所
- Q9 『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊〈1〉』(平成20～23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)
2012年 田中雅一・上杉妙子編 京都大学人文科学研究所
- Q10 『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊〈2〉——韓国レポート』
(平成20～23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)
2012年 田中雅一・福浦厚子編 京都大学人文科学研究所
- Q11 『越境する カワイイ! 可愛い! Kawaii! —— ファッションとマンガ』
京都大学人文科学研究所・人文学国際センター国際シンポジウム報告集3
2012年 田中雅一編 京都大学人文科学研究所
- Q12 *Sex Work in the Age of Globalization: Australia, Korea, Taiwan and Japan*
京都大学人文科学研究所・人文学国際センター国際シンポジウム報告集4
2013年 Masakazu Tanaka (ed.) 京都大学人文科学研究所

記事執筆

- R1 「国際シンポジウム 東南アジアにおける精霊祭祀—— 民衆知識のダイナミズム」
1992年 『宗教研究』 66(1): 233-242
- R2 「年中行事の重層性—— スリランカ、タミル漁村における祭祀を中心に」
1992年 横山俊夫・藤井譲治編 『安定期社会における人生の諸相—— 年中行事』
京都ゼミナールハウス、pp.51-66
- R3 「漁村調査・イラナウヰラ」
1994年 『漁民生活向上(スリランカ)基礎調査団報告書』 国際協力事業団、pp.21-29
高桑史子氏と参加したJICAのプロジェクトの報告書です。
- R4 「南インドの寺院儀礼と家庭祭祀における供物の人類学的研究」
1994年 『食文化助成研究の報告』 4: 69-74、86、味の素食の文化センター → I27
- R5 「資料と通信 ヨーロッパ・アジア・フォーラム参加報告」
1996年 『民族学研究』 61(2): 314-317
- R6 「祭祀組織研究への視座」
1997年 田中雅一・浅沼政誌・品川知彦編 『島根半島の祭祀と祭祀組織』
島根県古代文化センター、pp.100-105 →Q4
- R7 「在日米軍の観光活動—— その生活世界と日本観」
1999年 『旅の文化研究所研究報告』 8: 35-47 →K38
- R8 「妖術と邪術」
2003年 山下晋司編 『日本における文化人類学教育の再検討—— 新たな社会的ニーズのなかで』
(平成13~14年度科学研究費補助金基礎研究(B)(1)研究成果報告書)、
東京大学大学院・総合文化研究科、pp.39-45 →本書に再録
- R9 「資源としてのフェティッシュ」
2004年 内堀基光編 『資源に関する小論集：資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築——
象徴系と生態系の連関をとおして』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.91-96
- R10 「南アジアにおける宗教事情」「現代インドにおける宗教事情(分担)南インド」
2005年 『海外の宗教事情に関する調査報告書』 文化庁、pp.245-249、pp.270-283
- R11 Introduction: Perspectives on the Anthropology of the Military
2008年 Masakazu Tanaka (ed.) *Armed Forces in East and South-East Asia: Studies in Anthropology
and History*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University, pp.1-10. →Q7
- R12 Analysis of U.S. Military Chaplains: Structural Analysis and Subjective Perception
2008年 Masakazu Tanaka (ed.) *Armed Forces in East and South-East Asia: Studies in Anthropology
and History*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University, pp.11-33 →Q7
- R13 「伝統的な生態学的知識(TEK)再考—— エイジェンシー論をてがかりに」
2010年 田中雅一編 『京都大学サステナビリティ・イニシアティブ
人文科学研究所KSIプロジェクト班研究報告』、京都大学人文科学研究、pp.50-58 →Q8

-
- R14 「戦後日本の米兵と日本人売春婦——もうひとつのグローバリゼーション」
2010年 『アジア太平洋地域におけるグローバリゼーション、ローカリゼーションと日本文化』2:27-35、
国際日本文化研究センター → K49
- R15 「在韓米軍基地問題——犯罪と環境破壊」
2012年 田中雅一・福浦厚子共編 『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊〈2〉——韓国レポート』
(平成20～23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)、京都大学人文科学研究所、pp.53-61
→ Q10
- R16 「韓国における反基地闘争——ソウル以北の事例について」
2012年 田中雅一・福浦厚子共編 『軍隊がつくる社会／社会がつくる軍隊〈2〉——韓国レポート』
(平成20～23年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)、京都大学人文科学研究所、pp.62-70
→ Q10
- R17 「カワイイが越境するのは国境だけではない。」
2012年 田中雅一編 『越境する カワイイ！可愛い！Kawaii！——ファッションとマンガ』
(人文学国際センター国際シンポジウム報告集3)、京都大学人文科学研究所、pp.91-92 → Q11、本書に再録
- R18 「現代インドにおけるマイノリティへの暴力」
2013年 外川昌彦編 『南西アジア地域における宗教紛争と平和構築に関する比較研究』(平成22～24年度
科学研究費補助金基盤(B)研究成果報告書)、広島大学国際協力研究科、pp.55-71
- R19 「南アジア」
2013年 『在留外国人の宗教事情に関する資料集——東南アジア・南アジア編』文化庁、pp.12-21
- R20 「フィールドとホームをつなぐ——2013年度研究プロジェクト発表会に参加して」
2014年 『地球研ニュース』46:6
- R21 「シェア居住における主体形成に関する文化人類学的研究——日英の比較を通じて」
2015年 成定洋子氏との共著、住総研編 『住総研研究論文集』41:25-36
私は前半、日本のシェアハウスについて、成定氏は後半、英国のシェアハウスについて論じています。その後、十分に展開することはできませんでしたが、この時知り合った若者たちはその後大活躍しています。

- S1 アデル・ゲティ『女神——生ける自然の母』
1995年 田中雅一・田中典子訳 平凡社
原著：Adele Getty, *Goddess: Mother of Living Nature, Thames and Hudson, 1990*
- S2 ルイ・デュモン『ホモ・ヒエラルキクス——カースト体系とその意味』
2001年 田中雅一・渡辺公三訳 みすず書房
原著：Louis Dumont, *Homo Hierarchicus: Le système des castes et ses implications*, Éditions Gallimard (1st edition TEL), 1979, *Homo Hierarchicus: The Caste System and its Implications* (completed revised English edition), University of Chicago Press, 1980
西欧的な偏見から、私たちはインドのカーストを歪めて理解していないか。それははたして「人や物の自由な交通を阻害し、インド経済の低迷の元凶になった「閉鎖的で(前近代的な)身分集団」なのか。この疑問から出発し、著者は次のような問いを立てる——当事者たちは、カーストをどのように理解しているのか。カースト体系の意味を問う膨大な作業はこうして始まった。デュモンはいわば、カーストの宇宙に参入することを通じて、西欧近代の人びとにとって「思考しえないもの」とされるヒエラルキーの意味、さらに西欧近代のイデオロギー(平等主義的個人)との密接な関係、というテーマを掘みだしたのだ。そこで出会ったのは、浄・不浄という宗教観念だった。本書は、社会人類学の方法によるインド研究の基本文献であり、金字塔である。さらに、異文化について語るとはどういうことか、近代イデオロギーとは何か、という思想的な問いに挑み、二大文明社会の比較を射程に据えた。(みすず書房HPより)
「あとがき」は渡辺公三氏と共著で執筆しています。あまりに時間がかかるので渡辺さんから「田中君は(翻訳作業で)9割を目指しているよね。僕は7割だ」というコメントをいただきました。
- S3 イヤル・ベン＝アリ「(私の)名前、日本の就学前教育と子供の力」
2006年 田中雅一・金谷美和訳 京都大学人文科学研究所 『人文』第53号、pp.1-6
原題：Eyal Ben-Ari, (My) Names, Japanese Preschools and the Power of Children
- S4 イヤル・ベン＝アリ「イスラエル軍隊研究に向けての個人的な旅立ち」
2007年 田中雅一・金谷美和訳 京都大学人文科学研究所 『人文学報』第94号、pp.149-157
原題：Eyal Ben-Ari, A Personal Journey towards Studying the Israeli Military
2005年2月18日に三沢国際交流教育センターで開催された公開講演会(E7)の記録。 → Q7
- S5 ティモシー・フィッツジェラルド「なぜ国際関係論における宗教に注目するのか？」
2012年 成定洋子・田中雅一訳 京都大学人文科学研究所 『人文学報』第102号、pp.51-63
原題：Timothy Fitzgerald, “Why the Focus on Religion in International Relations?” In T. Fitzgerald, *Religion and Politics in International Relations: The Modern Myth*, London: Continuum, 2011, pp.28-38
- S6 アーロン・スカブランド「「愛される自衛隊」になるために——戦後日本社会への受容に向けて」
2015年 田中雅一・康陽球訳 風響社 『軍隊の文化人類学』田中雅一編、pp.213-246
原題：Aaron Skabelund, To Become a “Beloved Self-Defense Force”: The Early Postwar Japanese Military’s Efforts to Woo Wider Society → N7

- T1** 「パラダイムとしての人類学理論」
1991年 『文化人類学を学ぶ人のために』 米山俊直・谷泰編 世界思想社、pp.41-61
企画段階から編集作業まで携わった最初の書籍です。おかげさまでロングセラーになりました。
- T2** 「まつりとまつりごと —— 宗教と権力」
1991年 『文化人類学を学ぶ人のために』 米山俊直・谷泰編 世界思想社、pp.214-229
- T3** 「宗教と社会」
1991年 『宗教学概説』 岡田重精編 杉山書店、pp.117-144
- T4** 「人類学のパラダイム —— 理論と親族」
1995年 『現代人類学を学ぶ人のために』 米山俊直編 世界思想社、pp.14-34
- T5** 「ヨーロッパの人類学 —— フレドリック・バルトの仕事をめぐる」
1998年 『21世紀学問のすすめ 9 文化人類学のすすめ』 船曳建夫編 筑摩書房、pp.76-95、191-192
→ P5、T22
英国に留学するまで知らなかったバルトの業績をまとめています。機能主義から構造機能主義へ、そして象徴分析・構造主義・解釈人類学へ、といった理解とは別の動きを示しました。
- T6** 「伝統の顔と近代の顔 —— タミル社会の男と女」
1998年 『暮らしがわかる アジア読本 スリランカ』 杉本良男編 河出書房新社、pp.56-62
- T7** 「にぎやかな葬式 —— 葬式と年忌」(杉本良男氏との共著)
1998年 『暮らしがわかる アジア読本 スリランカ』 杉本良男編 河出書房新社、pp.172-180
- T8** 「神々の器 —— ヒンドゥー寺院」
1998年 『暮らしがわかる アジア読本 スリランカ』 杉本良男編 河出書房新社、pp.181-187
- T9** 「翻弄される漁民たち —— 漁の村」
1998年 『暮らしがわかる アジア読本 スリランカ』 杉本良男編 河出書房新社、pp.229-235
- T10** 「「核家族」という概念とその普遍性 —— マードック『社会構造 —— 核家族の社会人類学』」
2001年 『家族本40 —— 歴史をたどることで危機の本質が見えてくる』 山田昌弘編 平凡社、pp.270-276
- T11** 「祝う」
2004年 『宗教人類学入門』 大塚和夫・関一敏編 弘文堂、pp.125-135
タイトルからはわかりませんが、米陸軍の創設記念日について分析しています。
- T12** 「ジェンダーとセクシュアリティの文化人類学」
2005年 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』 田中雅一・中谷文美編 世界思想社、pp.1-19 →P4
最初に読んだときからずっと気になっていた名香智子の『ファッション・ファデ』に言及しています。
- T13** 「女になる、男になる —— ジェンダー儀礼」
2005年 『ジェンダーで学ぶ文化人類学』 田中雅一・中谷文美編 世界思想社、pp.210-227
- T14** 「変態する身体 モダン・プリミティヴのゆくえ —— M. ダグラス『禁忌と汚穢』」
2005年 『文化人類学入門 —— 古典と現代をつなぐ20のモデル』 山下晋司編 弘文堂、pp.257-269
→P4、P5、T26
繰り返し書くことになるモダン・プリミティヴについての最初の論考。

-
- T15 「ジェンダーで学ぶ宗教学とは？」(川橋範子氏との共著)
2007年 『ジェンダーで学ぶ宗教学』 田中雅一・川橋範子編 世界思想社、pp.1-21
- T16 「ヒンドゥー教」
2007年 『ジェンダーで学ぶ宗教学』 田中雅一・川橋範子編 世界思想社、pp.76-91
- T17 「軍隊を人類学する——ナショナルとトランスナショナル」
2008年 『人類学で世界をみる——医療・生活・政治・経済』 春日直樹編 ミネルヴァ書房、pp.185-203
第2版で「軍隊——ナショナルとトランスナショナル」に改題されました。
- T18 「通過儀礼」
2010年 『南アジア社会を学ぶ人のために』 田中雅一・田辺明生編 世界思想社、pp.118-130
- T19 「王権と支配」
2010年 『南アジア社会を学ぶ人のために』 田中雅一・田辺明生編 世界思想社、pp.131-143
- T20 「儀礼」
2013年 『よくわかるジェンダー・スタディーズ——人文社会科学から自然科学まで』
木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編 ミネルヴァ書房、pp.38-39
- T21 「縛りからシバリへ——もうひとつのクールジャパン」
2015年 『世界の手触り——フィールド哲学入門』 佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳編 ナカニシヤ出版、
pp.79-92
- T22 「フレドリック・バルト」
2018年 『はじめて学ぶ文化人類学——人物・古典・名著からの誘い』 岸上伸啓編 ミネルヴァ書房、
pp.141-146
T5の続編です。Thomas H. Eriksen による *Fredrik Barth: An Intellectual Biography* (2015)に助けられました。
- T23 「エドモンド・R・リーチ」
2018年 『はじめて学ぶ文化人類学——人物・古典・名著からの誘い』 岸上伸啓編 ミネルヴァ書房、
pp.167-172
Stanley J. Tambiah による *Edmund Leach: An Anthropological Life* (2002)が大変役に立ちました。
- T24 「ポストコロニアリズム」
2020年 『顔身体学ハンドブック』 河野哲也他編 東京大学出版会、pp.296-301
- T25 「セクシュアリティ」
2020年 『顔身体学ハンドブック』 河野哲也他編 東京大学出版会、pp.324-330
- T26 「越境する刻印身体——モダン・プリミティヴにおけるスティグマからカリスマへの変貌」
2021年 『越境するファッション・スタディーズ——これからファッションを研究したい人のために』
高木陽子・高馬京子編 ナカニシヤ出版、pp.95-107
-

事典項目

項目名、出版年、収載書名、編(監修)者、出版社の順に記載

執筆した事典の項目名を挙げています。

- U1 「レヴィ=ブリュル、リュシアン」、「フォークロア」、「トーテミズム」、「祖先崇拜」、「葬制」、「カニバリズム」、「エスニシティ」「聖なるもの」
1988年 『現代思想を読む事典』 今村仁司編 講談社
民博時代に行った仕事の一つです。
- U2 「スリランカ」
1992年 『世界の国くに大百科』 第1巻、浮田典良・大林太良監修 ぎょうせい
- U3 「JVP」、「ジャヤワルダナ」、「シンハラ・オンリー」、「スリランカ」、「タミル・イーラム解放の虎」、「タミル難民」、「タミル問題」、「バンダーラナーヤカ」、「マハウェリ水系開発」
1995年 『世界民族問題事典』 梅棹忠夫監修 平凡社
- U4 「スリランカ」
1998年 『民族遊戯大辞典』 大林太良他編 大修館
- U5 「インド・タミル」、「スリランカ・タミル」
2000年 『世界民族事典』 綾部恒雄監修 弘文堂
- U6 「割礼」、「儀礼」、「供犠」
2000年 『政治学事典』 猪口孝他編 弘文堂
- U7 「サブジェクトとエイジェント」
2002年 『文化人類学最新術語100』 綾部恒雄編 弘文堂
- U8 「スリランカ」、「タミル・イーラム解放の虎」
2002年 『新訂増補 世界民族問題事典』 梅棹忠夫監修 平凡社
- U9 “Religion in Everyday Life”
2003年 *The Oxford India Companion to Sociology and Social Anthropology*, Veena Das ed., pp.861-883 Oxford University Press
- U10 「インドの影絵人形」
2004年 『世界民族モノ図鑑』『月刊みんぱく』 編集部編 明石書店
- U11 「田中雅一編『暴力の文化人類学』」、「L.デュモン『ホモ・ヒエラルキクス』」、「R.ニーダム『構造と感情』」、「M.Bloch *Ritual, History and Power*」、「G.マードック『社会構造』」、「L.H. Morgan *Systems of Consanguinity and Affinity of the Human Family*」、「M.Tanaka *Patrons, Devotees and Goddesses*」、「田中雅一『供犠世界の変貌』」、「Y. Nishimura *Gender, Kinship and Property Rights*」、「F. Barth *Political Leadership among Swat Pathans*」、「カースト論」、「家族制生産様式論」、「儀礼とイデオロギー」、「供犠論」、「交叉イトコ婚をめぐる論争」、「高地ビルマの構造と歴史」、「親族と経済」、「ドラヴィダ型親族名称と婚姻論」、「パシュトゥーン民族誌」、「バラモンの地位」
2004年 『文化人類学文献事典』 小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公三編 弘文堂 →03
本書p.100でも言及していますが、第三部「争点」で文化人類学における論争を扱っています。この項目を書くことで、LSEで学んだ(詰め込まれた)文化人類学の知識を吐き出すことができ、新しい研究にとりかかることができました。
- U12 「スリランカ」、「スリランカ紛争」
2005年 『国際政治事典』 猪口孝・田中明彦・恒川恵一・薬師寺泰蔵・山内昌之編 弘文堂

-
- U13 「L.デュモン『ホモ・ヒエラルキクス——カースト体系とその意味』」、
「田中雅一『供犠世界の変貌——南アジアの歴史人類学』」、
「H.P. デュル『性と暴力の文化史——文明化の過程の神話3』」、
「S.J. タンバイア『呪術・科学・宗教——人類学における「普遍」と「相対」』」
2007年 『宗教学文献事典』 島蘭進・石井研士・下田正弘・深澤英隆編 弘文堂
- U14 「着衣と脱衣」、「性的誘惑」、「供犠」
2009年 『文化人類学事典』 日本文化人類学会編 丸善出版
- U15 「儀礼」
2010年 『宗教学事典』 星野英紀・池上良正・氣多雅子・島蘭進・鶴岡賀雄編 丸善出版
- U16 「南アジアの宗教」
2012年 『宗教の事典』 山折哲雄監修 朝倉書店
- U17 「カースト」
2012年 『現代社会学事典』 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編 弘文堂
- U18 「南アジア・東南アジアの宗教概説」(高島淳、矢野秀武、両氏との共著)
2012年 『世界宗教百科事典』 世界宗教百科事典編集委員会編 丸善出版
- U19 「コンタクト・ゾーン」、「セックスワーカー」、「女性への暴力」
2014年 『世界民族百科事典』 国立民族学博物館編 丸善出版
- U20 「愛撫する手」
2017年 『手の百科事典』 岡田守彦編集代表 朝倉書店
- U21 「女性への暴力」
2018年 『インド文化事典』 インド文化事典編集委員会編 丸善出版
- U22 「セックスシンボルとしての食」
2021年 『世界の食文化百科事典』 野林厚志編 丸善出版

- V1 小川正恭・小松和彦・渡辺欣雄編『社会人類学の可能性 II 象徴と権力』
1989年 『民族学研究』 53(4): 424-428
- V2 川村邦光著『オトメの身体——女の近代とセクシュアリティ』
1994年 『産経新聞』 7月12日朝刊
- V3 小松和彦著『妖怪学新考——妖怪からみる日本人の心』
1995年 『民族学研究』 60(3): 281-284
- V4 鈴木正崇著『スリランカの宗教と社会——文化人類学的考察』
1996年 『宗教研究』 70(3): 149-153
- V5 中野毅・山中弘・飯田剛史編『宗教とナショナリズム』
1997年 『潮』 8月号、pp.347-348
- V6 近藤正樹著『靈感少女論』、近藤正樹他編著『魔女の伝言板——日本の現代伝説』
1998年 『民博通信』 81: 44-53 (鏡リュウジ氏との共著)
- V7 押川文子編『南アジアの社会変動と女性』
1998年 『南アジア研究』 10: 137-142
- V8 青木保他編『岩波講座文化人類学 第6巻 紛争と運動』
1999年 『民族学研究』 63(4): 507-510
- V9 Yuko Nishimura *Gender, Kinship and Property Rights: Nagarattar Womanhood in South India*
1999年 『南アジア研究』 11: 176-180
- V10 栗本英世著『未開の戦争、現代の戦争』
2000年 『民博通信』 89: 27-36
- V11 大越愛子・持田季未子・藤目ゆき・志水紀代子・井桁碧著
『フェミニズム的転回——ジェンダー・クリティークの可能性 (フェミニズム的転回叢書)』
2001年 『日経ビジネス アソシエ』 10月号、pp.235-238
- V12 松園万亀雄編『くらしの文化人類学 4 性の文脈』
2004年 『文化人類学』 69(1): 178-179
- V13 窪田幸子著『アボリジニ社会のジェンダー人類学——先住民・女性・社会変化』
2006年 『文化人類学』 71(2): 269-273
- V14 小谷汪之著『罪の文化——インド史の底流』
2006年 『南アジア研究』 18: 167-173

-
- V15 杉本星子著 『「女神の村」の民族誌——現代インドの文化資本としての家族・カースト・宗教』
2007年 『南アジア研究』 19: 169-174
- V16 関根康正著 『宗教紛争と差別の人類学』
2007年 『宗教研究』 81(3): 196-201
- V17 Claire Anderson *Legible Bodies: Race, Criminality and Colonialism in South Asia*
2008年 *International Journal of Asian Studies* 5(1): 121-123
- V18 Mark McLalland and Romit Dasgupta *Genders, Transgenders and Sexualities in Japan*
2008年 *Social Science Japan Journal* 11(1): 155-158
- V19 河合香吏編 『生きる場の人類学——土地と自然の認識・実践・表象過程』
2008年 『文化人類学』 73(2): 259-263
- V20 川島耕司著 『スリランカと民族——シンハラ・ナショナリズムの形成とマイノリティ集団』
2008年 『南アジア研究』 20: 250-254
- V21 フォージア・サイド著(太田まさこ監訳) 『タブー——パキスタンの買春街で生きる女性たち』
2011年 『Cutting-Edge カティング・エッジ』(北九州市立男女共同参画センター・ムーブ) 40/41: 3
- V22 藤本透子著 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』
2013年 『宗教と社会』 19: 171-176
- V23 新井一寛・岩谷彩子・葛西賢太編 『映像にやどる宗教、宗教をうつす映像』
2013年 『宗教と社会』 19: 212
- V24 山中弘編 『宗教とツーリズム——聖なるものの変容と持続』
2013年 『宗教研究』 87(1): 232-236
- V25 中野歩美著 『砂漠のノマド——カースト社会の周縁を生きるジョーギーの民族誌』
2021年 『南アジア研究』 32: 93-99
- V26 間永次郎著 『ガンディーの性とナショナリズム——「真実の実験」としての独立運動』
2022年 『宗教研究』 96(1): 185-191

企画関連のポスターより

ポスター制作は断りがない限り伊藤恵氏(アクティヴKEI)による



人文学国際研究センター講演会
「コンタクト・ゾーンを生きる!」
2006年12月21日 →E9



人文研アカデミー連続国際セミナー
「コンタクト・ゾーンへの視角」
2007年6月28日、7月2日 →E11



人文研アカデミー共同研究セミナー
「身体=フェティッシュをめぐる技術」
2008年6月5日、12日、20日、26日
→E14



京都大学人文科学研究所社会学部
人類学部門 創設50周年記念シンポジウム
「人類学の誘惑」
2010年4月17日 →E16



人文研・人文学国際研究センター共催
国際シンポジウム
「越境するカワイイ! 可愛い! Kawaii!」
2011年11月27日 →E17
(ポスターは東日本大震災による延期前のもの、制作・小野原教子)



国際ワークショップ
「グローバル化するセックスワーク」
2012年5月18日 →E18



人文研アカデミー連続セミナー
「軍事環境問題の現在」
2014年5月29日、6月5日、12日、
19日、26日 →E23



公開講演会
「名誉・暴力・ジェンダー」
2015年12月12日 →E25



国際シンポジウム
「Social Sufferings and Traumatic Experiences」
2016年1月9日 →E26



人文研アカデミー10周年記念
連続セミナー「液化化する親密圏」
2016年6月16日、23日、30日、
7月7日、14日 →E27



京都人類学研究会11月シンポ
「紛争と和解の正義論」
2016年11月19日 →E28
(ポスター制作・竹川大介)



京都人類学研究会シンポジウム
「いま、グローバルにジェンダー暴力を考える」
2019年4月13日 →E31
(ポスター制作・銭星如)

インタビュー

文化人類学サイコー！

神像 Old Theatre ヒンドゥー社会 Friday Seminar 金山神社 モノ研究
Fish 『性の歴史』 シンハラ タミルナードゥ州 合理主義論争 Village
漁師 SOAS 宗教儀礼 アメリカ アフリカ エージェント 訴訟 ワーク
India ASAFAS 和歌山 エロス マリノブスキー subversive 『文献事典』
宗教学科 動物 ロンドン大学 Writing Up Seminar 歴史 自給自足
現象学 サティールチ コンタクト・ゾーン セクシュアリティ
イデオロギー 北インド レズビアン SM 博物館 宗教実践
殺人 UCL イギリス 京大 結婚 南アジア 夜 米軍 シェンター 超越
セックス 主体 AV 問題 供犠 アジア エロ バラモン 代々木 監督
下着 寺 民衆 生活 タミル人類学 社会 M.Sc 視点 9.11
代理 批判 米兵 感動 LSE 女性 SM コロンボ 実践者 万物
問題意識 バリー 内戦 儀礼 フィールド 女神 モノ 博論 民
他者 デリー 寺院 憑依 体力村 女 欲 沖縄 女装 浄女 王
ポルノ 精神分析 民博 インド 性 宗教 論争 身体 戦争
否定 家族 展示 不浄 象徴 フィールドワーク イラク 哲学
工場 主体化 親族 世界 スリランカ 基地 宗教学 全体化
風俗 トラウマ 死 人類学者 ロンドン 欲望 男性 軍隊 雑食
苦しみ フロイト 自由 日本 文化人類学 自己 violence 海岸 二元論
代々木作品 秘宝館 オナニー パワゴン 実践調査地 痛み 映画
生産 acid 村人 人文研 レズビアン 1 調査 南インド 聖 東北 名誉
デュモン インタビュー ヒンドゥー カースト 男 ベンタゴン 伝統
武装闘争 学説史 フェティシズム サンフランシスコ 自立 シンハラ 人
Peasant 京都 個人 フェミニスト チダンバラム ヒンドゥー 教徒
住居 米軍基地 フィールド ノート 兵隊 ミクロ人類学 トラブル Present 妖術
政治 World 司祭 LS フェミニズム 漁村 情動 存在 Fishermen
東京 ブレイクスルー ジョナサン・パリー エヴァンス=プリチャード 判断
仕事 M.Phil 民衆宗教 在日 モーリス・ブロック 所有 観光 Power イラン
ボンベイ Big

2011年、京都大学人間・環境学研究科 文化人類学分野ホームページのリニューアル記念企画として、大学院生による教員インタビューを受け、これまでの研究者としての歩みや関心のありようをお話しました。同ホームページ上で8回に分けて掲載されたインタビューは、私が文化人類学を志すことになった経緯に始まり、留学や就職を通して恵まれた優れた恩師や学友たちとの出会い、数々の「共同研究」によって鍛えられ、生まれた独自の研究のスタイルやテーマ、フィールドワークと論文執筆の関係、大学院教育において目指したこと、そして文化人類学の魅力や展望など、多岐にわたっています。研究生生活の記録をまとめるにあたり、本インタビューを編集し直し、その後の活動なども補足して再録します。

* 人物の肩書は、断りがない限り2011年当時のものです。写真はすべて田中撮影です。

* インタビュアーの飯塚真弓さん、江原等子さん(当時院生)のお二人と、ウェブ公開にあたって注を追加し、読みやすく編集してくれた金子守恵さん(当時助教)に感謝します。

1 文化人類学との出会い

フィールドで学べ！ フィールドで自己を知れ！

— 初めに、田中先生が人類学に興味をもたれたきっかけや、学生時代のお話を聞かせてください。

田中 高校時代はまずフロイトの精神分析に興味をもちました。何よりも、「教育分析」という方法に魅かれたのです。精神分析家になるためには、自身が患者のように分析対象になるという過程を経なければならなければなりません。これを「教育分析」と言います。たんなる学習ではなく、一種の徒弟制であり、また通過儀礼でもある——講義や読書からは学ぶことのできない自己そのものの理解への欲求がそこに認められます。自分のことを十分に知らなければ他人を理解したり、治療したりすることはできません。このため1973年に東北大学の文学部に入学したときは、心理学を専攻しようと思っていました。

精神分析というのは今でもそうですが当時も心理学においては決してメジャーな学問とは言えなかったし、本格的に勉強しようと思えば医学部に行く必要がありました。どうしようかと悩んでいると、文化人類学という学問もフィールドワークを重視しているということに気づきました。そもそもフロイトの著作の中には『トーテムとタブー』など文化人類学とかかわりの深い書物が含まれていたこともあり、精神分析から文化人類学への移行はそれほど困難ではなかったのです。日本語の本で文化人類学についてかなり初期に読んだのは山口昌男の『アフリカの神話的世界』(岩波書店)でした。ここでも精神分析学的アプローチに1章割かれていて、「移行」がスムーズになされたと思います。今フェティシズムやトラウマなどに関心があるのは、高校時代に出

会った精神分析の影響大ですね。

— フィールドワークという方法が教育分析となぜ類似していると思われたのですか？

田中 それは他人と交わりつつ自己を学ぶというところですか。フィールドワークには分析をしてくれる教師がいません。その分「放置ぶり」は徹底しています。どちらも自己について学ぶことについて徹底していますが、文化人類学ではフィールドに出発した時点で、教師と学生との関係が一時的に断絶します。まあ、実際はどうであれ、「フィールドで学べ！ フィールドで自己を知れ！」という言葉に魅かれたのです。

人類学と宗教学

— でも、先生は修士まで宗教学を専攻されていたんですよね。東北大学ではどんな勉強をされていたんですか？

田中 人類学をやりたいと思ったのはよかったです。当時、文化人類学科があったのは東大、都立大、南山大のみで、在籍していた東北大学には文化人類学科はなかった。それで宗教学を専攻しました。ここには東北大にいらした唯一の文化人類学者であった杉山晃一先生が兼任という形がかかわっておられました。宗教学科では理論を中心的に学び、卒論は英国の社会人類学者であるE.E.エヴァンズ=プリチャード、修論は将来インドで調査をしたかったこともあってフランスの社会人類学者で、エヴァンズ=プリチャードとも近いルイ・デュモンについて書きました。宗教学科にいましたが、卒論も修論も人類学に関するものでした。現象学とか宗教哲学は、大学院の試験を受けるために勉強しましたが、ほとんど身にはついた気がしません。(補1)

〈補足1〉 宗教学の主流は宗教現象学という学問ですが、これがさっぱりわかりません。大学院試験は「宗教現象に

ついて論ぜよ」でした。たくさん書いたのを覚えています
が、何を書いたのかはあまり覚えていません。当時は、木
田元とともにモーリス・メルロ＝ポンティの翻訳を精力的に
行っていた滝浦静雄先生の講義(時間について)にも出席
し、現象学に親しむことのできる環境は整っていました。滝
浦先生はフッサール・アーベント(フッサールの夜)という
セミナーを主催していたこともあり、川村邦光さんと私が山
折哲雄先生にお願いしてドーゲン・モルゲン(道元の朝)と
いうセミナーを始めたのもいい思い出です。メルロ＝ポン
ティは、大学に入学してすぐに『眼と精神』を読む機会があ
りましたが、何度読んでもよくわかりません。

文化人類学を選んだ消極的な理由の一つは、現象学か
ら縁を切ることができるかと期待したからですが、その期待
は徐々に裏切られることとなります。まず、留学したLSE(ロ
ンドン大学経済政治学院＝詳細は後述)で指導教員になっ
てくれたジョナサン・パリー先生は、*Caste and Kinship in
Kangra*という書物を公刊していて北インドの親族やカース
トの専門家だと思っていたのですが、1980年当時はインド
最大の聖地ヴァーラーナシー(ベナレス)で宗教儀礼の調査
を行っていました。最初に交わした会話にミルチャ・エリ
アーデ(彼の宗教学も宗教現象学とみなされている)が出て
きて、たいへん失望した記憶があります。

1993年には教養部改組の一環で生まれた人間・環境学
研究科に協力講座の教員として参加し、そこで同僚となっ
た菅原和孝さんの仕事に親しくなるわけですが、彼の理論
的な支柱の一つが現象学、それもメルロ＝ポンティだとわ
かって、私は大いに落胆します。この現象学と決着がつい
たのは、「エイジェントは誘惑する」(K44)という論文でし
た。ここではむしろメルロ＝ポンティの仕事は今村仁司や
ルネ・ジラルルの仕事と対比させて評価しています。

哲学との関わりについて補足すると、留学先のLSEには
カール・ポパーを創設者とする科学哲学科(Department
of Philosophy, Logic and Scientific Method)がありました。
当時そこには、アーネスト・ゲルナーがいましたが、すでに
彼は哲学から人類学に宗旨替えをしていたようです。フー
コーの『言葉と物』に先駆けること7年、1959年に*Words
and Things*を出版して注目を浴びるゲルナーはまた、「未開
人」の理性をめぐるいわゆる合理主義論争にも関わってい
ます。この合理主義論争の契機となるのは、エヴァンズ＝
プリチャードの妖術についての議論でした。私は卒論でエ

ヴァンズ＝プリチャードの主要作品を取り上げていたので、
合理主義論争についても関心をもってピーター・ウインチ
などを当時読んでいましたが、私自身がこうした論争に寄与
することはありませんでした。

—— インドやスリランカに関心をもたれたのも、ルイ・デュモン
の影響でしょうか？

田中 被差別のことが気になってインドはもともとやりたかった
のですが、修論にデュモンを選んだのは学部の4年生のときに
デュモンに詳しい山折哲雄先生が助教授として着任されたこと
も大きかった。彼はデュモンがデイヴィッド・ポーコックと始め
た*Contributions to Indian Sociology*を全冊もっていたのです。
たぶん日本で初めてデュモンの浄不浄論を紹介したのは彼で
しょう。デュモンの主著である*Homo Hierarchicus*の英語訳が
出ていましたが、誤訳が多いと思い、オリジナルのフランス語版
にも取り組み、英語訳が出ていなかった彼の民族誌*Une Sous-
Caste de l'Inde du Sud*も頑張って訳しました。使えたのは最後
のところだけでしたけどね。ちなみにデュモンの主著の翻訳『ホ
モ・ヒエラルキクス』(S2)を勧めてくれたのも山折先生でした。

調査実習と漬け物

—— 宗教学でもフィールドワークを行う研究をしている方がい
らっしゃいますが、先生もそのような調査に参加されることはあ
りましたか？

田中 宗教学科の話をしませぬ。ここは哲学系とフィールド
ワークを重視する実証系の二本立てでしたが、フィールドワーク
は研究の主要な作業とは考えられていませんでした。(補2)

【補足2】 東北大学の宗教学には哲学的な訓練の伝統が
ありました。そうした訓練の一つがドイツ語の原書購読で
した。学部に入って読んだのが、マックス・シェラーの
『人間における永遠なるもの』でした。ドイツ語も英語の
ようにわかりやすいもの(たとえばヨハン・フリードリヒ・
ハイラーやG.ファン・デル・レーウ)もありますが、シェ
ラーには苦勞しました。しかも、徹底精読でしたのでなか
なか進みません。そうこうしているうちにシェラー著作
集の1巻として翻訳(白水社)が出ますが、講読の進行とは
あまり関係なく、結局2年間で数ページしか進みませんで
した。この精読主義の背景については水村美苗の『日本
語が亡びるとき——英語の世紀の中で』(筑摩書房)が詳し
いですし、私も他のところ(H38)で論じましたので繰り返し

ません。ただ、アメリカに留学すると、彼らに精読の伝統がないことがわかった、というような感想や、英語の書籍を読んでいて、わからないところは読み飛ばして先に進むこと、それを繰り返せばわかってきます、という指導を受けた、というような文章に触れるにつれ、精読というかスロー・リーディングの人文的伝統は近いうちになくなるのだろう、と推察します。原書購読の際には、学生には全訳を勧めますが、これは精読の訓練を受けたせいかもしれません。

フィールドワークで資料をたくさん集めていてもダメだという立場が強く、必ずしも調査への理解があったわけではなかったですね。ただ、大学院ではよく実習という形で皆調査に出かけていました。しかし、どういうわけか私自身はフィールドワークに関心はあったけど、合宿形式の実習には学部と大学院を通じて一度しか参加していません。日本では調査経験はないのです。M1のときに福島に行ったくらいですね。これ1回きりで、2泊3日程度の短いものでしたが、いくつか記憶に残っていることがあります。記憶力が弱い私には珍しいことです。大学院生たちがペアになり、調査村の農家を2、3軒手分けして訪問し信仰について話を聞くんですけど、午後何うと、大量の漬け物が出てくる。実は私はタクアン、奈良漬け系の漬け物は大嫌い。そういう経験もあって農村での調査は将来決してやらないことにしました。それとこの村の人たちの姓が奇妙だったので調べると、かくれキリシタンの村だということもわかった。こういうのは予想外のことだったので、ゾクゾクしました。(補3)

【補足3】あまり知られていないかもしれませんが、福島でも1632年(寛永9年)に会津藩15人、白河藩13人、二本松藩14人、若松藩42人のキリシタンが処刑されています。この村に特有の名前はキリスト教に由来するのではないかと勝手に想像したのですが、真相は不明です。フィールドワークのスリルというか楽しみを、こういう形で経験できたのは幸いだったと考えています。

調査は大学院生が二人一組で行ったんですが、今阪大にいる川村邦光さんは調査をさぼって、もうひとりの院生とアケビを取っていた。こういうのもありだな、と思いました(笑)(L7参照、本書再録)。

「カミサン」へ通った記憶

—— 先生は人類学やフィールドワークにも関心をもちながら、宗教学科に進学されたようですが、もともと宗教への興味もあっ

たのですか？

田中 宗教とまったく縁がなかったわけではありません。今はそうでもないですが、小さいころは身体が弱くて2、3歳のころからずっと、母と「カミサン」に通って漢方を処方してもらっていた。漢方薬を作るとき、カミサンは憑依状態で薬の配合をするんだけど、その光景は今でも鮮明に覚えていますね。ほかのところは知りませんが、祈るだけでなく漢方を処方してくれていたという点で良心的だったと思います。処方されたものには、たとえばモグラの燻製なんかもあった。小さな木箱に入っていたからたぶん高かったのではないのでしょうか。モグラは1回きりでしたが、セミの抜殻なんかは煎じてずっと飲んでいました。

私は4歳のときに和歌山市から東京の世田谷区桜新町に引っ越し、そのあと富山市に2年いて、和歌山に戻ったのは小学校5年のときです。その間、正月に和歌山に帰るとかならずカミサンのところに行く。私は子どもだったので、ただ座っているだけでしたが、母はいろいろと相談していたのだと思います。いやだと思ったことはないですね。小学校に通っている間は漢方薬をずっと飲んでいましたから母が送ってもらっていたでしょう。せんじ薬のおかげでしょうか、中学に入学してからは1度も学校を休まなくなるくらい身体が丈夫になった。中学では1日休みましたが、これはずる休みでした(笑)。そういう経験があったので、チャーマン系の宗教実践は身近な存在でした。東北大の宗教学もイタコやゴミソなど東北の民間職能者についての研究蓄積がありますが、私は結局手を出しませんでした。でもイタコで有名な下北半島には何度か行きましたね。

ジョナサン・パリー先生との出会い

—— 博士課程からはイギリスへ留学されたのでしたね。

田中 はい。フィールドワークへの憧れがあったから、博士課程は人類学のある大学院へ進学したいと思っていた。東北大で人類学をするには限界があったし、杉山晃一先生をはじめ周りの勧めもあって、大学間の協定が結ばれていたLSE(London School of Economics and Political Science=ロンドン大学経済政治学院)への留学を決めました。身分は研究生、あちらではResearch Fee Studentという名前でした。

渡英してすぐ、まず北インドの専門家で、ジョナサン・パリー先生に会いに行きました。研究生として指導してもらうためにね。彼の本(*Caste and Kinship in Kangra*)は修論を書いているときにすでに読んでいました。どちらかというとオーソドックス

クスな親族とカーストの研究でしたから、LSEへの留学が決まると、留学中の1年は親族やらカーストの本をたくさん読まされることになるのでは、と覚悟していました。しかし、彼自身はヴァーラーナシーでの調査を始めていて、関心がヒन्दウー教に大きく移っていました。これはうれしい誤算でした。10月から12月の間は、2週間に1度彼の研究室を訪ねて文献のレビューをしたものをチェックしてもらうということが続けた。これをsupervision(個人指導)といいます。シヴァ神の神話分析とか、献身(バクティ)の意味とか、宗教ばかりでしたね。5、6回レビューのレポートを出したと思います。当時彼とモーリス・ブロックは死についてのセミナーを終え、その論文集 *Death and Regeneration of Life* を編集集中でした。

—— 研究生として勉強されてから、どのくらいの期間を経て博士課程に入学されたのですか？

田中 私は1980年の夏に渡英してパリー先生からインド研究の指導を受けていたのですが、途中で彼の勧めもあってM.Philという名の修士課程に移ることになりました。(補4)

〈補足4〉 M.Philは一般に日本の修士の英語版とみなされています。M.Philのほかに英国の大学にはM.A.(文系)あるいはM.Sc(理系)。ロンドン大学全体から見るとLSEは経済学部で人類学修士はM.Sc)があり、両者は厳密に区別されている。文化人類学を欧米で勉強したことのない学生たち、あるいは文化人類学を学部で専攻したことのない欧米の学生たちは、博士課程に進む前にM.A.やM.Scと呼ばれる1年間の修士コースに入ることを要求されます。そこで学部3年分(英国は4年ではなく3年間)の内容を1年間で勉強し、6月に試験を受け、そのあと簡単なエッセー(文献レビュー中心)を書けば学位を取得できる。これに対しM.Philは2年間のコースで、(どちらかというと)自身のオリジナルな調査(ただし、人類学であってもフィールドワークが求められてはいない)に基づく修論が評価の対象になります。日本と違ってM.Philコースを終えてから進学するわけではなく、ほとんどは途中でPh.D(博士課程)へ移動するのです(博士課程の入り口がM.Philという名前にすぎないというほうが正確かもしれない)。M.Philに進学した人はほぼ自動的に1年後には最低3年間のPh.Dに移り、それと同時にそれまでM.Philの学生として登録していた期間もPh.Dに数えられます。移らないのは、2年間で学位を必要としているような留学生、政府派遣や会社派遣の学生。2011年現在、ブルネイの外務大臣を務めるLim Jock Sengさんも2年で結果を出さなければ

ならなかったためM.Philの学位だけ取得して帰国しました。

将来博士課程に移ることを前提にM.Phil課程に登録することが1981年の1月に許されました。しかし、M.Scの学生と同じようにM.Phil Qualifying Exam(M.Philで受ける資格試験)を6月に受けるようにと言われました。今日本の博士課程のある大学では修論を廃止して代わりに試験を実施すべきだという動きがありますね。この試験の英語訳がM.Phil Qualifying Examとなっていて懐かしくなりました。この試験で合格すれば、晴れて将来博士課程に移れるということです。落ちたらM.Philで出てください、ということになります。

そういうわけで、1981年の1月から3月までは政治・経済、親族理論なんかの試験勉強をしました。パリー先生がサバティカルになったので、代わりに1949年生まれのカリス・フラウ先生が私の指導教員になりました。当時活躍していた日本の文化人類学者の中では若いと思っていた小松和彦さんが1947年生まれ。フラウはすでに本も出していたので、「若い!!」と思いました。彼は南インドの専門家でしたが、インド関係の指導は当時受けず、試験対策のためのレポートを書いて読んでもらっていた。6月にはM.Phil Qualifying Examに無事に合格した。それまで専門的に勉強していたのは宗教だけでしたが、いろんなことに関心があったので政治や経済の勉強も苦にならなかったですね。



写真1 LSE Old Buildingの入り口(2012年5月撮影)

LSEの教育システム

—— 試験勉強はどのようにされていたのですか？

田中 試験の内容はM.Scの学生が受けるのと全く同じです。ですから私はすでにM.Philでしたが、M.Scの学生と一緒に講義やゼミに出ていました。過去問は見ることができますが、講義だけ聞いていても答えられない試験ばかりなので、本や論文はオリジナルにあたって読まないといけない。大量に読まなければならず、同じ境遇の学生たちの連帯感も強まります。あるとき夜道を歩いていたら、ペルーから留学していた学生(Fernando Santos-Granero)が空を仰いで、「月見るなんて久しぶりだね」と吉田拓郎のようなことを口走りました。そこにいた5人くらいの学生がみんな大きくうなずいていたのが印象に残っています。

この1年間のコースは徹底的な詰め込み教育です。1年間で英国人類学のすべてを学べ、この経験をして初めて英国人類学の入り口に立てるというメッセージが強く感じられるコースです。博士号の取得が大きな目標であるとしても、修論を重視するM.Phil.と異なり、1年間のコースワークと試験が主のM.A.やM.Scのほうが通過儀礼としてはずっときつくて、その分、仲間との絆も深まるというのが実感です。

—— M.Phil Qualifying Examに合格されたあとは、どのような指導を受けられていたのですか？

田中 少し説明します。まず調査地について勉強する。これは日本と同じです。1年くらいしたらリサーチ・プロポーザルというのを書いて、フィールドに行く。学生たちがフィールドワークからもどって博士論文を書き始めると、Writing Up Seminarに参加します。私は1年半調査地にいましたから平均だと思いますが、長く調査をしていたりすると、参加時期が遅れます。ずっと先輩にあたるような人物と同じ時期にWriting Up Seminarで一緒になります。これは極端な例ですが、すでにマルクス主義フェミニスト人類学者として注目されていたオリヴィア・ハリスも発表していました。Writing Up Seminarは毎回誰かの博論の数章が事前に配布され、それについて議論するというものできわめて有益でした。詰め込みのM.Scコースもこの執筆支援ゼミもたいへんよくできていると私は思いますが、なぜかフィールドワークを支援するような仕組みは弱かったですね。学部で実習とかも想定されていないようでした。

これは、フィールドワークはできて当然。難なくできる人だけにしか開かれていない方法だというふうに、きわめてエリート主義的なものとして位置づけられていたからかもしれません。カ

メラの使い方すら知らない学生でも、フィールドワークを失敗するというようなことは考えられていなかったのです。みんな初めての外国(フランスやオランダくらいは行ったことがあるかもしれませんが)で、しかも当時はフィールドとホームを頻繁に往復することなど考えられなかった、そんな状況でフィールドに行っちゃうわけです。で、大病を患ったり、フィールドノートをなくしたり、男女関係に煩わされたりしながらも、数年後には立派な人類学者としてゼミ教室だったセリグマン・ライブラリーに突如現れ、立派な報告をする。フィールドワークをしたかどうか。学生たちの中にはその経験の有無によって大きな溝があるのです。フィールドワークが終わればもう教員にもcolleagueとして迎えられる。英国の慣習上ジョニーとかクリスとかモーリスとか呼ぶにしても、フィールドワークが終わってからだとずっと後ろめたさがなくなります。

イギリスでの恩師と友人たち

—— 50周年記念冊子『人類学の誘惑』(07)の文章から察するに、同時期にLSEで学んだ研究者たちの動向をかなり意識しておられるように感じたのですが、同期生の方たちは現在どのようなところで研究活動を続けられているのですか？

田中 幸運なことに、私が親しかった人たちの多くは大学に就職しています。誰かがLSE人類学の第二期黄金時代と言っていました。第一期はもちろんマリノフスキーとその弟子たちの時代です。たとえばセント・アンドリュース大学にはクリスチーナ・トーレンとピーター・ガウがいますし、ブルネイ大学にはジェルの弟子で彼の論文集を編集したエリック・ハーシュがいます。マンチェスター大にはペニー・ハーヴェイ、ロンドン大学のユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)には、マテリアル・カルチャーを専門にするスザンヌ・キューヒュラーや、視覚芸術に関心があるクリス・ピネーがいますね。

50周年冊子に私が書いていたのは彼らが編集に携わっていた*Journal of Material Culture* のことでしょう。同じくロンドン大学のゴールドスミス校にはソフィー・デイがいます。彼女もともとラダックのシャーマニズムの研究をしていましたが、最近ハセックスワーカーのライフ・ストーリーを扱った*On the Game*を出して注目されています。私の関心と今一番近いかもしれません。他にエジンバラ大学にはrelatednessで有名になったマレーシア研究者のジャネット・カーステンがいます。彼女の夫はLSE出身ではないですが、ジョナサン・スペンサーといってスリ

ランカの研究者です。彼とはスリランカでの調査を終えてから、スリランカ版のWriting Up Seminarでよく会いました。ランカスター大学で宗教学を教えている川並宏子さんもほぼ同じころLSEに留学していました。それに、ブルネイの人類学科創設に携わったフランク・ファンセロー。今思い出せるのはこのくらいです。

—— 寮での学生生活や、その他に交友関係などのエピソードがあれば教えてください。

田中 私はずっと大学寮にいました。結婚して長期調査に行く1982年までの話に限ると、ほとんど相部屋にいました。最初、香港の医学生と相部屋だったのがうまくいかなかった。そのあと、私の研究のこともありインド人をルームメイトにして欲しいと頼むと、スリランカのタミル人がルームメイトになった。彼とはうまくいって、タミル語を教えてもらったり、ロンドンのタミル系ヒンドゥー寺院などに連れて行ってもらったりしました。彼は理系でRAのようなことをしていましたから大変規則正しい生活でした。週末には同じスリランカ出身のタミル人たちが何人も私たちの部屋に集まり、食事を一緒に作ったりして楽しんでいました。私は平日も彼の作るカレーを食べさせてもらっていました。最初は自分も作っていましたが、パンとポテトばかり食べていたので、「日本人はコメを食わないのか」と真顔で質問されたのを覚えています。でも、うまくいっていたと思っていたのは私だけかもしれません。彼は重いうつ病になってバーミンガムにいる姉のところに一時引っ越ししてしまったからです。

寮ではタミル系の人たち以外にも、よく一緒に遊んでいました。みんなでよくいろんなところに出かけました。夜のCOMMONルームにはいつもイラク人の医者たちがたむろしていて彼らとも仲良くなりました。イラン・イラク戦争が始まった直後だったこともあり、夫婦で来ていたイラン人は肩身が狭そうでした。

ほかには指導教員だったパリー先生が自宅のクリスマス・ランチや食事などにことあるごとに招待してくれました。やはり一番お世話になったと思います。LSE時代の恩師です。もうひとり、忘れてはならないのはSOAS(The School of Oriental and African Studies=ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院)でタミル語を教わっていたジョン・マー先生。タミルの研究をしたいと述べたときにパリー先生が一番心配したのは、この先生についてでした。タミル語の古典詩歌が専門。郊外の自宅の庭にはパゴダがそびえ立ち、鉄道ジオラマが一部屋を占める鉄道モデルのコレクター、さらにインド音楽の大家でもありました。

そうこうしているうちに82年春に結婚のため、一時帰国します。

こうして試験に合格してからおよそ1年経た1982年夏からいよいよ夫婦でスリランカの漁村に長期調査に行くことになりました。

2 長期フィールドワークに向かう

調査地を決めるまで

—— 初めて長期フィールド調査へ出掛けられたときのお話を伺いたと思います。まずスリランカを選んだ理由を教えてください。

田中 先にもお話しましたが、調査はインドをやろうと留学前から考えていました。1980年代のインド研究はまだ文献中心で、今のようにフィールドワークが長期でできるような状況ではありませんでした。数少ない研究のほとんどは北インドにおける農村部の調査に基づくものだったこともあり、やるとしたら南インドの海岸部をやろうと思っていました。

—— 最初はインドでフィールドワークをしようと思われていたのですか？

田中 はい、1980年に留学し、博士課程への進学も正式に決まった81年夏にいったん帰国します。そのあとまたロンドンに戻るわけですが、途中でインドにストップ・オーバーして1カ月ほど南インドに滞在します。ちょうど神戸のポートアイランドができたばかりで、そこでミス・インターナショナルが開催された直後でした。このミスコンにインド代表として参加した女性が機内で隣の席になるという幸運に恵まれました。

その彼女がまだ無名に近かった女優のミーナークシー・シェーシャードリだったのです。ひとりで日本に来ていたのにまず驚きました。当時17、8歳の学生で、これから女優でやっていくのかもはっきりしない様子でした。彼女はタミル人(バラモン)でした。これから南インドに行くというと、タミル語をいくつか教えてくださいました。タミル語に飽きたのか、眠いから肩を貸してほしいと言われ、そのまま眠ってしまいました。その後、彼女は*Hero*などのヒット作に恵まれボリウwoodsのセレブの仲間入りをします。賞も持っているはずですが、ボンベイ(ムンバイ)に着くと彼女の家族が待っていて、私を国内線のターミナルまで送ってくれました。

私はボンベイからマドラス(チェンナイ)経由でタミルナードゥ州のティルチラパッリに向かいます。そこで調査をされていた原忠彦先生に会うためでした。ホテル・アリストにチェックイン。毎晩、先生の部屋で南アジア研究(者)のいろはを教えてください

ました。すでに調査村に入っていた水嶋司さんのところも訪問しました。ティルチラパッリを後にしてから、タミルナードウ州を中心に南インドの海岸部をめぐるのですが、どこも立派な教会が建っていて、めざすヒन्दゥー教徒の漁村を見つけることはできませんでした。このことをロンドンに着いてからジョニー(ジョナサン・パリー)に報告しました。すると、彼の親友のジョック・スティラットを紹介されました。

— ジョック・スティラットはスリランカ研究者だったのですね？

田中 はい、ジョックもジョニーもE・リーチの学生です。私たちはリーチが南アジア研究者だと意識することはあまりないですが、カーストについての論文集を編集し、スリランカ出身のS.J.タンバイアとともに、ケンブリッジで多くの南アジア研究者を育てています。1970年代の初めだと思いますが、ジョックはフィールドワークに必要なだろうと言われ、リーチからトヨタの車をもらったそうです。

— それでスリランカになったのですか？

田中 すでにジョニーから私の調査地について相談されていたのでしょ。ジョックが、スリランカのヒन्दゥー漁村を紹介してくれることになり、サセックス大学の彼の研究室を訪ねました。そこで話を伺って即決しました。迷いはありませんでした。調査地となる村についてのフィールドノートもいただきました。フィールドノートと言っても、タイプできちんと清書されているものです。

— いよいよ出発ですね。

田中 通常、博士課程に入って最初の1年はリサーチ・プロポーザルの執筆に集中するのですが、私は少し早めの1982年春にスリランカに行くことになります。そのまま調査というのではなく、一時帰国の途中に立ち寄り、結婚してからすぐにスリランカにUターンという段取りでした。身の回りの品や書籍は寮のストア・ルームに入れて、(いつ帰ってくるのか決めてははみませんが)スリランカに向かいました。

ロンドンを離れる直前に、ジョニーの家で食事をして、フィールドノートなどを見せてもらいました。食事には何度も招かれていましたが、書齋に入ったのはそのときが初めてでしたね。そのとき言われたのが、6週間に一度フィールドノートの控えを送ってくるよということでした。ノートを紛失しないようにカーボンコピーを取り、それを教員に送る。ただ、私の場合ノートは日本語だし、タイプライターで清書をするわけではないので、一度だけレポートらしいものを送っただけでやめてしまいました。

ノートのカーボンコピーも数回でやめました。

スリランカ出身のルームメイトがコロomboのペッター地区の布屋さんを紹介してくれていました。この布屋さんが空港に迎えに来てくれていて、そのまま彼のお店に投宿。1階がお店、2階は店員が寝泊まりできるようになっていました。昼食に最初に頂いたのがドーサ(トーサイ)というパンケーキでしたが、その付け合せについてきたオレンジ色のペーストがものすごく辛い。ニンジンサラダとっていたら、ココヤシの果肉のすりおろしにチリを混ぜたものだったのです。このお店は、1983年7月の暴動で内部が焼き払われてしまいます。店で雇っていた少年がひとり殺されたとも聞きました。このお店で数日暮らしてから、私を引き受けてくれたペラデニヤ大学に挨拶に行き、そのあといよいよ村に向かいます。その後いったん帰国し、あわただしく結婚式を挙げます。すぐにまたスリランカに向かうつもりでしたが、ヴィザの発給が遅れたりして、実際に調査を始めたのは1982年6月のことでした。

フィールドでの生活と民族紛争

— 奥様の著書(田中典子『消されたポットウ——スリランカ少数民族の女たち』農山漁村文化協会、1993年)を読むと、電気も水道もない、水に虫が浮いていたりするなど、漁村の生活は最初とても大変そうな様子でしたが……。

田中 妻は Deng 熱やマラリアにかかり、また蚊に咬まれたあとがひどく化膿したりしてかなり苦しんでいましたが、私自身は特に生活が大変だとは思いませんでした。食べ物も問題なかったし、すんなり現地での生活に入り込めたと思います。フィールドに対して失望することもなかったですね。私自身フィールドでひどい病気になったことはなかったと思います。耳が少し膿んでお医者さんに行きました。それから夕暮れどきに牛の群れとぶつかってバイクが横転したくらいでしょう。幸いかすり傷ですみました。

調査地は、村と言っても、当時で5500人ほど住んでいましたし、医者が常駐する簡単な病院もあった。バスで1時間乗ると、この地域の中心地となる町に出ます。さらに2時間ちょっとでコロomboに着きます。魚は毎日コロomboの魚市場へと出荷されていました。通常人類学者が想定している調査地に比べると、コロomboのような都市と密接に関係していたと言えます。

— フィールドでの印象的なエピソードを聞かせてください。

田中 これはカルチャー・ショックの例として講義でもよく取り

上げますが、スリランカでの調査も1年が過ぎ、村の外での調査も始めようとしていたころのことです。ある村を訪ねて、そのヒンドゥー寺院で憑依をする司祭に会いました。彼の家を訪ねるのですが、そこで飼っていた犬が土間に排泄された赤ちゃんのウンチを食べ始めたのです。これが一番ショッキングでした(笑)。あれには驚きました。

それとやはり民族紛争ですね。スリランカは1948年に独立します。総人口の7割がシンハラ人、それ以外がほとんどタミル人です。1983年夏、スリランカでの調査を始めてちょうど1年が過ぎたころに、のちに「7月の暴動」と呼ばれるタミル人虐殺事件が勃発します。私はリアルタイムでこれを経験しました。たまたまスリランカ北部のアヌラーダプーラでワシントン大学のジェームズ・ブラウとジョックと彼のパートナーのリズ・ニッサンと会っていたのですが、そこからフィールドへ妻と帰ろうとしていた前日に暴動が始まったのです。帰路では真っ黒に焼けた大規模なトラックが横転している光景を見ました。

私はオートバイをもっていたので、村人に頼まれて、ライフル銃を運んだり火焰瓶を作るためのガソリンを入手したりするように依頼されました。私の調査村は、タミル人のヒンドゥー教徒が圧倒的に多いのですが、近隣に住むシンハラ人たちの襲撃を恐れていたのです。村と外部を結ぶ橋は、大型車両が通れないように一部破壊され、見張りがたてられていました。ライフルは運びましたが、ガソリンは丁寧にことわりました。大家さんの奥さんの弟夫婦がコロomboの近くに住んでいて危険だということで、様子を見に行きました。まだ暴動が続いていたころで、道路際のタミル人の家が放火され、煙が立ち上っていました。

少し落ち着いてからコロomboにも行きましたが、タミルの人たちが集住していた地区などはひどく破壊されていました。最初に来たときに滞在したペッター地区のお店もひどい状態でした。

参与観察とは生活すること

—— フィールド調査では先生が体験されたように、現地でのトラブルに巻き込まれるなど、生命の危機すら感じることもあると思います。それでもフィールドへ行き、自分の身体を使って調査する意義とは何でしょうか？

田中 屋外で資料を収集する研究はすべてフィールドワークと言えますが、文化人類学のフィールドワークは、生活がキーワードです。祭りを観たり、長老にインタビューしたりするためにフィールドで数日間過ごすのは、「生活」とは言えません。長期

での滞在が必要ですが、当然その分トラブルも増える。しかし、そうしたトラブルこそフィールドワークを豊かなものにするし、研究者を鍛えていくことになります。

たとえば、私の場合、最初友好的でいろいろ手伝ってくれていた村人が、実は村のなかでは好かれていなくて、私がほかの村人たちと仲良くなっていくにつれて嫉妬し始める。嫉妬だけでなく、調査に支障が出るようないやがらせを働くようになりました。彼とのトラブルを通じて、村の人間関係がよく見えてきましたし、信頼関係も強まりました。逆に、村人とトラブルが解決できないと、フィールドを去らなければならない、ということも起こるでしょう。

もちろん、民族紛争に巻き込まれて命を落したり、国外追放されたりする人類学者も出てくる。そうしたリスクがあるにしても、生活をするという観点は重要です。20代半ばに2年近く、見知らぬ世界で暮らすことをプログラム化している学問は人類学しかありません。これこそ人類学のフィールドワークを、ほかのフィールド・サイエンスから分ける決定的な要素だと思っています。参与観察という言葉は、たんに祭りに参加するとか、一緒に歌を歌うとかではなく、生活することを意味することだと思っています。

フィールドワークは、危険も多いと思いますが、人間が身体的存在であること、また社会的存在、つまり他者との関わりの中で生まれてくるような存在であることを教えてくれます。頭脳労働が中心であるはずの知的実践の最前線で、人類学者は自分たちが身体的存在であることを思い知らされることになるのです。これは素晴らしいことではないでしょうか。

—— スリランカではほかに何かありましたか？

田中 そうですね。7月の暴動の後、村の漁師たちを追って西海岸から東海岸に行くことになりました。漁師たちは、10月から4月の半年を西海岸に位置する村で、残りの半年を東海岸のキャンプ地で過ごすという生活をしています。理由はモンスーンのために海が荒れ、それぞれ半年しか漁ができなくなるからです。1984年になると、武装闘争も激化し、北部や東北部に行くことが困難になりますが、1983年はまだ問題ありませんでした。

漁師たちと一緒にトラックに乗って、ずっと東北に進んでいくと、まわりに何も無い砂浜の海岸に着きます。初日は小屋も立てず、網を砂の上に敷いて寝ました。「星降る夜」という言葉がぴったりの夜でした。

朝は6時ごろから地引網を引き始め、とれたての魚のカレー



写真2 地曳網漁(1983年2月撮影)



写真3 魚の仕分け(1982年12月撮影)



写真4 キャンプ地(1983年9月撮影)



写真5 塩田で働く調査村の女性たち(1983年10月撮影)

とご飯で朝食をとります。最高の日々でした。ほとんど男たちだけでしたが、女性や子供も数人いて、彼女たちはコロンボに出荷する干し魚を作ります。

村では6時半ごろにインド洋に沈む夕日を毎日見て過ごしていましたが、なにせ人が多い。これにたいし東海岸はまったく何もない世界でした。海と砂浜、パルミラヤシの木だけ。この場所が2004年12月26日に津波に襲われてしまいます。東海岸は漁期ではなかったので、調査地の村人から犠牲者が出なかったのが不幸中の幸いでした。近くには村人たちが出稼ぎに行っていた塩田があるのですが、そこでも数日過ごしました。体中から水分が抜けていく、そんな世界です。

「何でも見てやろう、してやろう」の精神

—— 有意義な調査を行うために、フィールドワークに出発する前にすべきこと、フィールドで心掛けるべきことはありますか？

田中 調査出発前には先行研究の文献レビューをしたりテーマについて議論したりして調査の目的を明確にすることが重要です。私が勧めたいのは、フィールドに1冊か2冊、自身の研究テーマに関係している本をもっていくことです。これと同じ本を書くなら、どんな資料が必要なのか、どんな質問を誰にしたらいいのかを、本から推測して実践に移すこと。同じデータを集めれば同じような本が書けるはずですよ。それに、その本の問題点ははっきりしますから、フィールドでの勉強には最適だと思います。私は、留学前に購入していたブレンダ・ベックの民族誌 *Peasant Society of Konkku: Study of Right and Left Subcastes in South India* とジョックがくれたポール・アレクサンダーの新刊 *Sri Lankan Fishermen: Rural Capitalism and Peasant Society* のドラフトをもっていきました。

調査に行く前に、ジョニーと南アジア社会における初潮儀礼や婚姻について議論したことがあるのですが、アンソニー・グッドがLSEのゼミで発表した原稿 *Female Bridegroom* が「参考になるのでは？」と送られてきました。こういうきわめて真摯な支援は、見習わなければいつも思っています。

何をするかははっきりしておくことにしたことはありませんが、一旦フィールドに入ったら、自身の研究課題以外のことがらについても関心をもつほうが良いと思いますね。何かを理解することも大事ですが、フィールドにどんな人たちが住んでいるのか、何を生活しているのか、といった質問にきちんと答えることができなければなりません。また、もっとおもしろいテーマが

見つければ、調査前の勉強にこだわらずに、テーマを変えるような臨機応変の態度も必要です。しかし、同時にあたらしいテーマについても理論的な背景を知っておく必要があります。おもしろいからという理由だけで、論文を書くことはできません。選択する際に、見通しというか、議論を組み立てることのできる知識が必要です。この意味でも、M.Scのようにオールラウンドに人類学の知識を学ばせるコースは重要です。

私はフィールドワークの基本は、まず一緒に住むあるいは生活を共にすること。つぎに、あらゆることを見る／いろんなものに参加する機会を得ること。「何でも見てやろう、してやろう」の精神です。最後にいろんな質問をしてデータをとること、だと思っています。実態がどうか、ということももちろん大事ですが、質問を通じて少なくとも人びとがどう考えているのかわかるはずで、ゼミでも、「直接聞いてみましたか。どんなふうに答えていましたか」と学生たちに尋ねます。この質問に答えることがまず要求されます。

具体的に言いますと、私の場合、祭りや儀礼があれば、それを見に行く。それにプラスして地引網などの漁について調べる。個別訪問をして、世帯構成や親せき関係を調べる。600世帯を超える大きな村なので、この個別訪問は妻にも手伝ってもらいました。個別訪問は、もちろんデータ収集のためという目的もありますが、何よりも村人たち一人ひとりと親しくなれたのが良かったです。誰がどんなところに住んでいるのかが具体的にわかりますし、村人たちも私たちと話ができて親しみをもつことができました。ただプライベートな生活に踏み込むのですから、調査し始めてすぐに個別訪問というのは警戒されて、よくないかもしれません。個別訪問から、新しい調査項目なども発見できると思いますから、遅すぎるのも困ります。フィールドに入って数カ月してからというのが一番いいでしょうね。当時の私の調査は宗教、経済、家族・親族の3つが主でした。政治は弱かったですね。

とはいえ、1年もフィールドにいと、そこでの生活が当たり前になり、特に宗教儀礼など特定のテーマだけにこだわっていると、やる事がなくなってきてしまいます。では何をしたらいいのか。

彼らは1年間何をしていますか？ 答えは仕事です。毎日お祭りがあるわけではありませんから、仕事・労働を無視するわけにはいきません。フィールドに暮らす人びとの生活に関心をもって、なんでも調べてみるのが大事です。それが結果的にフィールド全体の理解にも、自分のテーマを総合的に理解することにもつながりますからね。

調査の「区切り」をつける

— フィールド調査の期間は先生自身で決められたのですか。博士論文執筆計画として考えると、どれくらいの期間が妥当でしょうか？

田中 私は奨学金の事務手続きの関係で、1年半で調査を切り上げました。1年では足りないと思いましたね。私は修士の2年間は文献研究のみに専念して、博士課程で最長2年のフィールドワーク、帰ってきてから3年以内に博士論文を書き上げるというのが理想だと思います。ただ、日本では修士で調査をする人が大半ですし、そのほうが良い修論が書ける確率も高い。研究への動機も強くなるでしょう。学術振興会特別研究員DC1に採択される可能性も高い。博士課程に進学しても、論文を書いたり、学会で発表したりと、いろんなことをしなければなりません。

博論を書くまで、学術雑誌に論文を投稿する必要などなかったロンドン大の院生たちと日本の学生の置かれている状況とはかなり違います。

外国に比べて、日本人の学生は、教員の科研プロジェクトに参加したりして、何度もフィールドに足を運び、フィールドとのつきあひも長いと思います。そんな状況に対し「科研で論文はカケン」と毒づいたこともあります。今はそれもしようがないかな、と思います。

— スリランカを引き上げたのはいつですか？

田中 1983年11月にフィールドから直接ロンドンに向かいました。ロンドン大学から奨学金(A5)がもらえることになったので急遽戻ることになったのです。すでに17カ月もいたわけですから調査期間としては十分です。11月15日までに復学の手続きをしないとこれから2年間の奨学金がもらえないわけですから、期日に遅れるわけにはいかない。妻は少し遅れてそのまま日本に帰国し、年末になってからロンドンで合流することになりました。私がフィールドを離れたのち、過労のためか、彼女はマラリアにかかって大変な目にあいました。

— 突然帰ることになったのですか？

田中 フィールドワークも論文執筆もそうですが、終わりのない作業ですから、どこかで区切りをつけないといけない。

日本からスリランカに向かったのは6月のことだったし、むしろは年中暑だったので冬服は何ももっていなかった。スリランカからロンドンに戻るときも、あわただしく現地を離れたので、移動先の気温のことまで考えが及びませんでした。気楽なものです。日本に比べれば暖かいロンドンとはいえ11月半ばはやはり

寒い。スリランカを出たときの恰好で空港からそのままLSEに着いて、ジョニーやモーリスに挨拶に行きました。

モーリスは私の寒そうな格好を見かねて、彼の娘による手作りのマフラー(虹色のド派手なモノでした)を私に貸してくれた。彼は舌鋒鋭く敵も多いですが、私にはいつも優しくかったです。

フィールドから帰ってしばらく、以前と同じ寮で妻と暮らしていましたが、この寮はパディントン駅には5分もかからず、またハイドパークにも近いという、大変便利なところにありました。パディントンはヒースロー空港に到着してロンドンの中心街に向かうときに到着する玄関口になるところで、大小のホテルがたくさんあります。当時はキングス・クロス周辺が「浄化」されてパディントンあたりに娼婦たちが移ってきていました。この寮ももとはホテルでしたが、スパイ事件の舞台になって売却されることになったのでロンドン大学が購入したそうです。

寮には2年間しか住むことができない決まりでした。このため引越し先を探していたのですが、なかなか見つからない。幸い、モーリスが家族と一緒に日本に行くことになり、その間猫の世話をすることを条件に、自宅を使ってもいいと言ってくれました。そのころ彼は、私の妻から日本語を毎週習っていたのです。そういうわけで1984年の夏は彼の家で優雅に暮らしました。そうそう、キッチンには「あいうえお」の文字が書かれていました。お皿を洗いながらひらがなを覚えていたそうです。彼の家で印象的だったのは、本がほとんどなかったことです。彼の趣味はブック・バインディングなので、その手の(革表紙の本)本はいくつかありましたけど、そもそも本棚らしいものもなかった。目立っていたのは、彼の叔父にあたるモースの著作集3巻くらい。

そうこうしているうちにLSEの夫婦寮が空くことがわかって、引越ししました。今度は住宅街にある寮でしたが、近くにホロウェイ監獄があり、拷問されているのではないかと思うような叫び声がときどき聞こえてきました。寮の管理者はマジョリー・ファーガソンという人でした。ほとんど話しませんでした。ずっとあとに彼女が女性雑誌についての本 *Forever Feminine: Women's Magazines and the Cult of Femininity* を書いていることに気づきました。

3 博士論文執筆、そして審査へ

Friday SeminarとWriting Up Seminar

— 復学してからは博士論文執筆に集中されたのでしょうか？

田中 調査から戻ると、すでに触れたWriting Up Seminarに参加することになります。ここで旧友や新しい仲間と再会する。金曜日の朝はFriday Seminarというのがあり、これは学科の教員全員に開かれている「学科セミナー」で、大学院生から国内外の研究者まで最新の発表が聞けるゼミです。京都人類学研究会を毎週やっているようなものです。学期ごとの担当者が決まっていて、共通テーマが決まっていることもあります。担当の期間は1学期なので10回と短い。参加者が固定されているわけではない。ですから、日本の共同研究とも違う。*Death and Regeneration of Life*とか*Money and the Morality of Exchange*などは、こうしたゼミから生まれています。後者は私がフィールドから戻る直前の1983年10月から始まって、私も参加しました。

Friday Seminarではクリフォード・ギアツやデュモンも発表していましたね。ハックスレー賞の受賞が決まって渡英された伊谷純一郎先生も発表していました。先生は、授賞式での講演と、このFriday Seminarの両方でお話をされました。

Writing Up Seminarは担当の先生がひとり、あとは院生たちです。事前に博論の章を参加者に配布しておき、討議をするというきわめて有用なゼミでした。ロンドン大のほかの人類学科ではこのような形式のゼミはやられていなかったと記憶しています。フィールド調査のあと各自論文執筆に取りかかると、「孤独死」状態になりかねない。そんな院生たちが、こうやって定期的に集まって自分の専門でもない論文を読み、しかも有益なコメントをするようにいろいろ考えなければならない。これはよい刺激になりますし、たいへん鍛えられます。お互いの執筆ペースもわかります。

当時は調査が終わってから3年以内に博論を出すことが期待されていました。それ以上だといつになるかわからなくなる。私は、1986年3月に2年半くらいで提出していますが、当時の学生たちも私とほぼ同じころ(1986年~87年)に博論を出していますから、このセミナーの効果は大きかったと思います。2週間ほど前に1章分のドラフトが配られていて、当日ディスカッションする。事前にテキストが読めるのも助かります。こういう形式はべつに博論でなくてもいいわけですよ。

— 先生もそこで発表されたりしましたか？

田中 私もWriting Up Seminarで3回ほど発表しました。アビシェーカという儀礼に関する最初の発表(12)のとき、ゼミを担当していたモーリスが開口一番Masa's paper struck meと言ってくれました。セミナーが終わったあと、また同じパブでビールを

飲んでるときもみんな喜んでくれていました。心配していたよりはましだったのでこんなに喜んでくれるのかなとも思いましたが、学生たちはそういう心遣いをするタイプではなかったし、こういうゼミで礼を言われることもまれですから、たぶん内容が本当に評価されたのだと思います。モーリスから聞いたのでしょうか。あとでジョニーやクリス・フラーからも「ゼミ発表はうまくいったんだって?」というようなことを言われました。

イギリスのゼミと日本のゼミ

— Writing Up Seminarは、京都大学の博論予備ゼミみたいなものでしょうか?

田中 そうです。ただし、うちは年2回で、しかもひとり1回限りだけど、LSEでは毎週か隔週でやっていた。

— 結構な頻度でやっていたんですね。

田中 LSEの場合は、先生は担当の先生しか出てこない。だから京大の文化人類学でやっている博論予備ゼミとも違う。LSEでは各教員がそれぞれゼミをもっているわけではないから(注1)、M.Phil/Ph.D課程の院生が参加するゼミは、フィールドワーク前の技術指導的なゼミ(カメラの使い方とかインタビューの仕方など、すごく基本的なものです)とフィールドワークのあとに参加するこのWriting Up Seminar、それから学科全体のFriday Seminarの3つしかない。そうそう、M.Sc課程の学生のためのゼミもありましたが、これは課題論文を担当の学生が紹介するものでした。だから院生たちが集まるという意味で、Writing Up Seminarは京大では教員が毎週担当している普通のゼミに近い。ここにフィールドから戻ってきた博士論文を書いている最中の院生が参加することになっている。博論予備ゼミはひとり1回限りですよ。博論予備ゼミに至るまでの章ごとの発表は個人指導とか、教員ごとのゼミでやりましょうということになっている。

— じゃあ、南アジア関係でかつてやっていた博論ゼミ(<https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/thesis.html>)はどこですか?

田中 南アジアの方がもっとLSEのゼミに近かったかもしれない。

— それは、LSEをモデルにしたんですか? 先生が始められた?

田中 はい。南アジアのゼミは、この文化人類学と違って回数も多かったし横断的にやった。ASAFAS(アジア・アフリカ地域研究研究科)の教員と学生も来ていたし、学外だと民博(総合

研究大学院大学)の人も来ていたし、立命館大学の学生もいた。名前は博論ゼミだけど、実際は修論を書いている人も発表していた。あのゼミがあったからなんとか博論が書けましたという人も何人かいて評判はよかった。教員は私と足立明さん、田辺明生さんの3人で、宮本万里さんや石坂晋也くんに事務をしてもらっていた。藤倉達郎さんものちに参加した。

— LSEには自主ゼミとかはありましたか?

田中 僕らは南アジア関連で2つやりました。1つは、博論を書き始めた南アジア専攻の学生たちと、1985年の夏だと思えますが、最近民博が招いたクリス・ピニーの自宅で何度か会合をもちました。スリランカにあるアヌラダプーラという仏教聖地の調査をしたリズ・ニッサン、インド映画を博論で取り上げていたロージー・トーマスも。彼女はすでにどこかのカレッジで教えていました。夏休み中なんか週1回集まって、博論の一部のドラフトをもちよって議論する。昼にはクリスたちが作ったカボチャスープなんかをいただく。もう1つは、スリランカの研究者のセミナー。これはジョック・スティラット先生もいたので、もう少しフォーマルな感じもしました。何度かサセックス大学まで行きました。

マリノフスキー記念講演会

田中 直接大学とは関係ないけれど、講演会が多かったですね。いわゆるMemorial Lectureというもので、たとえばマリノフスキーとかフレーザーの名前がついている講演会がたくさんある。そういうところでリーチとか著名な研究者がしゃべるわけ。それは学生に大きい影響を与えていたと思う。日本ではあまりやらないじゃない。学会で記念講演はやるけれども、誰々先生を記念してやる講演会ってあまりない。先に伊谷先生がハックスレー賞受賞のときに講演会をされた話をしましたが、ほかにもデュモンとかギアツとかがわざわざロンドンに来て話をするわけです。

LSEが主催していたのはマリノフスキー記念講演会です。それは40歳前後の人が対象だったから、私が留学していたころは、ティム・インゴルド、キース・ハート、ダン・スペルベル、ジョニーやジョックがLSEのOld Theatreで話していました。インゴルドのときはジーン・ラ・フォンテーヌ教授が、スペルベルのときはモーリスが司会だった。そのあと5階のシニア・コモンルームでワインとサンドイッチのパーティがある。福井勝義さんと初めてお話したのもインゴルドのマリノフスキー記念講演

会のあとのパーティーの席上でした。

こういう講演会は最先端の研究を披露するわけだから刺激になるよね。リーチも私が滞在中にロンドンで2回くらい講演をしています。マリノフスキー記念講演の中でもっとも論争を引き起こしたのが第1回講演だったリーチのRethinking Anthropologyでした。これは翻訳されて『人類学再考』という同名の書物に収められています。その次は1976年のモーリスの時間についての講演The Past and the Present in the Presentです。マリノフスキー記念講演のベスト10くらいを集めて訳し、それらに関する論争を紹介したらおもしろいと思って少しは考えましたね(2017年に石井美保さんとの合同ゼミで歴代のマリノフスキー記念公演を10本ほど選んで講読しました)。(補5)

〈補足5〉 1980年秋にエドモンド・リーチがLSEで講演をするということで、デンマークの人類学者ラス・ケアホルムに誘われてLSEのOld Theatreに行きました。それがOnce A Knight is Quiet Enoughというタイトルで、のちにEssential Edmund Leachという論文集に収められています。これは、ボルネオでの観察と自身のkighthood爵位授与式での観察を重ね合わせて論じたもので、当事者は供犠の犠牲のように死と再生を体験するという結論を導いています。リーチは、女王が抜身の剣で形を軽く叩くdubbingという行為が一種の供犠であると読み取るのです。その後、博論完成の目処もついて私がロンドンを離れる直前に、再びリーチのThe Big Fish in the Biblical Wildernessという講演会に、同僚の学生たちと一緒に参加しました。これは、Ernest Jones Lectureで、精神分析による聖書や絵図の解釈を行うものでした。私のロンドン留学が、リーチによる講演によって始まり、そして終わっているのは偶然かもしれませんが、どちらの講演にも大きな影響を受けました。供犠や精神分析なども重要ですが、私が学んだのは「中心へ」という視点です。すなわち、最初の講演が扱っているのは、王室儀礼です。また、2つ目の講演ではキリスト教が神話という観点から扱われています。ボルネオ、高地ビルマ、そしてスリランカの農村などでのフィールドワークで知られるリーチですが、その対象は決して周縁にとどまりませんでした。私が学んだのは、この点だったのです。後年実施する在日米軍の研究(A12)や、天皇家と国家元首ら間で交換される贈答品の研究(F67)には、こうした中心への関心が働いていたと思います。

—— 日本では受賞記念講演とか、あまりやらないですね。

田中 日本文化人類学会の学会賞には講演があるけど、ほとんどそういう機会ないよね。人の名前をつけているのだからほとんどない。京大だったら、伊谷純一郎記念講演会みたいなのを毎年やったらいい。伊谷さんの業績に関係するような研究をした人に賞を与えると同時に講演してもらおう。南方熊楠賞というのがそれに近いけど、本当はもっとあっていい。

パソコンルームでの博論執筆

—— 博論を書いていてスランプとかはありましたか？

田中 あんまり、そういうのはなかった。今もないですね。博論執筆に関して印象に残っていることをもう1つ話しておきます。私が書き始めたのはたぶん1984年になってから。スリランカからロンドンに戻ったのは1983年11月で、そのころにはもうパソコンが入っていた。だから、博論執筆は最初からパソコンでやっていた。それまでのレポートはタイプライターでしていたけれどね。最初はBBCとかいうパソコンが3～4台狭い部屋に置いてあっただけだったけど、需要も増えたのか、大きな部屋が用意されてそちらで博論を書くことになった。

LSEのいいところは経済学が中心で、政財界とのコネも強くお金もあったこと。それでコンピュータ関係の施設もしっかりしていた。さらに1部屋増えて各部屋に20～30台IBMのパソコンが置かれ、24時間自由に使えた。書く環境は他のところに比べればずっとよかったです。だから博論を書き始めた人たちはLSEのPC部屋にずっといることになる。これもまたよかったと思います。ゼミだけでなく、パソコンのある部屋でも一日中一緒にいるわけです。京大の院生室のようなものですね。LSEの学生全員に開かれていましたので、ここで仲良くなった他学科の院生もいます。そのうちのひとり、台湾人の留学生は日本にまで遊びにやってきました。

この部屋には共用のプリンターがありましたが、博論の清書用には不十分でした。でも、コンピュータ関係の先生が自分の部屋のレーザープリンターを真夜中に使わせてくれた。ほとんど見ず知らずの先生が部屋を使わせてくれるわけです。パソコンの使い方がわからない人たちのために、技官もいつも引っ張りだこでした。みんな親切な人たちでした。真夜中も使えるというのは、本当によかった。SOASのように人文系しかない部局は閉まっちゃう。

博士論文執筆の最後は籠ってやりたいところですが、自宅に



写真6 SOAS図書館(左手前)、セネート・ハウス(正面)(2012年3月撮影)

PCなんてもてない時代でしたから、自宅で執筆はできない。本や論文は自宅で読めるけど、執筆は基本的に大学のパソコンルームでしなければならない。夜は静かでいいですよ。LSEは街中であって、オペラハウスのあるコベントガーデンがすぐ近くでした。少し歩けばピカデリーサーカス。夜11時ごろ、ロンドンの繁華街を横切ってソーホーの中華街まで歩いて夕食をとって帰宅するわけです。閉店間際だと残り物しかなくて安くなっている。毎日中華でだんだん太ってきた。最後のふた月くらいはずっとゴム紐のはいたジャージ(紺のトレパン)で通していたと思う。実際は部屋着というかパジャマなわけです。当時、屋間からジャージなんかはいている人はほかにロンドンにいなかったと思う(笑)。

ロンドンの中心街から郊外に一晩中走っているナイトバスがあったから、真夜中を過ぎててもいつでも帰れる。そういうバスには、ディスコ(クラブ)で遊んだ酔っぱらいの若い連中がこれから帰宅しようとしていっぱい乗っている。大学に一晩中いて、朝早く帰ることもあったけど、それはそれでおもしろかった。朝早く自宅からバスに乗ってLSEのあるビジネス街にやってくるのはみんな掃除人たち。カリブ系の黒人女性たち。彼女たちは朝一番の6時ごろオフィスが始まる前に来て、ホワイトカラーが出勤する8時までにビルの掃除を終えるわけです。真夜中だと、遊んでいる連中と一緒に帰って、朝までいると、働きに来る女性たちとバス停で会うことになる。LSEにはキャンパスはなかったけど(屋外でゆっくりできるのは屋上のテラスくらい)、ロンドンのいろんな側面が見られたのはよかったです。

E・リーチとM・ブロックによる博論審査

—— 博論を出すタイミングはありましたか？

田中 私の場合は就職の話も出ていたけど、博論執筆と直接関

係はしなかった。当時は公募ではなかったので、ひたすら待っているという感じでした。スリランカでフィールドをやっていたときにも就職の話があってコロomboの病院に健康診断を受けに行ったりしました。これは結局決まりませんでした。博論を書き終えるころには非公式に3つもオファーがあった。今だと信じられない話ですよ。3番目が国立民族学博物館(民博)からでしたが、採用時期が1986年8月1日で一番早かった。南アジア部門をもう少し強力にしたいということでした。それで3月か4月に一度発表を聴いてもらおうということになっていた。

もう一つは、こっちのほうが大事だったのですが、3月10日に最初の子供が生まれる予定で、妻は一足先に帰国していました。私もそれまでには博士論文を書き上げて日本に帰ることにしていたのですが、少しはやく2月27日に生まれた。それで博論提出が間に合わなくて、ずるずると延びて3月終わりくらいに書き終えて一時帰国した。余談ですが、アエロフロートの機内で隣に座っていた方たちと少し言葉を交わしたら、ロンドンでレコーディングをしたばかりというギタリストの松原正樹さんたちで、記念に「da-ba-da」というシングルを1枚くれました。

博論のほうは、印刷や業者への複写依頼までは自分でやりましたが、その回収や製本はエリック・ハーシュに頼んで、代わりに大学に提出してもらった。そしてまた、審査のために6月にロンドンに戻ったわけです。

—— 3月に戻って、生まれたばかりの赤ちゃんの顔を見て、民博で面接をして、そしてロンドンに戻ったのですか。

田中 そうです。イギリスの論文審査はvivaと言って、インフォーマルな感じでした。今の京大みたいにパワーポイントを使う発表もないから、用意することもない(少なくとも私は思いつかなかった)。それで前々日の真夜中にベーカー街の映画館のレイト・ショーでやっていた「マドンナのスーザンを探して」を観に行っただけ。同僚のピーター・ガウが最高の映画だと、ほめていたのでひとりで行った。そんなもんです。緊張感ゼロでした。イギリスは他の大学もそうだと思うけど、ひとは同じロンドン大学から、もうひとは他の大学から。審査員は2人だけ。指導教員は審査に加わらないし、参加もできない。院生は2人の審査員と向き合って質問に答えるわけです。

—— えっ、指導教員は入れないんですか！

田中 入れない。審査員は指導教員が選ぶんだけどね。一番研究内容が近かったということでひとはモーリス・ブロック。もうひとはジョナサン・パリーの先生だったエドモンド・リーチ。

—— ブロックとリーチが博論審査員ですか。どちらも大家のお2人ですね。

田中 そうなんだよ。2人とも論争を引き起こしたマリノフスキー記念講演の大御所です。リーチはナイトの称号をもっていた数少ない人類学者のひとり。サー・エドマンド。審査員が決まって、周囲の人たちに言うと、モーリスはいいとしてリーチについてはみんなが同情するっていう感じだったな。「あの人、大丈夫か!?!」みたいな。

6月23日にモーリスの研究室で審査をやった。リーチもケンブリッジからやってきた。彼は当時すでに皮膚がんを患っていて大きな絆創膏を額に貼っていました。

ここはどうなっているのかとか、初めはふつうに質問するのだけど、リーチはモーリスに何か言いたいんだよね。「この博論に書いてあるヒンドゥー教のことを何か知っているか?」みたいなことを、私ではなくモーリスに聞くわけです。そのうち、リーチとモーリスがお互いやり合い始める。やり合いと言ってもリーチのほうが大先生ですから、モーリスはどちらかというとおとなしく聞いて、「ヒンドゥー教は日本の宗教に似ている」などと、リーチには判断できないような返事をしたりしている。

だから私自身の博論の内容についてはそんな厳しいことを言われなくてよかった。モーリスは言いたいことも言えず欲求不満になったのか、帰り際、「今度は2人だけで会って続けよう」と言っていました。リーチが審査員に決まって、一番嫌だったのはモーリスかもしれません。私自身の博論について、お2人がどんなコメントしたのかはほとんど覚えていません。もったいないと言えばもったいない話です。

民博への就職と博論の出版

田中 誰しもそうですが、博論審査は、大学院生活のクライマックスでもあるわけですね。でもその日はもう1つのクライマックスがありました。それは就職の内定です。審査の当日は民博の内定日だったんですね。時差が8時間くらいあるから、審査が始まる時にはもう内定結果がわかっていた。審査の前にたまたま事務室でモーリスに会ったから、もう採用されたと言えプレッシャーをかけておいた(笑)。

まあそれで、審査が2時間くらいで終わったあと、何人かで大学のパブでビールを飲んだ。クリスティーナ(トーレン)から「なんで審査のことを言ってくれなかったの?言ってくれていたらお祝いしたのに」とあとで言われましたが、あまり大々的に祝った

りする雰囲気ではありませんでした。ジェルの学生だったスザンヌ(キューヒュラー)の審査のときは、モーリスとマリリン・ストラザーンが審査員だった。たまたま、審査の直後に彼の部屋に行ったのでストラザーンに挨拶をしたことがありますが、そのときもとくに何かあったわけではありません。ストラザーンもすぐに帰りました。

帰国直前にたまたまジェルと一緒にあってホルボーンという地下鉄の駅まで一緒だった。そのとき彼が「博論は出版できそうじゃないか」と言ってくれましたから、内容は悪くはなかったと思います。結局この博論(*Sacrifice and Divine Power: Hindu Temple Rituals and Village Festivals in a Fishing Village, Sri Lanka*)は供犠についての議論を外して、まず京大人文研から出版(P1)、そのあとマノーハルというニューデリーの出版社から出版されます(P2、*Patrons, Devotees and Goddesses: Ritual and Power among the Tamil Fishermen of Sri Lanka*)。英語で出したので反応も多く、書評もいくつか出ました。論文も大事ですが、みなさんも早く英語で本を出すことをお勧めします。

授与式には出ませんでした。博論を少し修正し、正式に製本をしたものを7月に提出します。学位授与のあと8月1日から民博。まったくギャップがない。それまでも早い時期から話がありましたので就職のことで悩む必要はなかった。民博の助手に決まったときはまだ31歳だった。就職に関しては本当にラッキーだった。

民博就職にあたってはモーリスに推薦文を書いてもらいました。推薦文で決まったわけではないと思いますから言いますが、モーリスに推薦文を依頼するとき、日本では推薦文は褒め称えることを意味する、客観的な評価referenceではないと説明しておきました。そのせいか、あとで民博の伊藤幹治先生から、「欧米人の書いた推薦状をこれまで何度も見てきたけど、ブロックの書いたあなたへの推薦文ほどすばらしいものはなかった」と何度も言われました。たぶんモーリスはすごく褒めてくれていたのでしょう。

最後にもう1つ付け加えておきます。アメリカの大学だと留学生は本国の調査を勧められると聞いています。まあ実際そうですね。でも私は当時暴動が何度かあったロンドン南部のブリクストンとか中産階級の典型的な町でもあるミルトン・キーンズなどを勧められました。どちらもことわりでしたが、アメリカとの違いとして強調しておきたいと思います。

4 セクシュアリティ研究へ

最初のテーマは女性のオナニー

田中 さて、帰国の準備です。LSEのフラットを出て、最後はスシラ・ザイトリンという同僚の家に住むことになります。彼女自身は北インドのラージャスターン州の巡礼をテーマに博論を書いていた。また彼女の義理の弟デイヴィッドも人類学をやるようしていました。今はオックスフォード大学にいたみたいで、5年ほど前に仕事で連絡をとったことがありましたが、私のことは覚えていませんでした。彼女の家では、まだ有名になる前のダニー・ミラー夫婦、それから外交官の妻について研究をしていたアナベル・ブラックにも会いました。

スシラの家滞在中のときイギリス人のお風呂についておもしろいエピソードを聞きました。大変印象に残っているの、講義でも紹介しています。あるとき彼女にインドでのフィールドワーク中、何が一番欲しかったかと聞いたら、英国風の浴室だということです。インドと同じでイギリス人もシャワーがあれば十分と思っていたのでびっくりしました。彼女はこんな風に説明しました。「イギリス人のお風呂は湯船でゆっくり入って体を洗うのが伝統的で、シャワーなんか使わない。私たちの家にシャワーがついたのはつい最近のことだ。フォークランド戦争のとき友人のアルゼンチン人をかくまっていたことがある。そのとき彼女に言われたからシャワーをつけた」と。つまり、それまではシャワーなしで、湯船で石けんを使って体を洗っていたというわけです。泡だらけの体はどうするのかと聞くと、バスタオルでふき取るのよ、と。イギリス滞在中の最後で、また大きな発見です(笑)。イギリス人は食器を洗剤で洗ったあと、すすがないので有名ですが、それと同じじゃないか!と私は興奮したのを覚えています。

— 日本に帰ってきたら博論のテーマとは別に何かやりたいと思っていたことはあったんですか?

田中 フェミニズムの取り扱っているジェンダーとかセクシュアリティはずっと関心をもっていた。いつからかはちょっとわからないけど、*Feminist Studies*とかはいつも読んでいました。その中でこの3つはやりたいなと思ったテーマがあった。1つ目は女性のオナニー。留学直後に入った大学の寮には*Spare Rib*という名前のフェミニスト関係の催し物やエッセイが載っている雑誌が置いてあった。それをたまたま読んでいたら、女性のオナニーのことが載っていたの。それはパイプの広告で、「パイプ

こそが女性の自立への第一歩だ!」みたいな感じで。でも明らかに女性の自立という名目でパイプを売ろうとしているのがバレバレの広告だった。

— まあ、広告ですからね……。

田中 それがちょっとおもしろいっていいかね。つまりなんかこう、表向きは女性の自立とかなんやかんや言っても、ホントかいな、売れたらいいんじゃないか、っていう商売人の醒めた視点。欲望に(女性の自立のためといった)理屈はいらないよ、とも読めるメッセージ。これが気に入った。それで女性のオナニーについてちゃんと調べてみたいと思った。自立志向をくすぐりながら売ろうとする。あるいは、ホントはフェミニズムなんかどうでもいいんだけど、そういう風潮によって女性の性欲を煽っているというか、正当化しているというか、そういう下心に私はいつも魅かれてしまう(笑)。

レズビアンSMの世界

田中 2つ目は、これは翻訳がでているけど、精神分析家のジェシカ・ベンジャミン *The Bonds of Love: Psychoanalysis, Feminism, and the Problem of Domination* (『愛の拘束』)という本のもとになった同名の論文にレズビアンSMについての論争が出ている。これは *Feminist Studies* に掲載されていた(注2)。レズビアンSMがなんで論争なのかって言うと、フェミニズムの文脈ではジェンダーというか女性と男性という対立が前面に出っていますが、それだけでなく、セクシュアリティの問題、すなわち同性愛者たちがマイノリティとして市民権を要求し始める。ヘテロのフェミニストたちもこうした動きを支持するわけです。

ところが、レズビアンSMは想定外だった。79年から80年ごろに、レズビアンSMをめぐる論争になる。いくつか本が出ます。まずカムアウトするのがレズビアンでSMもやっている人たち。それに対してちょっとSMはおかしいんじゃないかって、同性愛者やフェミニストたちが批判する。「SMなんて男の暴力的な欲望を投影しているだけだ」とか「男の権力を女たちも体現しているだけだ」と言って批判する。女同士でSMをやっていると、暴力的なものが入っていると、反女性的と判断される。女性は暴力的であってはいけないからだ。なんで女性同士でそんなことをやっているのか、という話になる。しかし、誰が、男の真似をしていると判断し、批判できるのか。あまりに単純すぎるのではないか。

オナニーの話もそうで、たとえば男性のために作られたポルノ

映画を観て女性が興奮してオナニーしていると、女性が告白するとします。もっと気持ちよくなるにはバイブが必要ですと言いだす人がいる。すると、それに反対する人がいる。ポルノで興奮するなんて女としておかしいんじゃないか。男の影響を受けすぎている、恥ずかしくはないか、と言って批判する。でもそういう批判は、どこかおかしい。欲望っていうのはいろんな形をとる。そこで男だから、女だからと決めつけるのはおかしいと思うんですね、レズビアンSMという欲望のかたちは、当時のフェミニズムの想像を超えていたわけです。本来フェミニストにとって「あるべき女性のセクシュアリティ」を超えた欲望のあり方が見え隠れしている。そういう意味で、女性のオナニーとレズビアンSMは共通点もあって、きちんとやりたいなと思った。

トランスセクシュアル・ポリティクス

田中 3つ目は、性転換の手術をして男性が女性になるっていう話は今普通にあるけど、実はそれだけでは済まないのではないかという議論があった。私は、今までトランスジェンダーをテーマに研究をしたいという院生を2人受け入れているし、苦悩や戸惑いという問題を無視できないことは理解しているつもりです。その点をことわったうえで、1986年当時私が関心をもっていたのはトランスジェンダーというよりトランスセクシュアルな欲望の政治性だったことを強調しておきたいと思います。男性が性転換手術をした女性をMale to Female (MtF)と言いますが、彼女たちが女性に欲望する状況の政治性について関心がありました。(後述するように)女装する男性が女性に欲望するという動きも気になっていました。(補6)

〈補足6〉 トランスセクシュアルな政治学については、最近日本でもトランス女性を排除するフェミニスト、TERF (trans exclusionary radical feminism) をめぐる論争が激化している。ただし、ここで私が関心を抱いていたのは差別問題というより、異性愛と同性愛が曖昧になるような欲望のあり方についてでした。

— すごい構図ですね。

田中 そういう beyond imagination なところが魅かれる。男女同権とかヘテロでない欲望の肯定とかを求めていた主流派フェミニストたちの議論を超えているわけです。多型倒錯という言葉があるけど、そこに政治は想定されていない。これら3つのテーマについては、帰国後やろうと決めていたわけです。

代々木忠作品との出会い

田中 博論審査の後で初めて観たのは『愛の終焉／Café Flesh』という、エイズ時代の世界を先取りしていたと言われるハードコアのカルト映画でしたが、ここでも女性のオナニーが重要な意味をなしていた。帰国後オナニーについてはすぐに資料を集め研究を始めます。昼休みに『ぴあ』で映画欄をチェックする。自宅にはビデオもテレビもなかったので、仕事が終わったらバイクで京橋とかに行って3本立ての成人映画を観る。オナニーという言葉を含むタイトルの映画は片っ端から観るのです。半年間ひたすら観続けましたね。

— 最初、時間的余裕があったのがよかったんですね。

田中 かもしれないな。ほとんど残業なしでしたしね。それで代々木忠のオナニー作品を映画館で初めて観たわけ。昔はビデオで制作・販売していても、ビデオデッキがそんなに普及していたわけではないですから、同時にピンク映画館で上映できるように作りなおしていたんです。キネコ版『ドキュメントオナニーシリーズ』を映画館で観ました。女性のオナニーは、研究の甲斐あって岩波の現代人類学講座に論文(K19)を書きます。1997年の夏、ロンドンに短期で滞在していたころです。ロンドンにいたおかげでたくさん関連文献も読むことができました。最終的には『癒しとイヤラシ——エロスの文化人類学』(P4)にまとまります。

代々木監督作品は、オナニー作品から入り、1990年代初頭までほぼ同時代的に観ています。代々木作品の発表(F19)を終了間際の近衛ロンドでしました。いつもの狭い部屋が満員で、数本のビデオを紹介しました。

当時ウィーン大学の学生で日本の性科学の歴史について研究に来ていたサビーネ・フリーシュトゥックさんも来ていましたが、ビデオが悪かったのか、私の発表に腹を立てたのか、途中で席を立てて帰っちゃいました。あとで聞くと、日本のAVの女性は媚びている感じでいやだったとか。彼女についてはその後自衛隊の研究を始めたこともあり、のちに人文研に招聘することになります。菅原和孝さん、大越愛子さん、大浦康介さんらも来てくれていました。ある人からは「フロイトも最初はたいへんだった、君も頑張れ！」みたいな励ましのお言葉をいただきました(笑)。

1993年4月からは京都に移った松田素二君に請われて、彼の元の職場だった大阪市立大学で非常勤をしますが、そのとき初めて性をテーマに講義をします。代々木監督のビデオ作品なん

かも見せましたね。画面は見せずに声だけとかね。大阪市大は大阪の南にありますが、毎週帰りは梅田の阪急東通り(注3)に寄って、中古ビデオを漁り、それをもとに講義をする……。そんなときもありました。

代々木作品については1993年から96年ごろまで大学院生や研究者相手にいろんなところで発表し、いろんな出会いがありました。集中講義でよその大学に行ったら、「夜の特別講義」という感じで代々木について話をしました。少し期間があきましたが、2000年4月に民博のゲストトーク『『20世紀のエロス』オーガズム』という企画(H15)があって、野村雅一さんから代々木作品で何かやってほしいというお誘いがありました。当時、筑摩書房の編集部には藤本由香里さんも参加されていて、彼女を通じてのちに代々木監督に2回会うこととなります。ちなみにこのときのトーク+ビデオ上映は民博始まって以来の18歳未満禁止という記念すべきアダルト企画になりました。代々木作品の考察は2007年に論文にします(I25)が、短くしたものが先の『癒しとイヤラン』にも取められています。代々木監督のビデオや著作は、私に大きな影響を与えました。

エロ(欲望)を通じて考える

田中 レズビアンSMもまだ考えていますが、こちらは複雑な展開をしていきます。江原等子さん(院生)がゼミで発表していたゲイル・ルービンはレズビアンSMの理論的な実践者ですが、それに反対するのがジュディス・バトラーという図式がある。ルービンの方がずっと先輩なのかな。パット・カリフィアもレズビアンSMの実践者として知られていて、日本語でもいくつか読めますよね。ルービン、バトラー、カリフィア。オナニーと違って思想が入って来るし、ひとは人類学者でもあるし、まだまだ整理がついていない。レズビアンSMが議論のコアになるのか、クィア人類学へと展開するのか、まだはっきりしていない。

ジュディス・バトラーは、当時のSM論争には触れずルービン自身との出会いについてつぎのように述べています。1979年当時、ルービンは「セックスを考える」の草稿にもとづいて講演を行っていた。あるときルービンは、フーコーの『性の歴史』を片手にもって、ふりまわしながら参加者たちに紹介します(注4)。その講演会にはバトラーも参加していて、そのとき初めて『性の歴史』を知ったと述べている(レズビアンSMをめぐる論争については、拙論「BDSMと性暴力」(K82, P5)にまとめています)。

—— 動向は追っているんですね。

田中 ちょっとはね。日本にくると(欧米でも同じかもしれませんが)女性のオナニーもレズビアンSMもポルノ化しちゃう。女性同士のシリアスな実践として捉えらなくなる。それ自体が男性の欲望を満たす商品となる。その手の商品はいっぱいありますよね。オナニーやレズビアンSM、女性を愛するトランスセクシュアルな男性、シーメールもポルノの定番です。ただし、完全に女性の体になっているのではない。豊胸しているけどペニスがあって、女性と絡む。MtFが女性に欲望するというのは何を意味するのか? これから問題になってくる可能性はあるかもしれない。

—— 先生はそれを研究したいと思っていらっしゃるんですか? 気になる?

田中 実は10年ほど前からそういう風俗があるんだよ。お客さんが女装して相手の女性と関係をもつっていう。

—— 男性のお客さんが女装して、風俗の女性と関係をもつということですか?

田中 そうそう。要は、男性は女装するんだけど、欲望の対象は女。むかし、そういう男性を相手にしていた風俗嬢にたまたま会って話を聞いたことがある。そういう風俗がいくつかある。でもこの場合、女装=弱い男性という図式を前提にしている。こんなふうにエロあるいは欲望を通じてものごとを見るというのは、こういう言い方をすると真正のフェミニストたちに怒られるかもしれませんが、攪乱的subversiveな見方(注5)でもあります。オナニーやレズビアンだけではない。博物館だって、私は最初から秘宝館という視点から見ようとしていた。今やっているセックスワーカーも同じです。できあいの図式を当てはめては、対象も見えないし、あたらしい対象も見つけることはできない。

ほかにもsubversiveな視点はあると思いますが、私の視点は



写真7 韓国済州島の健康と性のミュージアム。屋外には裸体の女性をモチーフにした彫像が多数展示されている(2013年9月撮影)

ほぼエロにつきますね。これに反発する人もいれば、共感をもつ人もいます。とはいえ、エロはエロで通俗的で、個人的にあわないところも多いです。ホモソーシャルな世界のエロは、私にとってsubversiveなエロではまったくくないということを強調しておきたいと思います。(補7)

〈補足7〉 セックスワークについては、世界的なセックスワーク運動と日本での実態についての調査を行い、一部を論文(I36)にまとめています。さらに、女性への暴力(ジェンダー暴力)についてもいくつか論文(I34、K78、K80)を書いている。セクシュアリティについては、『フェティシズム研究』2と3で秘宝館(K56)や女性の下着(K64)についてもそれぞれ論じました。最近では緊縛のグローバル化についても書いています(T21)。

5 ミクロ人類学とその周辺

民博から京大人文研へ

— 民博では助手としてどんな仕事をしていたのですか？

田中 これまで民博に就職して出て行った人たちの中では2番目に短い在職期間でした。就職は南アジアのポストだから、私の直接の上司は印度古典文献学の永ノ尾信悟先生とチベット言語学の長野泰彦先生でした。

— 民博にいた期間はものすごく短かったんですね。

田中 就任した8月は実質夏休みだから仕事はないわけ。委員会の委員になって仕事をするというのが基本ですが、委員になれという話もないわけです。8、9月は誰もいないし、仕事もない。86年の10月とか87年の4月からは、委員になって仕事を少ししました。『月刊みんぱく』の仕事とか、『研究報告』の編集委員などをしていました。就任直後の8月は暑いし、ロンドンから帰って来たばかりで、今だったら全然変じゃないけどシャツとかもズボンの外に出していた。廊下もよく裸足で歩いていた。白衣は禁じられていたみたいだけど、裸足は禁じられていなかった。当時民博は工事中で、私は助手とは思われないで、現場で働いている人が廊下をウロウロしていると思われていたようです。

当時、民博には学生がいなかった。だから給料はもらっていたけど、気分的にはまだ学生生活を続けていたような環境だった。助手なんて仕事がたくさんあったわけじゃないしね。民博では田辺繁治さんの「文化的プラクティスとイデオロギー」(D1)と長野泰彦さんの南アジア関係の研究会(D3)に参加していた。

田辺さんの研究会には著名な人類学者がいっぱい集まっていた。内堀基光さんもそうだし、船曳建夫さんとか、関本照夫さん、若い人だと松田素二さんもいたし、あれは凄く刺激になった。

— 京大に移るのはいつでしたか？

田中 1988年の6月。だから民博にいたのは1年10カ月。そのうち4カ月はインドに行っていたから、実質1年半くらい。8月に就職して2カ月程は何もしてない。だから本来民博でやらなくてはいけないことをやってない。たとえば、研究所のゼミで発表するとか、蒐集のための買い出しとかね。

— そういうこともみんな民博の先生の仕事だったんですか？

田中 はい。民博でよかったのは、いろんな人と出会えたことです。京大で最初に始めた暴力の研究会(C1)では、田辺繁治さんや大塚和夫さんに来ていただいた。

— 8年に京大の人文研に移るわけですが、文化人類学の大学院教育とかはまだ先ですよ。それまで人文研では共同研究が中心だったのでしょうか？

田中 民博も共同研究会が中心だった。人文研には谷泰さんと、もうひとり助手で音楽をやっている藤田隆則さんがいた。谷さんはそのころ「民族誌記述」の研究会をしていた。のちに出た論文集『文化を読む』(K3)が最初に参加した人文研の共同研究でした。(補8)

〈補足8〉 人文研への異動前夜についての話をします。5月31日に梅田の「国境の南」というラテン系のレストランで送別会がありました。阪急電車の終電には間に合ったのですが、寝過ぎて気づいたら終点の四条河原町でした。地上に出るとホテルのネオンが目に入ったので、これ幸いと投宿しました。明日から助教授に昇進するので楽観的でした。ところが、辞令を受けたあとに事務方から「助手の期間が短かったので200円しか昇給しません」と告げられました。

— 暴力の研究会は転任してすぐに立ち上げたんですか？

田中 少ししてからだと思います。当時、助教授(今の准教授)は別に研究会を組織する必要はないんだけど、谷さんが1年休みたいという希望を出してきたので、じゃあ何かやりましょうかということで「儀礼的暴力の研究」(C1)を始めた。それが、あとに『暴力の文化人類学』(N1)という論文集にまとまる研究会です。

全体化の欲望に抵抗すべし

— つぎに先生が編集された本の中でも、よく引用されているという「ミクロ人類学」(A13、C3、C5、O5)とエイジェント論

についてお聞きしたいと思います。

田中 ミクロ人類学で注目されたのは2点あります。1つはおっしゃる通りエイジェントあるいはエイジェンシー論、もう1つは基本テーゼである「全体化の欲望に抵抗すべし」についてです。まず後者について話したいと思います。私の留学時代の経験と密接に関係していますので、話を留学時代に戻して説明します。

いつもは人類学や南アジア関係の本がたくさんそろっているSOASの図書館を使っていましたが、ここは午後8時に閉まるので、たまに、大学本部のあるセネート・ハウスの図書館にも行きました。セネート・ハウスのいいところは机にふるめかしいライトがついていて手元が明るいです。そこで*History of Religions*を読んでいたときの事です。ハット村でおきていたことがわかった。天啓ですね。現地でのデータと文献で書かれていたことがら結びついた。ヒンドゥー社会が一瞬にしてまるごと変わった気がした。フィールドで現地の雰囲気などを肌で感じているから、書かれている儀礼や習慣がどのようなものかがわかるようになった。それは、フィールドに行ったからこそ経験できたことだと思う。しかし、体験しさえすればわかる、見えてくるというものではない。同時に本に書かれていたことが引き金にもなっている。

—— 当時はどんなことを考えていたのですか？

田中 スリランカに行く前から、文献研究を通じてヒンドゥー社会を総合的に理解するキーワードが浄不浄ではなく力(シャクティ)だということは明らかでした。しかし、他方でその力が万物に遍在するとみなすだけでは静態的な見方になってしまう。その力はどうやって生産され流通し、消費されるのか。そのメカニズムは何かということが問われなければならない。こんなことを調査に行く前は考えていたわけです。



写真8 セネート・ハウス図書館(内部)(2012年3月撮影)

もう1つは大伝統と小伝統、エリートのバラモン宗教と低カーストの民衆宗教といった対立をどのように止揚できるのか、といったことが解決すべき問題として残されていた(少なくともそのような問いかけが当時は有効でした)。

フィールドではまず力に注目したわけですが、そこでアビシェーカ(灌頂)儀礼に出会うことになります。これはホーマ(護摩)を通じて力を生みだし、あたらしい神像(まだ石ころなわけです)に力を吹き込むという儀礼でした。アビシェーカは、複雑な儀礼でバラモンでないといけません。バラモンによる呪文が必須です。これはバラモンによる宗教儀礼の典型と言えます。またホーマというのは英語でfire sacrificeと訳されるように、炎に供物をくべて破壊する供儀です。アビシェーカについては、すでに述べたように、Writing Up Seminarで発表して、好評でした。また『民族学研究』(現『文化人類学』)のデビュー論文(12)もこの儀礼についてでした。

さて、他方で民衆宗教には動物を屠る供儀がありました。菜食のバラモンは近づけない供儀です。これだけなら供儀がバラモンと民衆の宗教実践を結びつける儀礼です、ということになるわけですが、もう1つ大事な民衆的な宗教実践がある。それが憑依です。憑依を無視して民衆宗教を論じることはできません。供儀と憑依はどう関係しているのか。当時はここまで詰めていなかったと思いますが、何かが抜けていたのです。

その空白を、*History of Religions*に収められていたA World of Sacrificeという論文が埋めてくれた。埋めただけでなく、オセロゲームのように一挙に白地を黒地に反転させるような強烈なインスピレーションを与えてくれたのです。憑依自体が供儀の体験なのだということがわかったのです。力も浄不浄も大事だが、力を生産・流通・統御するのは供儀(動物供儀、ホーマ、憑依など)という実践だったのです。ヒンドゥー教の本質は供儀であり、社会は供儀組織なのだということが実感として理解できました。すると、いくつか関係する事例を思い出した。たとえば、動物を供儀するときに水をかけるのですが、そのとき体をブルブルッと震わせる。犬なんかがよくやっていますよね。それを表すタミル語が憑依を表す言葉と同じだった。これが決定的でした。

このあとは今まで読んできた本を読み返したりして、この実感を自身のデータや既刊の民族誌で確認していく。今までとまた違う視点から読み始めるわけです。フィールドノートを読みながら、民族誌を読む、そこからまたフィールドノートを読む……という往復作業に専念することになります。

全体化を否定せよ

— そういう体験が、いわゆるブレイクスルーというものでしょうか？ 人類学者の方はよく使われる言葉という印象がありますが、いまいちブレイクスルーが何を意味するのかきちんと理解していないのですが。

田中 たぶん各々異なる意味でブレイクスルーという言葉を使っている可能性はありますね。今までうまくいかなかった調査がある経験や言葉のやり取りを通じてうまく事が運ぶようになるとか、何らかの偶然で今までわからなかったことがわかるとか、いろいろあると思います。私の場合は、フィールドではなく図書館でしたから、あくまでも知的理解の上でのブレイクスルーということになるかな。誰にでも起こることではないと思います。だけど、人類学を志すなら知的に理解する喜びやその感覚を一度は経験できたらいいですね。その意味で28歳のときに、こういう経験ができて幸せだったと思います。

私の場合は、たんにわかった！ というだけでなく、それがヒンドゥー社会をまるごと理解＝所有した、という感情に襲われた。当時5億人以上いたヒンドゥー教徒たちの世界が一挙に手中にできたわけです。しかし、同時にそれを崩さなくてはいけない、それがもっと大事なことなのだ、という高揚感も味わいました。

— どうしてそのように思われたのですか。何かきっかけなどがあったのでしょうか？

田中 1980年にLSEに留学して、理論(学説史)の講義を受けました。1学期はモーリス・ブロック、2学期はアルフレッド・ジェルでしたが、一番印象に残っていたのはブロックのロドニー・ニーダム批判です。エヴァンズ＝プリチャードらオックスフォードを拠点とする人類学者は、象徴(あるいは象徴二元論)を人々の思考や行動を左右するきわめて強固なもののみならずという大きな過ちを犯した、という議論です。私が留学するころの日本の人類学会の主流は、まだまだ象徴分析が中心だった。人類学者は老いも若きも象徴分析や語彙分析を通じて異文化の二元論的世界を明らかにするのが使命だと思っていた。それが異文化理解だったわけです。

ところが80年代、私の学生時代に学説史を担当していたモーリスは、シンボルやコスモロジーとして儀礼を読み解くニーダムの象徴人類学を批判したわけです。彼は、そこに作用するのはイデオロギーであると主張していた。

まあ、今思うとモーリスも、男／女、浄／不浄といった二元論的な世界観から逃れていたわけではないのですが、それを等置せず

に権力関係とみなし、どう社会関係の正当化に結びついているかを、主として儀礼分析から明らかにしようとしていました。

— つまり、ブロックのニーダム批判が頭に残っていたから、ブレイクスルーの経験をすぐに批判しようとした、というわけですか？

田中 はい、ミクロ人類学の言葉を使えば、「社会全体がわかる」という全体化totalizationは他人の世界を超越的な視点からすべてわかってしまうという快楽に等しい。つまり「全体化の欲望に抵抗すべし」とミクロ人類学で述べているのは、この超越的な自己満足を否定しろ、ということです。超越性は、他者との関わりを切断することで成立する。これではやはり本当のところ人びとの生の世界をとらえそこなうことになる。

エイジェント論をめぐって

— つぎにエイジェンシーについてお尋ねしたいのですが。

田中 そこに行きつくためにはもう少し時間がかかりました。1980年に留学して最初にお世話になったのが当時SOASに留学して博論執筆の仕上げにかかっていた田辺繁治さんでした。1986年に私が民博に就職したときには、田辺さんがすでに始めていた研究会に参加します。その成果は『人類学的認識の冒険』(K1)に結実します。

この研究会のキーワードは2つ。1つはアルチュセールによるイデオロギー、もう1つはブルデュの実践でした。この本の中で今村仁司さんはアルチュセールを讃え、ブルデュを批判しているのですが、どういうわけか、田辺さんを始め、当時若手の研究者はブルデュのハビトウスや実践論へと向かっていきました。でも、私は今村さんによる批判もさることながら、実践をする人に目を向ける必要があると考えていた。実践をする人はいったいどんな人間なんでしょうか。『ミクロ人類学の実践』の序章(K39)で展開しているエイジェント論はそのあたりから出発しています。それに加えて、トロント大学の本屋でバトラーの『権力の心的な生』を手にしたのも大きかった。『ジェンダー・トラブル』しか知らなかった私には大変うれしい偶然でした。このあたりのことは「伝統のリズムにのって」(J8)に詳しく書いています。

エイジェントとは、「行為者」とか「行為体」と訳されるけど、「代理する個人」という意味にとることもできる。英語ではdeputyです。英英辞典を読めば行為者だけでなく、こういう意味も出てくる。私はむしろ、こちらの方に注目した。エイジェントの訳として「代理主体」を提案していますが、反応はないですね。結

局、実践という概念だと匿名性が強くて、実践者の顔が見えてこない。私は、ブルデュが考える「匿名的な実践者」ではなく、アルチュセールのような「呼びかけによって振り向く存在」をまず考えたかった。

アルチュセールやフーコーのいう「従属する主体」のアポーリア、つまり拒否・対抗する主体を想定できないというアポーリアを克服するのは、別のところから提唱される実践などからではなく、同じ土俵から批判すべきであると思っていたわけです。呼びかけそのものに何か問題はないか、そこを批判することでしか真のアルチュセール批判にはならないと思っていました。

私の読書歴は、1980年代からアルチュセール、フーコー、バトラーと続いていく。バトラー以後、つまり世紀が変わって『ミクロ人類学の実践』公刊後、「誘惑」という概念に出会ってからは、例外もありますが、ほぼ我が道をいく、ですね。あえて言えば、代理や供犠、犠牲などの理論化を目指すうえでレヴィナスを無視できないと思っています。(補9)

〈補足9〉 私のアルチュセールとの出会いは、Writing Up Seminarで私の原稿を読んだスザナ・キューヒュラーから、モーリス・ブロックの書物の草稿(のちの『祝福から暴力へ』)を読むことを勧められたのがきっかけです。そこにはアルチュセールのイデオロギー論が引用されていました。アルチュセールが与えた影響は大変大きかったはずですが、すぐに博士論文に生かしたわけではありません。『誘惑する文化人類学』(P5)では、対象を能動化させる動詞として誘惑をとらえることで、エイジェントに想定されがちな個人主義を批判しています。そこでは身体や偶発性が重要だと指摘しました。それは中動態とも異なり、能動的な受動性や受動的な能動性が認められる稀有な活動領域なのです。ちなみにブロックの草稿はセリグマン・ライブラリーの角にあったキャビネットの中に収められていて、誰でも借りて読むことができました。こういうシステムは日本の人文学では想定しにくいものです。

6 共同研究を組織する

女神研究と遊郭

—— 民博から京大に移られ、「儀礼的暴力の研究」(C1)、や「ミクロ人類学」(C3、C5)以外にもたくさんの共同研究を組織されていますよね。「フェティシズム研究」(C7)、「複数文化接触領

域(コンタクト・ゾーン)の人文学」(C11)、そして現在進行形の研究会としては「トラウマ研究」(C15)など。代表者ではないですが、「植民地主義と人類学」(C27)や「ポルノグラフィ研究」(D29)というのもありました。民博では「女神研究」(C2)もされています。その経緯について教えていただけますか？

田中 女神の研究会は、民博の客員助教授になったのを受けて始めた研究会で、宗教学にシフトして、宗教学関係の女性研究者に何人か入ってもらいました。時期的に、すでに京都で始めていた「儀礼的暴力の研究」のメンバーだった大越愛子、松村和男、川村邦光さんらにも参加していただきました。女神については、個人研究を始めていて、科研(A7)もとっていましたが、それを共同研究という形でやろうというわけです。ゲストスピーカーも何人か来てもらいました。

研究会が終了してからも女神クラブという名称で何度か会いました。最初の集まりは宇和島でした(F26)。理由は、そこにすばらしい秘宝館があったからです。私は、結局3回この秘宝館に通います。1回は民博のプロジェクトで、もう1回はキンゼイ研究所の学芸員の方を招聘し、連れて行きました。

女神の研究会のテーマはフェミニズムと宗教です。かなり早い時期に問題提起ができたと思います。文化人類学分野では、河西瑛里子さんが現代ヨーロッパの女神崇拜や日本の魔女の活動に取り組んでいます。研究会は年に5回くらいでしたが、出席率はたいへん高かったです。成果は、平凡社から1998年に『女神——聖と性の人文学』(N2)として出版されます。

この研究会の懇親会で初めて私は飛田新地に行きました。それ以来、毎年通っています。もと遊郭の鯛よし百番という料亭では、昼間にゼミをして夜打ち上げ、というようなことも何度かしています。マイケル・オハンロン(注6)やジョナサン・スペンサー(本書74-75ページ)ら、外国からの著名な研究者も連れて行きました。

最近『さいごの色街 飛田』(井上理津子著、筑摩書房、2011年)という本が出ました。著者は10年以上通って調査をしたということですが、私の場合20年くらい通っているわけです。ただ、調査をするというところまではいかなかった。一度だけ、若くして急逝された吉野耕作さんと、店から出てきた若いお客さんに突撃インタビューをしました。なぜソープに行かないのか？(ソープと違ってこちらの女性は肌が荒れていない)、すごく時間が短いけど？(20分、16000円)、服はおたがい全部脱ぐのか？(はい、脱ぎます)などといった基本的な質問をしながら、帰りを急ぐお客さんにつきまとして聞いていくわけです。向こうは向

こうで、私たちを危ない人だと思っていたそうで(笑)、すなおに答えてくれました(飛田については杉坂圭介の『飛田で生きる』2012年や『飛田の子』2013年、『飛田をめざす者』2016年、いずれも徳間書房、がお勧めです)。

フェティシズム研究と秘宝館

田中 ミクロ人類学のあとはフェティシズムを取り上げました。フェティシズムの研究会はモノについて何か貢献できないかという意図があった。

—— 「伝統のリズムにのって」(J8)には、ずっと主体とか情動とかをやっていたので、その反動でモノをやりたくなると書かれていましたが……。

田中 フェティシズムは、狭い意味での心理的なものや性的なものではなくて、できれば博物館とか、今のマテリアル・カルチャーのところまで見極めながらまとめたいと思っていた。第2、第3巻と続けることで、今の物質文化研究にまで拡大している。第2巻は宗教的な呪物から、博物館とかコレクションの話。第3巻は身体で、ファッションとか衣服、アニメとかもっとヴァーチャルな世界を取り扱っています。

フェティシズムは勉強になったというか、鍛えられた。理論的なところでね、どう議論すれば新しいことを言えるのか考えました。久しぶりにフロイトも読み直して、かなり大胆なことが言えたのではないかと思います(K43)。

一方で、人類学的なモノ研究をフェティシズムの視点から捉えなおしてみたかった。直球勝負でモノ研究をやりたいという人はたくさんいます。しかし、私はモノを少しエロから考えてみたらどうだろうかと考えました。エロというよりは欲望と言い直したほうがよいかもかもしれません。それがフェティシズム研究につながるわけです。博物館にしても、先に述べましたが、私の場合は博物館論を横目で見ながら秘宝館に魅かれていく。(補10)

〈補足10〉 民博では伝統と変容についての「特別研究」に関する研究助成の制度があって、助手時代に和歌山県南部の過疎地帯を調査、客員助教授時代は3年続けて秘宝館や性信仰の調査を行いました。前者の経験が民博が受け入れていたジョン・ナイト氏(当時LSEの博士課程)を南紀へと導くこととなります(『民博通信』43(1989):50-51、70(1995):71-75、74(1996):67-69、78(1997):114-117)。

新しいことをすると同時に、少しずつしてアプローチする、というのが私のスタイルかもしれません。ただ、直球勝負もたくさん



写真9 かつて定山溪温泉にあった北海道秘宝館(1998年9月撮影)

していますけどね。

『フェティシズム』の第1巻では苦勞して序論を書きました。第2巻では秘宝館、第3巻では下着について書きます。秘宝館については、可能な限り北海道から別府や佐賀あたりまでいろいろと見えています。簡単にまとめることができないのがつらいところですが、モノの展示、セックスとレジャーとの関係、衰退から見えてくる男性中心的な観光の変化など1970年代からの日本を考えるうえで大変参考になりました。秘宝館については、人・環出身で東大の大学院に移られた妙木忍さんが精力的に研究をされています(『秘宝館という文化装置』青弓社、2014年)。

下着については試行錯誤してきましたが、そろそろまとまりつつあります。エロ小説の下着についての描写をデータベース化しようと思い、大量のエロ小説文庫を買いました。やすい値段で売っている古本屋では、いつも棚2段くらい大人買いしていました。200冊くらい購入しました。似たようなタイトルが多いので重複チェックもめんどろですが、思ったより重複はなかったです。(補11)

〈補足11〉 『フェティシズム研究』全3巻(N4、N5、N8)は時間がかかったが、なんとかすべて公刊することができました。最近では松岡正剛の千夜千冊(<https://1000ya.isis.ne.jp/1767.html> 2021年3月16日)や作家の朝井リョウ氏との対談(M42)で取り上げられています。

フィールドなきフィールドワークの時代

—— 田中先生のHPの研究成果をみると、90年代になると具体的な資料分析というより性やジェンダーや人類学一般の論文が増えてきますね。

田中 データから理論へ、ってこと? 最近でも交叉イトコ婚の

論文とか書いているけど……。

— その交叉イトコ婚の論文も昔の長期調査のデータをもとにしていますよね。

田中 そうですね。いくつか理由が考えられます。1つはレビュー的な論文、もう1つは、観察に基づくデータというより、インタビューのデータが中心になっている論文が多くなった。スリランカだったら、同じ場所において何でも見て調査していた。インドにしても、制限はあったけど同じだよ。毎年同じところに行って調べてきた。でも、そのあとの米軍基地の調査あたりからインタビュー中心に変わってきた。

どうしてインタビュー中心になるのかというと、3つ理由がある。1つは、フィールドワークの対象が場所に関係なくなっているということが指摘できる。「フィールドなき時代のフィールドワーク」という視点が今必要です。もう1つは、これは研究者側の問題ですが、長期での住み込みができなくなっているから、どうしても聞き取りが中心になってしまう。これは反省すべき点です。さらに言えば、人生とかライフストーリーのようなものに関心が移ってきている。

— 「フィールドなきフィールドワーク」という言葉はコンタクト・ゾーンあたりから全面に出てくるキーワードですか？

田中 現代は特定の場所に結びつく人や集団あるいは文化が非常に流動的になってきていますよね。国際結婚や痛みの研究とかやっているような人は、もともと文化人類学のテーマとしてはうまくいかなかった。そもそも場所を想定しにくいよね。でも無視できない。むしろ人類学が変わる必要があります。時代の変化や文化人類学自体の理論的関心の変化にどう対処していくのかというのは私たちが直面している大きな課題です。そのためにコンタクト・ゾーンみたいなキーワードで議論できればいいなと思いました。それで2006年から4年間コンタクト・ゾーンに関する研究会(C11)を行ったわけです。

コンタクト・ゾーンの研究会では、メアリ・ルイズ・プラットが提唱していたコンタクト・ゾーンという概念を拡大解釈して、人類学者と現地の人びとが出会う場であるフィールドをもコンタクト・ゾーンととらえました。こうすることでポストコロニアルな研究から生まれた概念を、より人類学に近いものへと修正したのです。コンタクト・ゾーンという概念に、よりアクチュアルな意味が付与されることになったと思います。これに連動する形で『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』(N9)全11号を公開しました。この編集を通じていろんな研究に出会うことができました。



写真10、11 『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』誌表紙(デザイン・伊藤恵)

軍隊研究からトラウマ研究へ

— そのあとがトラウマ研ですか？

田中 在日米軍の問題や戦争の問題をもう少し深く考えたかったのです。私たちには見えにくいけど、イラクに派遣される米兵たちが三沢とかにたくさんいるわけです。私が会った人の中に米兵と結婚している女性がいたんだけど、旦那さんがイラク派遣から帰って来たのはいいけど、夜中に叫んだりして大変だったという話を伺いました。それでもう故国に帰って言って帰ってしまった。でも彼女はついていかなかったわけです。こういう話を聞くと、ニュース番組や新聞記事からは見えてこないことがたくさんあることがわかります。イラクの話は日本と関係ないと思っても、そうではない。戦争や軍隊のネガティブな側面を考える場合、トラウマは無視できないと思いました。

— トラウマ研は米軍への関心からきているんですね。てっきり高校時代に関心のあった精神分析の話からきているのかと思っていました。

田中 それもあったけど、直接的には軍隊とか戦争かな。もう1つ関係があるとしたら痛みへの関心ですか。1991年くらいに大阪府の事業で外国の研究者を呼んでシンポジウムをやるという企画があった(H4)。そのときに私と井狩彌介さんとヴィーナ・ダスを日本に招聘した。パリーと親しかったということもあって彼に紹介してもらいましたが、すごく感じのいいインド人研究者でした。ずっとインドにいるのかと思っていましたが、今はジョンズ・ホプキンス大学に移ってしまい、少し残念です。彼女には、国連大学のプロジェクト(D19)にも参加してもらい、日本には3回ほど来てもらっています(2016年1月には京都大学にも招聘した(E26))。それが縁で、彼女の学生の博士論文の審査をしたり、彼女の編集する *The Oxford India Companion to*

Sociology and Social Anthropology (U9)に書かせてもらったりしました。彼女のテーマがまた苦しみとか痛みとかでしたね。最近、翻訳(『他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る』みすず書房、2011年)も出ています。

それから、読んだきっかけは忘れましたがスカリーの *The Body in Pain: Making and Unmaking of the World* の議論がずっと頭の隅にありました。この本の英語は超難解で、人文研の助手採用の試験にも出したお気に入りの本の1つです。この本の議論を念頭に置きながら、先に話が出てきた岩波の現代文化人類学講座の論文「世界を構築するエロス」(K19)を書きました。この論文のタイトルはスカリーの本のサブタイトルに由来しています。エロの視点からスカリーを読み直したのです(スカリーを用いた最新の成果がすでに言及した「BDSMと性暴力」(K82)です)。

こういった関心からキーワードとしてはトラウマがいいかなと考えたわけです。苦しみや痛みでもいいけど、トラウマはある意味で一般に定着しつつあった言葉ですし、それでやってみようかと思った。でも本当に思いつきですね。ずっと考えていたってわけじゃないのです。トラウマについても、よく調べてみると神戸の震災なんかのあとに人文学関係の本がいくつか出ています。でも精神分析にはもともと関心があったから、これを機会に精神分析や精神医学を専門にしている人たちに積極的に共同研究に関わってもらおうと思った。

人類学の雑食性と問題意識

—— そう言えば、今までの共同研究ではあまり精神分析の人は入っていませんよね。

田中 そうですね。

—— 逆にこれまでの共同研究で文化人類学にしぼったものはないのではないですか？

田中 『ミクロ人類学の実践』(O5)の執筆者は、富山一郎さんを除くと人類学者ですよ。あれも最初は「主体・身体・情動構築の……」という名前だったけど。

—— 共同研究のテーマから見ると、とても精力的にさまざまな分野でのご研究をされているように見えますが、その点については意識的に取り組まれてきたのでしょうか？

田中 人類学の魅力は何でもできるということです。宗教学では宗教しかできない。何でもできるというと、雑食的になってしまいがちだけど、それに歯止めをかけるのが、フィールドワーク

という方法と大きな問題意識だといえます。たとえば、福井先生だったら「人間と自然」。菅原先生だったら「コミュニケーション」とか「身体化」、私の場合だったら「個人と社会」。こういう大きな問題意識をもっていれば雑食的であっても問題を感じない。まあいろいろやっても、やっぱり自分なりの問題意識をもっておかないといけないということになると思います。

—— なるほど。バラバラな興味関心というわけではなく、根底には共通のテーマが存在していたんですね。

田中 はい、より具体的にはすでに述べたアルチュセールに始まる主体化の問題が共通する課題です。これは儀礼的暴力、ミクロ人類学のもとになる「主体・身体・情動」、フェティシズム、トラウマといった研究会の流れです。一見関係ないかに見える、女神、植民地主義と人類学、コンタクト・ゾーンなどでも主体化の問題は共通しています。たとえば女神も当然女性の主体化に関わってきます。

もう1つ述べておきたいことがあります。いろんなことをするのは、私にとって自由の実践でもあるということです。雑食的であるということは同時に他者の(雑食の)自由をも認める態度につながっていると思っています。少くも専門でなくても、ほかの人が組織する研究会にも積極的に飛び込んでいくというのも同じ。雑食する自由あるいは「自己分裂」する自由。その中には、「全体化を否定する」の話で触れたように、他者を理解する＝所有する「幸せな経験」の否定も含まれている。自己否定も含めての自己分裂・自己断片化する自由。そんな自由も許してくれるのが人類学のいいところではないでしょうか。「軍隊なんてアホか!」とか「何がエロスや!」という罵声も人文研の建物のすぐ近く(文学部)から聞こえてはきますが、私への応援歌だと思っています(笑)。

7 インド研究から 在日米軍基地の研究へ

インドでの調査地探し

—— スリランカ以外にもいろんなところでフィールドワークをされていますが、民博に就職してからインドでの調査に取り組み始められたんですね。

田中 民博の長野泰彦先生に言われたのは、スリランカのあとはインドをやってほしいということでした。

—— そうだったんですか。てっきり、スリランカが内戦で大変

だから、南インドにフィールドを変えたのかと思っていました。

田中 それもあるけど、シンハラ社会を研究していた人たちは内戦に関係なくスリランカで調査を続けている。長野さんがインド関係の科研(D3)を始めていたこともあるし、民博ではインドの専門家を育てたかったのだと思います。この科研がなければインドを本格的にやっていたかは疑問です。そういう意味では長野さんに感謝している。86年の8月に民博に就職してから、最初の1年くらいは日本にずっといたかな。87年の12月～翌年3月の4カ月、インドでの調査地を探すために現地に行った。そこでチダンバラム(南インド、タミルナードゥ州の寺町)に決めるわけです。

—— 4カ月は結構長いですね。南インドに限らず、いろんなところをまわったんですか？

田中 ほんとインド1周したよね。北西インドのラージャスターンではちょうどサティー(いわゆる寡婦の殉死問題)が実施されたばかりだった。デリーにも長い間いました。デリー、ムンバイ、コルカタなどの大都市。南インドだとケーララとタミル各地。北インドだとガヤ、ブッダガヤ。ヴァラーナーシーは行ってないけれども、ウダイプール、ジャイプールはまわりました。

—— では、そのときは儀礼研究を続けようと思っていたわけではないのですか？

田中 思っていたよ。科研のテーマと関わることをしなくてはならないというのもあったけど、それとは別に個人研究のためにインドで何か新しいことをやらなきゃならないと思っていた。もっと長期的な調査地を決めたかった。そのとき、実は工場をやりたいと思っていた。それで、タミルナードゥ州のコインバトールに長く滞在していた。アジアのマンチェスターと言われた産業地帯です。そこの綿布工場を見てまわった。セメント工場も訪ねました。でも、結局お寺になった。ジョニー(パリー)はヴァラーナーシーでの調査を終えたのち、北インドの産業地帯で調査をするんですよね。私のほうが発想は早かったけど、結局やらなかった。

—— 最終的にはチダンバラムに決められたんですね。

田中 はい、工場って、組合とか、組織的にきちっとしているからなかなか自由に入れるものではないという印象を受けた。チダンバラムは、ご存知のようにいいところだし、お寺はその前からクリス・フラーがやっていたから抵抗はなかった。お寺をやるのなら、当然彼の調査地のマドゥライ以外でやろうということになる。

インド調査は、民博のときに始めて88年以降10年くらい続

けるわけです。96、97年まで毎年のようにインドに行きました。就職もしていたし、子どももいたので長期の調査はできないとわかっていた。とりあえず、チダンバラムでは司祭たちのことを中心に調査をするのと、寺院の訴訟の歴史をきちんとやろうと思った。訴訟関係はチェンナイの高等裁判所に行く必要がある。私が訪れると、寺院訴訟の調査でやってきた研究者はお前で4人目だと言われました。最初はアルジュン・アッパードゥライの妻キャロル・ブレッケンリッジ、つぎにフラー、3番目がフラーの友人のアンソニー・グッドです。チダンバラムは調査を始めた1988年当時は、児童婚がスキャンダルになっていて、寺院のことについてはあまりみんな喋りたがらなかったです。政府との軋轢もあった。スリランカでは漁民カーストを中心に村落生活をくまなく調査する、という感じでしたが、チダンバラムではバラモン司祭の行う家庭祭祀とお寺での儀礼や祭りが中心になりました。(補12)

〈補足12〉 チダンバラムでの調査は1998年くらいで実質終了します。再びインドで本格的な調査を行うのは、2011年以後になります。この年の夏にセックスワークについての国際的な集会在コルカタで開催されました。私はこれに参加したのち、ムンバイを拠点にセックスワーカーの調査を始めました。

現代インド社会と女性への暴力

—— 現在、京都大学ではインド関係の研究プロジェクトが組織されています。先生もまた研究グループ(C14)の代表になっていますね。(補13)

〈補足13〉 5年間のプロジェクト終了後、「南アジア地域研究」として継続されています。現代インド地域研究プロジェクトの成果は、2021年に『インド・剥き出しの世界』(O18)として公刊されています。



写真12 チダンバラムのナタラージャ寺院(1988年12月撮影)

—— スリランカとインドには毎年コンスタントに行かれているように思うのですが、80～90年代に比べて現代の南アジア社会はいかがですか？

田中 もちろん、大きく変わりました。スリランカの場合、スーパーマーケットがあちこちできていることでしょうか。車道もよくなりました。とはいえ、30年近く内戦で苦しんできたこともあり、私の村あたりから北は、あまり風景が変わっていません。投資がなされていないということです。村人たちは少数派のタミルですから、どんどん海外に出て行ってしまった。今ロンドンには村出身の若者が1000人近くいて、Tescoなどのスーパーで働いている。私たちが住んでいた家の隣にいた5歳くらいの女の子も、今はロンドンに住んでいてお子さんが2人います。私の現在の仕事の1つは、彼らがどうやってロンドンまでたどり着き、どんな生活を送っているのかを明らかにすることです。私は覚えていなくても、彼らは私のことをよく知っていますから、その分、楽ですね。

—— インドについてはどうですか？

田中 そうですね。インドももちろん急速に発展しています。シンガポールにありそうなショッピングセンターができていたりする。道路事情もすごくよくなった。ただ、チダンバラムはそんなに変わっていないのではないですか？ 今の南インドについては飯塚真弓さん(院生)のほうが詳しいと思います。ただ、忘れてはならないのは、インドはどれだけ発展しても、社会の底辺で苦しんでいる人がたくさんいることです。

なぜインドを研究対象にしたのか、という問いへの答えはカースト制度に関心があるからでした。残念ながらカースト制度の研究は私の中心的なテーマにはなりません。理由は、スリランカの調査地では、底辺に位置するカースト集団を把握するまでに至らなかったということです。漁民カーストの調査で精いっぱいだった。女性の地位については関心があり、1991年には論文「スリランカ・タミル漁村における女性の地位」(I7)も発表しますが、それも虐げられている女性の状態を告発しているわけではありません。むしろ、自立している事例をあげてこれまでの南アジアの女性についてのイメージを相対化しようとしている。

1987年秋にインドに渡り、そこでサティー事件(注7)に出会う。これが大きかった。サティーについて論文(K22)を書き、当時のインドをめぐるジェンダー研究の最良の部分に触れることができました。留保制度の導入などで、女性の地位は上がっているかもしれませんが、暴力という観点から見る限り、楽観視できま

せん。

最近私は、デリーの女性開発センターを訪ねましたが、新聞報道を見る限り、女性への暴力は増えてきている。バスの中やバス乗り場での暴力的な痴漢行為、名誉殺人、酸攻撃、まだまだあるでしょう。この数年間は名誉殺人をやっていますが、酸攻撃(acid attack, acid violence)も残酷な行為です。ある意味殺されるよりひどい。10代の女性の顔が焼けただけ、すぐに中和しないと酸が骨にまで浸みていきます。名誉殺人では、女性の性的な行為のせいで恥をかかされたと感じた両親や兄弟、あるいは夫が女性を殺してしまう、場合によっては相手の男性を殺す場合もある。こういう事例が北インドからパキスタン、ヨルダンなどに広く認められます。また欧米の南アジア系移民の間でも見られるという意味では、グローバル化している犯罪行為と言えるでしょう。そして、女性を虐待する第三世界というイメージの強化に一役買っています(C17、C20、C21、O17)。

在日米軍基地が開く世界

—— インドでおおよそ10年間やって、そのあと在日米軍の調査を始めましたね。

田中 はい、私がやろうとしていたのは、基地と周辺社会との関係ではなく、基地そのものを調査したかった。軍隊そのものを知りたかった。基地の中の軍隊の生活とかを知りたいと思っていた。だけど、基地に入ること自体が難しいから調査は当然困難になってくる。

なぜ米軍に関心をもち始めたかっていうと、1990年代初めに民博の久保正敏さんと、秘宝館の調査をし始めます。それで川崎の金山神社(若宮八幡宮)に行くんです。そこにもコレクションがありますからね。金山神社のお祭りのときでした(J3)。そこでたくさん米軍の人たちに出会ったのです。「ああ、こういうのも米兵はやってるんだ」ということに気付いた。それまでは、米兵というと、性犯罪とか女性たちがいっぱい群がっているとか、スキャンダラスなイメージでしかなかったけど、普通に観光しているわけなんです。これはおもしろいと思って調査を始めました。米兵が、観光も含めふつうにどんな生活をしているのかということに関心があったのです。調査はしにくいけど、少しずつインタビューをして聞いていくことにした。

アメリカの基地のおもしろさは、場所性の問題と関連付けると2つあって、方法的にはフィールドワークから離れざるを得ない。基地には住めないからね。参与観察できない。でも基地その

ものは非常に村的な世界なんだよね。その中で生活がほぼ充足できて、完結している。もっと言えば、戦闘状態になったときでも外部に依存せずにやっていけるのを理想とする世界です。住居が外にあったとしても兵隊たちは9.11のときみたいに非常事態になったらみんな基地の中に招集されちゃう。だから家族もいったいどこに自分の夫や妻、父や母が行ってるのかわからなくなる。すべて秘密なんです。海軍だったらそのまま横須賀を出発してどこかに行っちゃうかもしれないし、まだ基地内にいるかもしれないし、全然わからない。変な話だけど、住居が基地の外にあると、家族とも離れて基地内で「自給自足」になってしまいます。だから人類学者が昔から想定していた村の自給自足の生活よりもっと徹底しているとも言える。

—— ある意味かなり人工的ですけどね。

田中 もちろんそう。一方で、アメリカ軍基地は地球規模で展開しているから、自給自足とは全然言えないわけです。物理的に自足的にみえるけれども、他方でそうじゃない。これはおもしろいテーマだと思った。米軍基地の調査は96年からやり始めて97年から研究助成を受けた(A12)。いろいろと勉強になって、今まで知らなかった世界が開けた。場所という問題とそうではないという問題でできていること。この米軍基地の研究を10年くらい続けます。

—— 具体的には何をされたのですか？

田中 金山神社のお祭りで初めて出会ったということもありますから、まず米兵たちが日本の何を見ているのか、ということに関心をもちました。最初に座間の米陸軍基地に行って福利厚生関係の施設部で旅行の話を聞きます。資金が必要ですから「旅の文化研究所」の助成金(A12)に応募して採択されます。その後、科研(A14-19)などにも採択されて、調査は軌道に乗ります。

調査地はあえて1つに絞らず、マルチなフィールドワークを心がけてきましたが、それが良かったかどうかはこれから評価されるでしょう。佐世保では、国防総省が出している『星条旗新聞』の記者に取材されてトップで私の調査が報じられます(写真13)。まずは太平洋版に掲載。その後ヨーロッパ版に再掲され、30人くらいからメールでの反応がありました。これこそ、調査でのブレイクスルーでしょう。そのあとずっと調査がやりやすくなります。

—— 沖縄にも行かれていますね。

田中 沖縄ではいくつか印象に残る出会いがありました。そのうちの1つは、当時嘉手納基地で働いていたクリス・エイムズさんとの出会いです。彼は、東北で2年間英語の先生をして沖縄にやってきます。私のせいかどうかわかりませんが、2

回目にお会いしたとき、彼は人類学を勉強するために、複数のアメリカの大学院に応募していました。彼の案内で広大な嘉手納基地を車で回るのが、F15戦闘機が待機している格納庫のそばをゆっくり走りながら2人で話すことと言ったら、太田好信や富山一郎の仕事についてだったりするわけです。とてもシュールな世界が展開していると感じました。しかも基地内の彼のオフィスには吉本隆明の戦争論やストッキング Jr.の人類学の歴史についての本などが置いてある。クリスはその後ミシガン大学に進学し、そこで博士号をとります。テーマはウチナンチューとヤマトンチュー、そしてアメリカ兵との関係です。そうそう、彼に頼んでゲイル・ルービンの博士論文をコピーしてもらったこともありました。それは、サンフランシスコでBDSMを実践するゲイたちについてでした。なぜこんなものを？とクリスも驚いたことでしょう。彼には、その後もいろいろとお世話になっています(E21)。

基地に関しては、クリスのほかに、宮西香穂里さんが米兵と日本人女性の結婚を横須賀と沖縄で研究していますし、徐玉子さんが在韓米軍基地周辺ではたらくセックスワーカーについて調査を行っています。彼女たちの仕事の一部は『コンタクト・ゾー



写真13 『星条旗新聞』(1998年5月27日)に掲載された記事

ンの人文学 第1巻』(O9)に収められています。私も同じ巻に占領期における米兵相手の女性について論文(K49)を書いています。もともと軍隊の研究のために、基地にアプローチしたわけですが、結果的には基地が置かれている文脈、つまり現代日本——戦後日本を無視することはできなくなりました。占領期の日本、そして今の沖縄社会の置かれている状況や基地周辺の環境問題へと関心を移す必要を感じました。

サンフランシスコ、そしてアウシュヴィッツへ

—— 主要なフィールドはスリランカとインド・チダンバラム、そして日本ということになりますが、それ以外でどこか印象に残っているところはありますか？

田中 そうですね。サンフランシスコは、いろいろと気になる場所です。ルービンが調査したのもサンフランシスコでした。パット・カリフィアの活動拠点もサンフランシスコだったと思います。彼女が『パブリック・セックス』(東玲子訳、青土社、1998年)で批判している女神崇拜運動の指導者のひとりスターホークもサンフランシスコに暮らしている。また、モダン・プリミティヴの教祖でもあるムサファーもサンフランシスコが拠点でしたので、サンフランシスコは気になっていた(T14)。セックス研究の聖地のひとつがThe Institute for Advanced Studies in Human Sexologyです。ここを訪ねるのはもっとあとですが、合衆国のセックス・シーンで無視できない女性がここで博士号をとっている。アニー・スプリンクルです。彼女の本も翻訳『アニー・スプリンクルの愛のヴァイブレーション』がありますね。

サンフランシスコに滞在していたとき、たまたまホテルの近くの劇場で「ヴァギナ・モノローグ」を上演していたので、電話予約をしました。近くの本屋さんにこの舞台のもとになった本が平積みで売られていた。これをウェスティンホテルのバーで読み、それから劇を観ました。3人の女優のうちひとりスーパーモデルのナオミ・キャンベルでした。この本ものに翻訳されずし、日本でも上演されています。新入生相手のポケットゼミで購読に使ったこともあります。

もう1つ重要な体験をお話します。2001年9月11日に陸軍のスタッフとペンタゴンで会うことになっていました。クリスを通じてアレンジしてもらってました。場所はペンタゴン、国防総省です。しかし、気になって当日の朝電話を入れたのです。軍隊は朝が早いですから、電話をしたのが7時半くらいだったと思います。すると、今日は忙しいから明日にしてくれと言われまし

た。それで食堂に行って朝ご飯を食べていると、どやどやっ、とたくさんの人が食堂に入ってきて、テレビのスイッチを入れるではないですか。どうした?とっていると、ツインタワーに飛行機が突っ込んで燃えている映像。そのあとほぼリアルタイムでペンタゴンにも飛行機が突っ込む映像が流れます。そういうわけで、キャンセルになって命拾いをしました。ただ、ワシントンDCはニューヨークと違って、わりと平静でした。帰国の飛行機はキャンセルになり、余った時間を議会図書館で過ごしたり、インド系の宗教施設を回ったりできましたから。ただ、ペンタゴンの最寄りの駅は閉鎖されていました。

9.11以後、世界は変わりました。セキュリティも強化され、基地の調査も難しくなりましたね。2001年にすべてのビルがツインタワーになってもおかしくない状況が生まれた。2003年にはイラク進攻が始まり、今度ほどの国もイラクになってもおかしくない状況が生じたと言えます(M20)。(補14)

〈補足14〉 軍隊については、2015年に論文集『軍隊の文化人類学』(N7)を風響社から公刊します。軍隊の研究が一息ついたこともあり、対象を広げて軍事環境問題をテーマに研究を続けることとなります。在日米軍(基地)は、コンタクト・ゾーンとしても無視できないテーマですし、また歴史を辿れば占領期の日本を無視できません。さらに米兵による性暴力やパンパンと呼ばれる米兵相手のセックスワーカーを考慮するなら、女性への暴力というテーマにも関わることになります。

こうした動きと直接は関係ありませんが、戦争という関係で結びついているのが、ベルギー・イーブルで開始した第一次世界大戦の調査とアウシュヴィッツの調査です。イーブルは第一次世界大戦の激戦地で、初めて化学兵器が使用された場所でもあります。ここでは、追悼関連の施設や儀式を調査し、また兵士たちが塹壕で武器などを材料に作ったトレンチ・アートについて考察しました。ポーランド南部の町アウシュヴィッツにナチスが作った強制収容所では、およそ100万人のユダヤ人が殺されました。

2013年夏のアウシュヴィッツ初訪問で私は大変貴重な経験をします。それはツアーの参加者の中にアウシュヴィッツ強制収容所の生存者がいたのです。彼は、イスラエルに滞在していて、アメリカに在住の娘と一緒にアウシュヴィッツを再訪していました。これが最後の訪問になるだろうとおっしゃっていましたが、娘に彼の体験を伝えたかったに違いありません。彼は収容所の敷地で、自分の体験について

話し始めました。これを聞いていたガイドの女性がすすり泣きを始めます。私はこれを見逃しませんでした。そして、たぶんこれまでも生存者の体験を聞いたことのあるはずのガイドが、こんな風にもらい泣きをしてもいいのだろうか、という疑問を抱いたのです。これがアウシュヴィッツにおけるガイドの研究 (I41、K73) へとつながります。

8 京大の人類学

大学院で教える

—— 大学院設立の経緯について教えていただけますか？

田中 最初は調査と共同研究三昧でしたが、京都大学に来て5年目の1993年に教養部が改組され人間・環境学研究科(人・環)ができます(注8)。本来、研究所のスタッフは学生を育てることを最初から諦めるしかない。つまり打ち上げ花火みたいに、自分が頑張って花火になるしかない。それはもう宿命だと思われていました。共同研究を活動の核としている人文研のような研究所は、共同研究のメンバーをいかにリクルートするかが悩ましい問題となってきます。若い人が来なければどんどん縮小してしまう。民博も人文研も、大学院ができたことで共同研究の構成がすごく変化したと思う。

—— 先生自身は、大学の職につく前には学生に教えることには興味があったんですか？

田中 民博にいたときも非常勤をいくつかしていました。うまいとは思わないけど、苦にはならない。最初の非常勤でやった講義をもとに生まれた教科書もある。『文化人類学を学ぶ人のために』(T1、T2)の構成は1987年ごろにやっていた平安女学院短大での文化人類学の講義をもとにしています。だけど、大学院ができて最初の授業(学部・大学院共通の文化行為論、のちに文化実践論)は隔週で2回分続けてやっていたんですが、7回く



写真14 京都大学芦生研究林の宿泊所でも合宿演習を行った(2008年6月撮影)

らい。

—— 1年ですか？

田中 そう。7回やったら話すことがなくなった。その次の年は14回くらい。通年で20回くらい話ができるようになったのは3年目です。最初の7回の講義が『現代人類学を学ぶ人のために』の学説史と親族研究の章(T4)になっています。(補15)

〈補足15〉科目については他に大学院ゼミ、たまに全学共通科目(「現代人類学」、新入生向けポケット(ILAS)ゼミ(「ジェンダーと宗教」、「ジェンダーとセクシュアリティ」)などを担当。

—— 学生指導についてはどのように考えておられますか？

田中 教育とは何か、という問題に関わりますよね。教育熱心とは何に熱心かということを問う必要があります。私なんかより、もっと熱く人類学や自分のフィールドについて語る人はたくさんいます。講義もきちんと準備する人もいるでしょう。でも私は当日の朝に何を話すか決めて電車とバスの中でパワーポイントをまとめる、なんてことがたまにあります。私自身は、LSEで教育の恩恵を受けてきたと思っている。それはイギリス人やフランス人から受けたことだけど、それを彼らに返す必要はない。自分の学生に返せばいいと考えています。で、何をまず伝えるべきか。世の中の仕組みや思想や心構えも大事ですが、まずは研究者として立ち立てるために必要な技術だと思っています。

単純に考えると、大学院教育は原則研究者を育てることです。そのために必要なのは論文を書くことです。ですから論文の書き方を教える。これに尽きる。細かく言うと、文化人類学なら本を読み、議論し、フィールドワークをし、データを分析し、学会で発表し、論文を書く。それから少し経つと就職して教える立場に就く。しかし、最後の教えること以外は、論文を書くための活動と言ってもいい。フィールドワークについては、そういう教育を受けてこなかったのも、私も教えるつもりは最初からない。同じ理由で教え方も教えない。でも本当はフィールドワークや講義の仕方なども教える必要があるのかもしれない。まあ教えてもらえなかったものは教えられない、教えない。

論文の書き方は1981年当時シドニーから資料収集にいらしていた竹田いさみさん(獨協大学教授)がたまたま同じ寮だったこともあり、きびしくかつ丁寧に教えてもらいました。内容は覚えていませんが、そのとき教えてもらって、論文の書き方がわかった! という実感がありますから、教えたいし、伝わっている。だけど教わっていないけど教えなければと思うものもあります。まず書評です。これは教えなければならぬ。時間

があれば徹底的に技術を伝えたい。もう1つは助成金などの申請書の書き方。これもアカデミアの世界で生きのびるためには伝えなければならない技術です。

事実(アフリカではこんなことがなされている、といったこと)を教えることも大事だけど、そんなことは関心があれば自分でも学べます。WhatというよりHowが大事。ある事実についていかに考え、批判し、表現するのか。そのための方法が論文です。フィールドでの驚きや感動の経験を論文という形式で表すにはどうすれば効果的なのか。どういう技術が必要なのか。それが私にとって大学院教育の核心です。

文化人類学の教科書づくり

— 教科書もたくさん書いていらっしゃいますが、それは先ほかがった「教えたいし、伝わらと思っている」というお話と類似する点がありますか？

田中 これまで『文化人類学を学ぶ人のために』の構想に始まり、『ジェンダーで学ぶ文化人類学』(04)などいくつかの教科書を編集してきましたが、教育との関係で重要だと思っている業績は、『文化人類学文献事典』(03)です。そこに「争点」というセクションがあります。これは同じシリーズの他の文献事典にはないセクションです。そこには人類学の論争を集めているわけです。その論争の中でどんな本が大事なのかということを英語論文も含めて紹介しています。ここを読むと自分の問題意識が明確になり、また関連する先行研究を見つけることができます。

どんな論争を争点に入れるかを編集委員みんなで考えました。選んでからこの論争だったらこの人に頼みましょうって決めていくんだけど、本書で取り上げたいいくつかの論争はLSEの詰め込み教育で教えられたものです。LSEの講義では、何か事実について学ぶだけではなく、それがどう解釈されているのかを教える。妖術とは何か、というよりは、妖術とはどのように解釈されて議論されてきたかを60分で学ぶ。それは要するに争点を学んでいたということなんだよね。学生たちはそういう争点を徹底的に教えられていた。

当時の私の頭の中には、政治(たとえばファクションとは何か?)から宗教(トーテミズムとは何か?)、親族(母方のオジとは誰か?)、経済(原始貨幣とは何か?)までいろんな論争が詰まっていた。そのほとんどをこの『文献事典』で放出できたのは私にとって大きかった。このまま死ぬまで抱え込んでいてはだめだ、どこかで出さないとだめだなどと思っていましたから。『文献事

典』のおかげで脳内容量にまた余裕ができて、新しいことをする気になりました。

— でもそういう争点を一冊の本にするのは難しいですよね。

田中 もちろん、専門じゃない項目もあって、自分で全部書けるわけではない。たとえば核家族論とかは私より適切な執筆者がいるでしょう。大事なのは、争点として出すことで、家族について書きたいと考えている人が、『文献事典』を読んで何の問題にしたらよいかのかわかるわけです。

— じゃあ、人類学を専門的にやりたい人はこれを読んだらいいですね。試験勉強とかも。

田中 そうです。論文を書くにしても、こういうテーマでやりたかったら、こういう文献を最低読まなくてはいけないんだということがわかるように書いている。本来は、争点に書いてあるようなことを講義で教えなければならないのですが、少ない教員では物理的に無理なわけです。かといって学生が自分で一からやるのは大変ですよね。よくよく調べていると、日本の教科書は論争をきちんと取り上げたものはないのです。分担執筆のせいもありますが、序文は学説史になっていて、あとは主要な項目の説明が並べられているだけです。その項目がどう論じられてきて、大きな学説の流れとどう関わっていくのかがわかりにくい。

フィールドワークと人生設計

— 先生は1990年ごろから毎年コンスタントに7~8本もの多数の論文を発表していらっしゃいますが、それはもう先生の中でリズムになっているんですか？

田中 そういうわけでもないです。リズムなどないから書き続けられるのかもしれませんが。私の体内時計はどの昔に壊れていて、時差ボケとかで苦しむことはない。海外どこに行ってもいつもと同じく仕事ができます。体内時計が壊れているのは、不規則な生活をしているからです。そもそも就寝儀礼をしない。眠い、と思ったとたんに場所を選ばずもう寝ています。講義中、自分が話していても一瞬寝てしまうこともありました。最初は石井美保さんの公聴会が午後に予定されていた日の午前の講義でした。当時は公聴会前日にも遅くまで審査員と学生ひとりだけで審査をしたのです。意識がずっと消えてしまった。このときはさすがに怖くなって病院で脳のMRIをとりました(笑)。

— 論文執筆にはフィールドワークは欠かせないと思いますが、今、長期のフィールドワークをやりたいと思いますか？

田中 何をやるかだよ。やろうと思えばできないことはない。

何をしたいかというのはあるのですが、実現可能かどうかはまた別の問題です。

—— 年を重ねるにつれて調査が変わってくるというのは、日本の人類学者の傾向でしょうか？ 若いころは体力もあるし、頑張っって長期で住みこんでデータを集める。でもだんだんインタビューや理論が中心になっていくという傾向についてお聞きしたいと思います。

田中 今の時代が場所性を求めないから、外国まで行って調査しなくてもいいんじゃないかと思う人もいますでしょう。場所よりも、まさに会話とかにリアリティがあると考える研究者もいますでしょう。行きたくても就職や結婚、子育てで長期の調査ができない人も多いでしょう。私の場合は、スリランカからインド、基地とテーマを変えてきました。これに今集中してやっているセックスワークを入れてもいい。こう並べてみると、場所的なものは徐々に薄くなっている。繰り返しになるけど、それは時代のテーマがそうさせているとも言えるし、年齢や仕事そうさせているとも言える。ただフィールドワークへのこだわりについては日本だけでなく、世界的な視野から相対的に見るほうがいいかもしれません。

外国の研究者は案外、就職するとフィールドワークをやっていないんですよ。たとえばイギリスでは博士論文を書くためには1年でも1年半でも長期のフィールドワークが必要だけれど、大学の先生になると、2回目、3回目と長期のフィールドワークをやるわけではない。それでもずっと本を書いたり、論文を書いたりする人もいます。アメリカなんかだと一度就職すると教えるだけで、論文を書かない人もいます。日本は、もともと博士論文なかなかなかったから(昔は50歳ぐらいで出すような感じでした)、最初の長期フィールドワークをもとに博論を書く、本を出版するというようなけじめがない。その結果、日本の人類学者は、いい意味では就職後も真摯に(長期ではなくても)フィールドワークを持続してきた。それに加えて複数のメンバーで行う科研の海外調査のあり方も影響しているかもしれない。昔は(今もかもしれませんが)、指導する院生がいる教員は科研を組織して、学生をフィールドに連れて行ったものです。

—— フィールドワークはお金がかかりますね。

田中 お金と時間の2つです。時間があってもお金がなかったり、お金があっても時間がなかったりする。いろんな兼ね合いを考えないといけない。人生設計も考えないといけないですよ。まあ、これは文化人類学だけでなく、学問一般に言えることかもしれません。

独創性＝感動を求めて

—— 京大の人類学の魅力について聞かせていただけますか？

田中 何よりも人類学が大きな顔ができる大学だということだよ。先輩たちのおかげで人類学が自由にできるし、周りの理解もある。事務もふくめて、大学全体として理解がある。理系の調査や探検の伝統があって、人文社会科学の勉強といっても、文献研究ばかりじゃない。そこには、教師も学生もフィールドワークに行くことが当たり前という暗黙の理解があって、京大ではとにかくフィールドワークの意義を強調する。

イギリスの場合は、博士課程に進学して初めてフィールドワークに出かける。調査は極めて個人的だし、どちらかというとブッキッシュ。京大では、今70～80歳になるような先生たちが、フィールドの重要性、つまり、「教育はフィールドで行う」という方法を確立していった。だから、大学を離れて長期間住み込むこともいとわれない。それに、現地での作法、フィールドでの研究者としてのあり方についての教授も細やかに行われる。学んでいることはフィールドのことだし、それはポジティブな面とも言える。でも、逆にネガティブな面もあって、それは書物での教育がどうしても薄くなってしまふこと。理論学習については教育システムとして確立されていないから、指導教員によって教育方法や質にばらつきがでてしまうこともある。

—— この修士課程の2年間で一番びっくりしたのは、どの先生もフィールドでの「感動」にこだわっていることでした。発表のときにも「フィールドでいちばん感動したものは何か?」、修士論文指導のときも「もっと文章から感動が伝わってこなくて」と言われました。それはフィールドでの経験が重視されるということでしょうか？

田中 やっぱ文献研究だけの文章に比べると、フィールドワークをもとに書いたものの方が絶対おもしろい。さっきも言ったように、よくも悪くもだけど。フィールドワークをやりたくて入学してくる学生も、修士の2年で卒業する学生もいるから、ここでは修士課程のときから現地に行ってフィールドワークを経験してもらおう。そこで得てほしいのは、感動ですよ。その感動をどう伝えるのか。学問の世界では、小説や絵画ではなくて論文という形をとる。だからその技術を教える必要がある。フィールドワークの目的が感動の経験であり、民族誌の目的がその感動を伝えることであるとしたら、私たち教師にできることは後者についてだと思います。いかに感動を(論文という形で)表現するかについては教えられても、どう感動を経験するか、について教えること

はできない。

京大では独創性のない内容——感動のないフィールドワーク、感動を伝えられない発表などは(たくさんありますが)徹底的に批判される。最先端の研究を紹介したり、今までの議論を順列組合せで展開したりするような技術は、東の方にある大学に任せておけばいいのです。

ただ、私は、論文という形式を整えて感動を伝えるには、それなりの武装闘争を心がける必要があると思います。1つは感動そのものにおぼれてはいけない。プチ感動ではだめなんです。武装闘争するとき、相手のもっている武器を使う。相手の土俵に上がって勝負する。そうでないと、いつまでも議論がかみあいません。たとえば私は最近、「運命的瞬間」という概念で、感動の問題を論じようと思いました(K47)。感動をお涙ちょうだいの物語ととらえる必要はありません。笑いや怒り、欲情、テキストからなんらかの情動が伝わればいいと思っています。

—— 私の場合、修士は別の大学で学び、京大へは博士課程から編入してきたのですが、京大は学生が多いので議論や情報交換が盛んに行われていると感じました。

田中 そうだね。人類学者もいろんな学部にいるし。人・環、ASAFAS(アジア・アフリカ地域研究研究科)、人文研、文学部、農学部、東南アジア研究所……。京都の人類学者があつまる京都人類学研究会(通称・京人研)もある。ただ、京大は地域的には偏りがあるかな。南アジアとか中東、アフリカをフィールドにする先生は多いけど、オセアニアと中南米の層が薄いよね。たしかに、情報にアクセスしやすいっていうのはあるね。ここでは、学生がどの学会に入るのか、どこに投稿論文を出せばよいのかななどで迷うことはほとんどない。

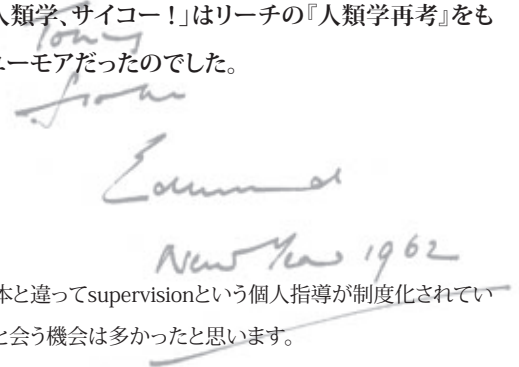
—— 確かに。京人研もそうですが、京大ではたくさんの研究会やシンポジウムがあるので、修士課程から研究者や他校の学生と交流することができる。それから、論文構想ゼミや合同ゼミなど、自分のゼミ以外での発表の機会に恵まれていますね。自分から進んで関わっていけば、研究の輪を広げるためのチャンスが多く用意されていることも京大で学ぶ大きな利点だと思います。

田中 そうですね。

—— ところで結局、先生の教員紹介ページに記載されている「文化人類学、サイコー！」っていうのは一体何をもって最高ということだったのでしょうか？

田中 えっ、わからなかった？ これだよ、これ(笑)。

田中先生は背後の本棚から一冊の古い洋書を取り出して見せてくれた。内側には著者エドモンド・リーチの直筆サインが書き込まれている。本のタイトルは *Rethinking Anthropology*。日本語版の翻訳書も取り出して見せてくれた。『人類学再考』。つまり、「文化人類学、サイコー！」はリーチの『人類学再考』をもじった先生のユーモアだったのです。



〈注〉

注1 ただし、日本と違ってsupervisionという個人指導が制度化されているので指導教員と会う機会は多かったと思います。

注2 “The Bonds of Love: Relational Violence and Erotic Domination.” *Feminist Studies* 6: 144–174.1985.

注3 『2001年宇宙の旅』を上映していたOS劇場の裏手から南に延びているアーケード街、国道を超えたあたりから中古ビデオ屋や大人のおもちゃ屋など風俗度が高まる。当時の私にとって重要な情報源でした。

注4 *Genders* 6(2-3): 62-99, 1994。バトラーによるルービンのインタビュー“Sexual Traffic”より(翻訳は「性の交易」『現代思想』1997年12月号)。その数年後、同じ「運命」がルービン自身に待ち受けています。クイア人類学の先駆者で、『ジェンダー・トラブル』のクライマックスを飾るドラッグ・クイーン論 *Mother Camp: Female Impersonators in America* (1979)の著者、E.ニュートンが自伝的な著書 *Margaret Mead Made me Gay: Personal Essays, Public Ideas* (2000)で「バーナード会議の準備委員会でのことだけど、あるときアン・スニトウがやってきたのをよくおぼえているわ。ゲイル・ルービンの論文「セックスを考える」の原稿を手でふりながら、彼女はこう叫んだの。「私はいま革命的な成果を手に行っている。この論文を読んだら、私たちはセックスをいままでと同じようには考えなくなるのよ!」」[pp.272-273]と述べています。こんなふうにして思想は身体化して受け継がれていくわけです。

注5 ここで意識していたのは、スーザン・R・スレイマンの著書 *Subversive Intent: Gender, Politics, and the Avant-Garde* (1990)です。

注6 ニューギニア研究者。妹のロザリンド・オハンロンはインド史の研究者。

注7 1987年にインド北西部でおこった寡婦殉死事件のことです。結婚生活8カ月の新妻が、病死した夫の遺骸とともに積薪の火炎に包まれて灰となりました。

注8 京大には長らく人類学を専門に教える教育機関がありませんでした。そのため、それぞれの研究科に所属する若手研究者によって、自主的に文化人類学の勉強会が組織されました。それが現在の京都人類学研究会(京人研)の前身である「近衛ロンド」(1963-1995)です。現在では長期休暇を除いて毎月研究会が開催されています。人・環の文化人類学分野は1993年に京大で初めて人類学を専門に教える講座として発足しました。

再録

Devotees 兵士 アウシュヴィッツ ヴィツ フィールド Hindu 地域 Social 村落 祭祀
ガイド Bases ヒンドゥー教 コンタクト・ゾーン 射程力 資源 信頼
Culture 共同体 文化人類学 フェティシズム 技術 占領期 Patrons
Power South ヒンドゥー エクスタシー 人ン 以 北 Bay
政策 実践 南アジア 初潮 顔
Temple 身体化 売春街
環境問題 血
Gender モノ 軍隊 漁村 構造
Military 暴力 自慰 女 儀式 南インド 戦中
神々 基地 War 親密園 癒し 痛み 夜 月経 着 米軍 親族 男性
労働 文化 寺院 U.S. ジェンダー 性文化 アート 神 人類学 感情 女性 ミル FC
JVP 父 調査 世界 男性 身体 民族 民衆 地 曳 網 漁 格子 進化 脱 身体化 性器 軍事 宗教
人文学 民族紛争 性暴力 性暴力 性暴力
チダンバラム フェティッシュ シュ
Ritual Nature 在日米軍 ワイルド・サイド 裸 武器 在日 イヤラシ 他者 系譜
Tamil 経済 ヒンドゥー 寺院 カースト セクシュアリティ ナショナリズム
Priests セックスワーカー 継承 食 歴史 人類学 サデー

妖術と邪術

(『日本における文化人類学教育の再検討』2003年より)(R8)

1 はじめに

本稿では、古くて新しい人類学のテーマである妖術witchcraftと邪術sorceryについての議論を再考する。その際、参考としたのは、ジュディス・バトラーが『ジェンダー・トラブル』で展開しているジェンダー・アイデンティティの構築性をめぐる議論である。本稿では、妖術師とは、ジェンダーと同じく、構築的に生みだされるものという点を指摘したうえで、それが、すくなくともアザンデ社会においては、平民のアイデンティティ構築と密接に関係していることを明らかにし、従来の妖術・邪術論とは異なる視点を呈示したい。

2 パフォーマティヴィティ・呼びかけ・エイジェント

バトラーが、ジェンダーの構築的性格を明らかにするために採用したのがJ・L・オースティンが提唱した人を動かすための行為遂行的発言、すなわちパフォーマティヴィティという概念であった。彼女は『ジェンダー・トラブル』でジェンダー・アイデンティティは「ジェンダーの首尾一貫性を求める規制的な実践によってパフォーマティヴに生みだされ、強要される」[バトラー 1999: 57]と主張する。したがって、ジェンダー・アイデンティティにある種の実体を認めることは誤りなのだ。すこし長いが彼女の主張がはっきりしている文章を引用したい。

ジェンダーは、ひそかに時をつうじて構築され、様式的な反復行為によって外的空間に設定されるアイデンティティなのである。ジェンダーの効果は、身体の様式化をつうじて生産され、したがってそれは、身体の身ぶりや動作や多様なスタイルが、永続的なジェンダー化された自己という錯覚をつくりあげていくときの、日常的な方法と考えなければならない。この考え方は、ジェンダー概念を、実体的なアイデンティティ・モデルの基盤から引き離し、ジェンダーをその時々々の社会の構築物とみなす基盤へと、移行させるものである[バトラー 1999: 247]。

バトラーは、ジェンダーという、一見身体の生物学的な差異に

本質的に根ざした属性が、実は日常的な言語行為を通じて構築されることを繰り返し強調する。言語行為論に由来するパフォーマティヴィティという概念は、ここでたんなる相互行為で生じる中立的な発話の行為的側面以上のものを意味する。なぜならパフォーマティヴィティはジェンダーを核とするアイデンティティそのものを生み出し、その背後に(言語行為論が前提とするような、一般的な意味での)主体性を認めることはできない、と彼女は断言しているからだ。そして、その実践は強制的でもある。パフォーマティヴィティを通じて、ひとびとは特定のジェンダーにふりわけられる。このように新たに読み替えられたパフォーマティヴィティの視点からアルチュセールの呼びかけをバトラーが「発見する」のは時間の問題であった。1993年に公刊された『問題=物質となる身体』で彼女はつぎのように書いている。

発話し、語り、そのことによって言説に結果を生み出す「私」があるところには、まずその「私」に先行する言説、その「私」を可能にする言説があり、その意志を制限する軌道を言語によって作る言説がある。したがって、言説の後ろに立って自らの意志や意欲を言説を通して実行するような「私」などは存在しない。反対に、「私」は呼ばれ、名付けられ、アルチュセールの用語で言えば呼びかけを通してのみ存在するようになり、この言説上の構成とは「私」に先立って存在し、それは私の他動詞的な呼び出しなのである [バトラー 1997: 161]。

この文章でもって、オースティン(あるいはワイトゲンシュタイン)以来の言語哲学の流れと、アルチュセールにはじまる社会学理論・権力論との接合が企てられたと言ってよかろう。オースティンが言語の遂行性と名付けた性格こそ、日々の呼びかけであり、われわれを主体化する「行為」だということが明言されたのである。

バトラーはアルチュセールと異なり、パフォーマティヴィティあるいは呼びかけが「従属する主体」を一律に生み出すとは考えてはいなかった。『権力の心的な生』(1997)と『触発する言葉』(1997)におけるバトラーの基本的な主張を一言で述べれば、アルチュセールの呼びかけを通じて、従属する主体が形成され

ない、ということである。なぜ、そうなのか。彼女によれば、呼びかけを通じて生まれるのはもうひとつの従属する安定した主体などではなく、不安定でありながら同時に語りかける力をもつエイジェント(行為媒体者)なのだ。パフォーマンスはつねに、必然的に失敗し、エイジェントを生み出す条件を準備するというのである。理論的には彼女の議論は正しいかもしれない。しかし、エイジェントが真に力をもつのは、呼びかけの不徹底さだけでは不十分である。筆者には、エイジェントが確立するためには以下のようなネットワーク形成が不可欠であると考えられる[田中 2002]。それがなければ、呼びかけは主体化にほぼ成功するのである。

エイジェントはしばしば代理人と訳される(開発業者、旅行代理人、スパイなど)。代理するのはコミュニケーションのネットワーク(共同性)が生みだす場であり、エイジェンシーは広い意味で変革を可能とするコミュニケーション能力である。代理とは、他者の操り人形という意味ではなく、他者との共同関係を示唆する。私の存在が他者との関係に埋め込まれているのである。だが私はその関係の言いなりになっているのではない。エイジェントはネットワークの存在を示唆し、またそのような場を生み出し、さらに変化させる実践者である。同時にエイジェント自体も変化していく。したがって、エイジェントは、しばしば想定されるような、構造に対立するような個人の別の名前ではない。逆説的ではあるが、エイジェントに着目する個人からの視点・個人への視点とは、あらたな共同性(ネットワーク)の発見をめざす立場なのである。

3 古典的妖術・邪術論

妖術や邪術などの超自然的な力をめぐる一連の実践は、人類学の古典的テーマであった。これらを近代人類学の文脈ではじめてテーマにしたのは『アザンデ人たちの妖術・託宣・呪術』を1937年に公刊したE・E・エヴァンズ＝プリチャードであった。そこで彼は中央アフリカに住むアザンデ人たちの妖術を中心とする宗教実践を詳述する。そして、彼は、そこにふたつの異なる宗教実践を認める。ひとつは妖術で、これは自覚なしに引き起こされる神秘的な力である。その力は内蔵に宿っていて遺伝する、生得的なものだ。嫉妬などを感ずると、この神秘的な力が活性化し、相手に危害を与える。病気などの不幸に苦しむことが多いと、妖術をかけられたのではないかと疑い、託宣などで妖術師を同定する。過去には妖術師を殺害することもあった。こ

れにたいし、エヴァンズ＝プリチャードは、自覚的になんらかの手続きを通じてひとびとに危害を与える行為を妖術と呼ぶ。すなわち、妖術は悪意をもって呪薬を使って行う宗教実践であり、妖術師は妖術師と異なり確信犯である。

本書の主要なテーマは、なぜ妖術が信じられているのか、という問いである。それにたいしエヴァンズ＝プリチャードはふたつの異なる答えが用意している。ひとつは心理に関わるもので、妖術は偶然を排することで、ひとびとに説得力のある説明原理を呈示している、ということである。なぜ私がひどい病気になったのか。あるいは事故にあったのか。その答えは病原菌や不注意ではなく——それは直接の原因かもしれないが、なぜ私なのかという問いには答えない——、妖術に言及することによって真に意味あるものとなる。

もうひとつは、妖術の社会学的な機能に関わる。すなわち、妖術師の疑いを避けるためにひとびとは妬みなどの悪感情を公然と示すことを避け、社会秩序や規範に従順に生きることにつねに配慮することになる。また、妖術にかかることを恐れ、ひとびとは嫉妬などの対象とならないように気をつける。こうして妖術は社会の秩序維持に役立っているのである。

エヴァンズ＝プリチャードの議論は、アフリカだけでなく、東南アジアやオセアニアなどでも吟味されることになる[大塚 1976, Middleton & Winter eds. 1963, Stephen ed. 1987, Watson & Ellen eds. 1993など]。そこで議論の対象となったのは、妖術と邪術という対比がアザンデ人以外でも妥当かどうか、という問題であった。妖術と邪術という他者に危害を加えるふたつの宗教実践については、通文化的な比較や、妖術師、被害者あるいは告発者らの社会関係との関連で述べられてきた。本稿では、もういちどアザンデ社会の文脈にもどって考えてみたい。

まず注目したいのは、邪術を実践するのが貴族たちであって、平民ではないということである。

力のある王でさえも邪術をおそれる。いや王は誰よりも邪術を恐れている。これに対し貴族は平民の妖術師によって殺されるとは考えない。彼の敵は他の貴族であり、貴族同士では、妖術は用いないのだと言われている。しかし、邪術を用いて殺すことはあり、彼らは邪術を使用したと言って煩雑に互いを非難する[エヴァンズ＝プリチャード 2001: 455]。

貴族は妖術を実践しない。この意味で、妖術は平民に特徴的な宗教的特性と言えよう。つまり、アザンデ人たちの社会は、宗教実践という観点から考えれば、邪術師たちと妖術師たちからなっている、と言えよう。そして、後者は前者にたいして無力なのだ。

もういちど、妖術の定義に戻ると、それは、遺伝的で、嫉妬が妖術を作動させ、みずからは気づかない。つまり、平民たちは、自身の悪い感情をコントロールできないし、また悪い遺伝的要素をコントロールできない存在ということになる。遺伝ということに注目すれば、内婚する平民はみな潜在的に妖術師である、ということになる。しかし、その力は、階級的差から当然生じる嫉妬にもかかわらず、貴族たちには危害をおよぼすことはない。

以上が、簡単ではあるがアザンデ人の民族誌から理解できることからである。妖術と邪術という他者に危害を加えるふたつの宗教実践については、すでに指摘したように通文化的な分類の妥当性を問うか、やはり比較に基づく機能主義的な議論に終わっていた。しかし、それだけではアザンデ社会の宗教実践の意味を把握しそこなっているのではなかろうか。以下、あらたな考察を試みたい。

4 再考

バトラーは、ジェンダー・アイデンティティは、日々のジェンダーをめぐるパフォーマンス(遂行的)な実践を通じて生みだされると述べ、ジェンダー・アイデンティティが本来的にわれわれの身体に備わっているものではないと指摘した。同じ言い方をすれば、平民たちは妖術実践を通じて妖術師となる、と言えよう。そして妖術が平民の特徴だということを考慮すれば、妖術実践を通じて平民が生まれる、とも言い換えられる。もちろん妖術だけが平民を平民たらしめる実践ではない。しかし、それは自覚的ではなく、つねに告発という形でしか生まれえない、すなわち他者からの呼びかけを通じてしか生まれえないという点で、きわめて特異なものだということをご指摘しておきたい。

「平民は妖術師である」という言明、あるいはより具体的には「あなたは妖術師だ」という呼びかけ(主体化)を攪乱することは可能だろうか。そのようなパフォーマンス性はエヴァンズ＝プリチャードのテキストには見えてこない。彼が繰り返し主張する妖術信仰批判の難しさは、言ってみれば、平民側の、告発に抵抗するエージェント形成の困難さを意味する。

特定の事例に誤謬が認められても、それは信仰全体に影響を与えない。その理由のひとつは、たとえ疑問を抱いたとしても——疑問を抱くのは当然のことながら妖術師として告発される妖術師本人であろう——、そのようなアザンデ人に対抗的な共同性(ネットワーク)を形成する場が、与えられていないからである。本来もっとも利用価値のあるネットワークであるはずの親

族組織はここでは、その遺伝的な特徴から無力である。親族が妖術で告発されたからといって、彼あるいは彼女を擁護すれば、自分が疑われることになる。もうひとつの理由は、妖術が、無自覚であるうえ、最終的には身体的根拠をもつ、ことであろう。ここでは無自覚ということが妖術師として告発された人物の抵抗を抑えている。身に覚えのない、という反論は成立しないのだ。そして、妖術の身体的根拠は目に見えるのではない。それは解剖という手続きをとって初めてわれわれにその存在が知らされる。

貴族は邪術を行う。しかし、妖術信仰が平民のアイデンティティ形成に深く関わるほどに、貴族はいわば邪術師として主体化されるのではない。邪術は、意図的であるという点で「主体性」が問われる相互交渉の領域に当事者を引き込むことになる。妖術と異なり、邪術は身に覚えがないといって抵抗できる種類の実践なのだ。またそれは身体・感情の領域と言うより、知識——たとえば薬草の——に関わる。つまり、邪術を実践する貴族たちは、まさにその実践を通じて責任能力のある存在であることを証明していると言えよう。ところが、平民は妖術実践という実践そのものによって「主体性」は否定されているのである。平民たちは、邪術に比べて効力の弱い妖術の実践者であると同時に、自らの意志でコントロールできないという二重の意味で貴族にたいし劣位におかれている。その意味で、妖術と邪術という宗教実践が、貴族の平民にたいする優位性を(悪の領域で)保証しているのである。

5 おわりに

本稿では、妖術と邪術という古典的なテーマを取りあげ、代表的な構築主義の議論を援用しながら、妖術と平民アイデンティティとの密接な関係について考察した。言うまでもなく、これは貴族と平民との間に宗教実践の相違が認められるアザンデ社会にのみ当てはまる議論である。しかし、アザンデ社会のみが階層社会だというわけではない。妖術という宗教実践が、劣位にあるひとびとの(劣位な)主体形成にきわめて有効な実践である、という視点は十分に有効なものと考えたい。劣位にある存在の典型は言うまでもなく女性である。「ウィッチWitch!」という告発は「ビッチBitch!」という罵声と重なりつつ、「女」を立ちあがらせる。とすれば、妖術をめぐる議論はわれわれが予想しているよりはるかに広い意味をもつことになろう。

参考文献

- エヴァンズ＝プリチャード、エドワード・E
2001『アザンデ人の世界——妖術・託宣・呪術』向井元子訳、みすず書房
- 大塚和夫
1976「ウィッチクラフトとソーサリー——弁別に関する覚書」『社会学年報』2巻、pp.105-128
- バトラー、ジュディズ
1999(1990)『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社
- 1997「批評的にクイア」クレア・マリイ訳『現代思想 臨時増刊 レズビアン／ゲイ・スタディーズ』1997年5月号、pp.159-177
- 田中雅一
2002「主体からエイジェントのコミュニティへ——日常実践への視角」田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィ』世界思想社、pp.337-360
- Middleton, John and E.H. Winter (eds.)
1963. *Witchcraft and Sorcery in East Africa*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Stephen, Michele (ed.)
1987. *Sorcerer and Witch in Melanesia*. Rutgers University Press.
- Watson, C.W. and Roy Ellen (eds.)
1993 *Understanding Witchcraft and Sorcery in Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawaii Press.

川村邦光さんから学んだことなど

(『イシバシ評論 (Cultures/Critiques 別冊)』2016年より)(L7)

川村邦光さんとは学部の3年から博士課程進学直後まで、大学ではほぼ毎日のように顔を合わせていた。学年ではふたつ上で、すでに結婚していた川村さんにはご自宅によばれたり、そのまま泊まらせていただいたりした。1973年4月に東北大に入学してから80年7月に留学のため休学するまでのおよそ7年間、私は気温が下がる9月半ばから6月末の梅雨明けまで週1しか風呂に入っていなかった。布団シーツはこの間一度も洗わずじまいった。体もシーツも洗うという発想が、当時の私にはそもそもなかった。そんな私を自宅に招き入れるのには、かなり勇気がいったのではないかな。いま思うと頭が下がるばかりである。

宗教学の実習で会津を訪れたことである。2泊したのだろうか。たしか修士のときであった。それは会津農村での民間調査で、農家にお邪魔して、こちらで用意した質問に答えてもらうというものだった。二人一組で何軒かまわり、夜にその成果をまとめる、というような活動だった。この実習で私は鳥肌が立つようなたいへん衝撃的な発見をする。しかし、残念ながら推測の域を出ないので公表は控えている。ここで紹介したいのは、この発見のことではない。私がこの実習で学んだことだ。

農村で調査をすると、お茶菓子の代わりに漬け物がお皿一杯でてくる。沢庵、奈良漬系の漬け物嫌いの私は、この経験から将来の調査地は農村以外にしようと決意した。実際、この実習の3年後に行ったフィールドワークはスリランカの漁村であった。

教訓1 「いくら学術的に重要であっても、生活が楽しめない場所で調査をする必要はない」

もうひとつの思い出は川村さんの実習でのふるまいである。彼は他の院生とペアを組んでいたのが、別行動だったが、調査を適当にすませたのか、相方の院生が木に登ってアケビをとっている場面に出くわした。私はここから何を学んだのか。

教訓2 「おもしろくない調査(頼まれ仕事一般)は適当に、美味しそうなものを優先しよう」

大学院に入ってからだったと思うが、哲学科で行われてい

た滝浦静雄教授の主催する「フッサール・アーベント」に対抗して、私たちが何かやろうと山折哲雄先生にお願いした。そして「ドーゲン(道元)・モルゲン」というゼミが始まった。そこで一緒にWolfgang Lippの論文(1977 Charisma-Social Deviation, Leadership and Cultural Change, *The Annual Review of the Social Sciences of Religion* 1: 59-77)を読んだ、いや、その論文に啓発された川村さんの発表を聞いたのか、それとも両方だったのか。残念ながらよく覚えていない。この成果はその後、「カリスマの磁場をめぐって——カリスマ論の一考察」(宗教社会学研究会編『宗教の意味世界』雄山閣所収、1980年)と「スティグマとカリスマの弁証法」(『宗教研究』253(56)2: 67-94、1982年)として公刊されている。川村さんがカリスマ論を発表した宗教社会学研究会の合宿も思い出だが、ここでは省略する。

私は、1980年の夏に英国に留学し、2年後にスリランカで調査、1986年夏に国立民族学博物館に就職するまで、仙台との関係はほとんど切れていた。交流が再開したのは、川村さんが天理大に移られてからで、私が主催した儀礼的暴力の研究(『暴力の文化人類学』京都大学学術出版会、1998年)や女神の研究会(『女神——聖と性の人類学』平凡社、1998年)に参加していただいた。天理に移ってからすぐに最初の著作物が送られてきた。『幻視する近代空間』である。本書は、その後、繰り返し行われることになる青弓社との最初のコラボで、デザインは『文化人類学』のカラー表紙やレイアウトを担当されている工藤強勝氏であった。

*

『幻視する近代空間』には4本の論文が収められているが、どれもが「民俗」を近代の文脈に(再)編成しているところが新鮮だった。私が一番印象に残っているのは、最後に収められている「近代日本と靈魂の行方」である。本論文は、川村邦光のその後の著作、たとえば『戦死者のゆくえ——語りと表象から』や最近の『吊い論』などの先駆と位置づけることができる。

「近代日本の靈魂の行方」の論点は、天皇を中心とする国家の信仰圏と民衆の信仰圏との相克である。前者が祖先崇拜を通じて天皇と民衆を本家一分家関係で組織化しようと試みたのに対し、後者は天皇に収斂しない地縁・血縁の、相対的に自律し

たコミュニティを基盤にして抗う。そして、日露戦争時、戦死者の靈魂は家郷を目指す。それは「国家の幻想性にいまだ撤収されていない、民衆の心情的拠点」であった。本稿で、川村は、柳田の祖先論、靖国神社の歴史、さらに西田無学の供養論を吟味して、最後に宮沢賢治の「宗谷挽歌」で、論を終えている。

川村の議論で想起されるのは、ジューン・シュナイダーのキリスト教論である。シュナイダーの歴史的な考察によれば、キリスト教の歴史において、贈与関係が支配的な地縁関係や血縁関係、それらの各々に対応する村の神の祭りや祖霊崇拜は、キリスト教の前進によって根絶されることになる。人々は、地縁共同体や親族の媒介を経ずに、神（一神教の神）と教会を通じて関係をとり結ぶ（Jane Schneider 1990 *Spirits and the Spirit of Capitalism*. In Ellen Badone ed. *Religious Orthodoxy and Popular Faith in European Society*. Princeton: Princeton University Press, この論文は池上良正「仏教の民間受容と「互酬性の倫理」——『日本霊異記』を題材として(上)」『哲学・思想論叢』15: 55-70, 1997年に教えられた）。教会は地縁とも血縁とも関係のない個人（信者）の集合体を理想とする。キリスト教は、血縁や地縁に基づく共同体を否定し、それらの紐帯に基づく道義性をも否定し、替わって唯一神との関係で、より普遍的な道義が問われることになる。さらに、シュナイダーは、その論文のタイトルが指摘するように、地縁・血縁関係を断ち切ることで、キリスト教は資本主義的な主体、つまり個人主義的人間を生む基盤を用意したと主張する。

キリスト教会が実行したのは、地縁や血縁に結びついた神々を悪魔として否定することであった。だが、それだけでは、キリスト教もまた地縁や血縁に結びついた信仰圏を完全に否定することはできなかったのは明らかである。川村の言う天皇教・靖国教・祖先教の三位一体が長続きしなかったのと同じく、民間信仰の否定はキリスト教世界においてもかならずしも完全に成功したとは言えない。ただし、もうひとつここで考慮しなければならないのがマイクロな次元でのヘゲモニックな実践である。以下にその例をひとつ紹介しよう。

比嘉夏子は南太平洋に位置するトンガにおけるキリスト教会での寄付行事について論じている。寄付は世帯単位で行われ、現金と豚などの調理食品からなる（『豚の価値が体現されゆく過程——トンガ王国ファトゥム村の事例にみる家畜豚の儀礼的利用とその評価』京都大学大学院・人間・環境学研究所提出修士論文、2004年）。現金は寄付額が読み上げられるのに対し、籠に詰められた調理食品は匿名のまま教会関係者に贈られる。貨

幣の方は匿名性が高いにもかかわらず、その贈り手（寄付の主体）の名前が公にされる。貨幣は簡単に集合化できる。どの紙幣がだれの贈ったものかということは問題視されない。しかし、調理食品に関して言えば、調理は主として世帯でなされているためそこに個性（人格）が認められる。また、それは貨幣のように集めてデジタル化できず、あくまで個別的なもの（籠に入った調理食品）に留まっている。これを受ける教会関係者はその贈り手の人格を意識せざるを得ないであろう。

ここで重要なのは、だれがどの調理食品をもってきたのかを分からなくなくさせてしまう匿名化の行為である。こうして、贈与から与え手の人格が剥奪される。その結果、地域住民（信徒）たちの共同的な世界（贈与のネットワーク）に巻き込まれることを、教会は避けるのである。他方で、寄付額が名前と一緒に公表される貨幣は共同体の表徴ではなく、むしろ信徒の競合を促す、より個人主義的な「贈与」であり、そこに教会の自律性・超越性を脅かす可能性は存在しない。貨幣については個別性を際立たせることで、寄付をめぐる信徒たちの自尊心や虚栄心に応えているのである。

トンガ社会では地縁や血縁に基づく共同体が根強く残っている。そこにキリスト教が普及した。キリスト教から見れば、地縁や血縁関係に基づく社会関係（そしてそれを称揚するような宗教）は否定されなければならない。贈与を匿名化するという「マジック」こそ、地縁・血縁的共同体とキリスト教会（自由な信者の共同体）との間に生じる不可避の緊張関係を解決しようという教会側の実践として位置づけることができるであろう。それは、また正義や道義の根拠が具体的な人間関係か、それとも超越的な神（川村の場合は天皇や国家）との関係かをめぐる闘いでもある。トンガでの実践は、地縁・血縁に基づく共同体を暴力的に否定して、教会を中心とする教区を唯一のコミュニティとするような変革運動の一部とは言えないし、そのような社会運動を重視する立場から見ればどうでもいい実践かもしれない。しかし、このような日々の実践に注目することこそ重要なのではないか。

*

たぶん、私が、文化人類学、とくにフィールドワークという方法に惹かれるのは、見落としてしまいそうなふるまいにこそ重要な意味が存在するという確信に基づく。それはまた、靈魂やら狐憑きやらトラコーマを近代史の文脈において論じようとする川村さんの著作から学んだことでもあった。

春歌としての文化相対主義

(『人文』第62号「所のうち・そと」2015年より)(M32)

春歌が分かつウチとソト

私たちの世代にとって懐かしい歌をまず紹介しよう。

♪ひとつでたほいのよさほいのほい
♪ひとり娘とやるときにや、親の承諾得にやならぬ
♪ふたつでたほいのよさほいのほい
 二人娘とやるときにや、姉のほうからせにやならぬ
♪みつでたほいのよさほいのほい
 みにくい女とやるときにや 顔に座布団せにやならぬ……
 ……(中略)……
♪九つでたほいのよさほいのほい
 皇后陛下とやるときにや直立不動でせにやならぬ
♪とうつでたほいのよさほいのほい
 尊いお方とやるときにや 羽織袴でせにやならぬ

『ニッポン春歌考——もしくは「春歌と革命」』(1973)の著者竹中芳や『日本春歌考』(1967)という作品がある映画監督の大島渚は、春歌に民衆のエネルギーや性の反体制的な要素を主張する。しかし、春歌というのは、そんなに革命的だろうか。確かに春歌や猥談は、権威をコケにしつつ、「民衆」を代表する男たちの絆を強めるかもしれない。しかし、こんな歌をうたって楽しい女なんているのだろうか。ここでは女は「民衆」から排除されている。例外は、なにも分からない子どもと「名誉男性」として男たちの世界にとどまることのできる、性に通じた「ものわりのいい」女ぐらいだろう。

悪い冗談(ブラックジョーク)が分かつウチとソト

1996年から在日米軍基地を訪ねてすでに20年近い。初めて佐世保の海軍基地に出向いたとき、「あなたは、文化人類学者ですね。まずは人類学について説明してください」と尋ねられた。

はい、私は文化人類学者です。文化人類学は、未開人の調査・研究を行う学問です。そんなわけで佐世保にやってきました。

言うまでもなく、通常の文化人類学の調査において、調査対象者に向かってそのような説明をすることはありえない。これは、受け狙いの冗談／ボケである。

文化人類学の専門用語としての未開は「文字をもたない人々」と同義である。しかし、私が話しかけている相手は、文化人類学とは何かの説明を求める素人であり、「未開」という言葉を、文明から取り残された人々という通常の意味で受け止めることはわかっていて。しかし、そのとき私は、この冗談(ブラックジョーク)／ボケは受けるかと確信していた。そして、私の読みが当たったことは、間髪入れずに起こった大笑いによって証明された。

このような冗談(ブラックジョーク)／ボケは、「賭け」である。「失礼きわまりない」男だとみなされて、これ以上の調査を拒否されたかもしれないからだ。

その時は、冗談(ブラックジョーク)／ボケが狙い通りに受けたのが単純に嬉しかったが、はたして同じ冗談がほかのフィールドでも使えるだろうかと考え直すと、喜んでばかりいるわけにはいかない。例えば、インドやスリランカの調査地で、お話を伺いたいのは、文化人類学者として「未開な人々」に関心があるからですという冗談を言ってみようという考えは、そもそも頭に浮かんでも来なかった。

考えてみれば、冗談が通じるためには、それにかかわる知識や価値観を共有していることが必要であり、日常生活においても、冗談を言うのは、理解に必要な知識を共有していると思われる相手(仲間)に限られる。そこを間違えると、座がシラケたり、相手を怒らせてしまったりする。冗談は、通じる相手と通じない相手を適切に区別したときにうまく成り立つ(あるいは冗談で区別しようとするパフォーマンス的な)、コミュニケーション上の高度な技巧なのである。

私はインフォーマントを、冗談の通じる「文明的な」人間と通じない「未開な」人間に分けていたのだった。冗談の分かる人間は、研究対象であっても、言わば「仲間」なのだ。通じない相手には、慎重に(文化人類学の教科書に則って)対処しなければならない。そして、悪い冗談(ブラックジョーク)が通じるのは、かなり仲間度の高い相手ということになる。

文化相対主義が分かつウチとソト

文化人類学が、「悪い冗談」を禁じているのは、相手を怒らせたなら調査ができないといった実理的な理由もさることながら、文化相対主義によるところが大きい。自身の文化が絶対的に正しいと思いつく自民族中心主義は、民族差別や偏見、外国人排除を助長する。これにたいし、文化相対主義は、複数の文化の間に優劣の差はなく、どれにも尊重する価値があると主張する。文化相対主義は本来、差別するマジョリティにたいして提示された反差別主義の考え方なのである。

しかし、異文化を尊重しようという文化相対主義は、いくつかの困難や非難に直面する。ここでは4点挙げておこう。もっとも分かりやすいのは、特定の社会が実施している「悪弊」を批判できないということであろう。これについては、少女の心身に過酷な影響を与える女子割礼(Female Genital Mutilation)は、しばしば文化相対主義の視点から擁護されてきた、という事実から明らかであろう。

つぎに、マイノリティの文化擁護のための理念である文化相対主義が、マジョリティの擁護とマイノリティの排除に使用される場合があるという点が挙げられる。たとえば、フランス文化を外国人から守りましょう、外国人はそれぞれ自分の国で文化実践をしてください、というような移民排斥キャンペーンがこれにあたる。

文化相対主義には、世界がたくさんの文化世界からなっていて、そこには明白な境界があるという前提が存在する。これは、グローバル化が進む今日(そして過去においても)明らかに間違っている。

最後に、文化相対主義もまたウチとソトを分けるパフォーマンス的な言説だという深刻な問題が存在する。文化相対主義は普遍的な価値観かもしれないが、その適用範囲は欧米を中心とするマジョリティの人間に求められる「文明的態度」である。尊重の対象となるマイノリティに文化相対主義が求められることはない。それが求められると異文化の変化を促すことになり、「尊重」に反するからだ。

春歌と私の悪い冗談、そして文化相対主義。対象は異なっても、それらに共通するのはウチとソトを分け、特定の人々を排除する言説である。さらに、各々の言説には排除する存在(女、未開人、尊重すべき異文化)が含まれているということだ。

*

宴もたけなわ、隣の部屋から春歌の大合唱が聞こえてくる。

♪ひとつでたほいのよさほいのほい

♪ひとり娘とやるときにや……

つい、顔をしかめてしまった私に、「春歌って、かれらの文化なんだ、尊重しないとね。」と、別の人類学者がささやく。そして、互いに苦笑いしてしまう。そう、「異文化」は尊重しなければならない。しかし、文化相対主義者が尊重することを求めているのは、結局のところ、その普遍性を疑わない文化相対主義者、つまり文化相対主義という「文化」(価値観)を共有する人たち自身ではないのか。

文化相対主義という春歌を声高に歌い続ける人類学者たちよ、
Fuck You
永遠なれ!!

カワイイが越境するのは国境だけではない。

(『越境する カワイイ! 可愛い! Kawaii! — ファッションとマンガ』2012年より)(R17)

「カワイイ」がファッションや少女漫画のキーワードになって久しい。海外から見ると日本から発信されるサブカルチャーはすべてかわいらしきで満ち足りているかのようだ。本ワークショップのコーディネータの一人として、最後にコメントをすることにしたい。

カワイイを英語に訳するとキュート(cute)だそうである。わたしたちの年代では、カワイイはプリティ(pretty)だったはずだが、いつの間にかキュートに入れ替わった。カワイイをあえて説明すると、小さい、子どもっぽい、もってあげたい、無邪気、近寄りやすいなどだろうか。したがって、カワイイ世界は、子どもっぽさをそのまま表現しているとも言えるし、成熟に抵抗しているとも言える。

カワイイという言葉には、高い言語遂行的力がある。これは、その言葉を発する側に優越性が潜んでいるからであろうか。ある人に面と向かって「カワイイ!」と発するのは、その人を「自立していないからもってあげたい」存在として位置づけたいという意図が認められる。もちろん、相互に「カワイイ!」と発する場合も想定できるので、一方的な力関係をそこに認めるべきではないかもしれない。通常社会的に地位の低い者が高い者に「カワイイ!」と発するのもまた、そこに既存の社会関係を揺るがすような遂行性(本人が自覚しているかは別にして)が認められよう。これは、自分たちとおなじ地位に引き下げる効果と言える。さらに、よく分からないものに「カワイイ!」と連発するのは、それを分かりやすいものにして(秩序づけて)手懐けようという意図が認められよう。これは自分たちの仲間にしよとする同化の効果である。

では、自立した人間は、その自立性を否定するような、あるいは地位の高い人間は、その地位をゆるがすようなカワイイという

表現をむしろ嫌がるのだろうか。実際苦々しく思っている人もいるだろうが、一概にそうとも言えない。多くの老若男女がカワイイと思われたい、カワイクになりたいと思っていると考える方がより実態に即していよう。そうでないならカワイイはこれほどまでに定着しなかったであろう。

こうしてカワイイが指示する対象は無限に広がっていく。日本だけでなく、世界中で「カワイイ大作戦」が成功を収めつつある。また、上は天皇から下はゴキブリまで。年齢もジェンダーも関係ない。好々爺はカワイイ典型だろうし、多くの女性が「カワイイおばあちゃん」に憧れている。現代のカワイイは、国境や文化を越境するだけでなく、概念的にも融通無碍なのだ。

さて、ヘテロな男性が女性の容姿やふるまいを形容する場合に限定すると、カワイイは、美しいとか、綺麗、セクシーとならぶ重要な形容詞のひとつである。しかし、その適用範囲は、ほかの3つの形容詞を圧倒している。

それだけではない。カワイイは反対の属性(醜いとか気持ち悪い)と結びつく(「きもかわい」)。さらに本来排他的な関係にあるはずのセクシーともつながる(「エロかわいい」)。醜さやセクシーと連帯して、かわいさは共闘する。

そう、共闘する。ではカワイイはなにと闘おうとしているのか。答えは、「美しい」である。カワイイは近親憎悪の関係にある「美しい」と日々闘っているのである。したがって、今日のカワイイ・ブームは、カワイイがさまざまな戦いで「美しい」に勝利していることを意味する。現代日本で、そして世界中で「美しい」は「カワイイ」を中心とする「連合軍」に包囲され、敗退を重ねている。カワイイの勝利の背後には、「美しい」の累々たる死体が横たわっている。わたしは周りの「カワイイ」を気にしながら、ひそかに呟く。「がんばれ! ウツクシイ!」「カワイイに負けるな!」

犠牲区域・水俣の犠牲区域

(『水俣学通信』第67号「論説」2022年より)(M43)

「犠牲区域」(sacrifice zone)とは、「社会発展」のために犠牲を強いられた地域のことで、石山徳子は原子力発電による安定的電源供与や国家安全保障という大義名分によって、環境や生活世界が破壊された地域を例に取りつつ、この概念を紹介している(『「犠牲区域」のアメリカ』岩波書店、2020年)。こうした地域は、人種主義や植民地主義など、既存の差別的イデオロギーによって選別され、その犠牲が正当化されてきた。アメリカ合衆国国内にあつては先住民保護区、国外にあつては核兵器の実験地となった南太平洋の島々や在外米軍基地がある地域などがその典型である。ここで取り上げる水俣も、日本の近代化によって生まれた犠牲区域と考えることができる。

こうした犠牲区域の内部においても外からの差別や排除の力が作用し、その結果犠牲の最下層に最弱者が追いやられることになる。内部に犠牲を次々と生み出す力は、外部から押し付けられたものである。この短文では、水俣を重層的な差別構造が認められる犠牲区域と捉えたうえで、「内側」からの実践を考えてみたい。

*

新型コロナウィルスの状況が少し好転し始めた2021年秋に思いきって水俣に行くことにした。10月には珍しくも30度を超えるような炎天下、私は水俣駅からチツソ(現、JNC)の広大な敷地を右手に百間排水溝を通り、エコパーク水俣を横切る形で海岸までひたすら歩いた。エコパーク水俣とは、莫大な費用と年月をかけて、水俣湾を埋め立てて1990年に完成した竹林や競技施設などを擁する区域を指す。水俣湾には、水銀で汚染されているヘドロが数メートルの深さで堆積している。埋め立て工事はこのヘドロ対策のために実施された。その日は祝日だったこともあり、多くの人が埋立地でスポーツに興じていたが、彼らのうち何人が足下深くに封じ込められたヘドロの存在を知っているのだろうか。

埋め立てにあたって、水銀に汚染された魚たちが外海に移動しないように埋め立て予定地を囲んで網が敷かれた。その結果、魚を含む多くの生き物がこの網の中で息絶えた。つまり、埋立地とそれに隣接する海岸はまた、ヘドロとともに閉じ込められた生類たちの墓場でもある。犠牲区域が、他地域の繁栄や安寧のために、犠牲となり、その存在自体が隠蔽されるような地域を

意味していたとするなら、埋立地はまさにエコパークという名前で隠蔽された「犠牲区域・水俣の犠牲区域」なのである。

かつて水俣病患者たちもまた近親や隣人の者から差別され、排除され、隔離されてきた。汚染されて死に絶えた埋立地の魚たちもまた同じように排除し忘却すべきではない。水俣病に苦悩し、死んでいった人びとを、さらには汚染された生類全てを分け隔てなく受け入れるべきなのではないか。犠牲区域に新たな排除を生み出してはいけないのである。

こう考えると、埋立地は、忘却・排除と想起・連帯という二つのベクトルが交差する場所と考えられる。忘却・排除は美化によって自治体主導で実施された。では、想起・連帯にどのような実践が認められるのか。

埋立地の先端、恋路島がすぐ鼻の先に浮かぶ海岸縁に「本願の会」による野仏たちがひっそりと、しかし存在感を示して立っている。本願の会は、水俣病患者を主体とした会で、「裁判闘争」の後を想定し、より根源的な問題として水俣病を位置付けようとする目的で1995年に創設された。今回の訪問でお会いできた緒方正人氏の提案で、会員一人ひとりが自然石に野仏を彫り、水際の公園に安置しようというのである(下田健太郎『水俣の記憶を紡ぐ』慶應義塾大学出版会、2017年)。野仏たちは、水銀という毒が水俣にどのような悲劇をもたらしたのかを静かに、しかし雄弁に語っている。それらは、美化された埋立地にゆっくりと深く亀裂を入れる杭である。一方で、隔離され、放置され、殺された生類たちに繋がるうとし、深く地中へと伸びる根茎でもある。

私たちは、埋立地の先端で、野仏にふれ、多くの犠牲者を出した水銀と、これによって死に絶えた生類たちを想起するのである。そして、差別にさらされ人生半ばにして無念にも死を迎えた多くの水俣病患者へと思いを馳せる。野仏たちは、犠牲区域・水俣をなかつたことにしようとする自治体の企てに加担することに警鐘を鳴らす。それらは私たちに「ここ」に何があるのか、何が起こったのか、何が起きているのかを、鋭く、しかし限りなく優しく教えている。本願の会による野仏に関わる活動は、「犠牲区域」内に生じる差別や排除の構造を断ち切る内側からの実践なのである。

追記 緒方正人氏訪問にあたっては、宮北隆志、山下善寛両氏に大変お世話になりました。ありがとうございます。

人・環での四半世紀

(『総人・人環 広報』no.63「ご退任を迎えられた先生から」2019年より)(M41)

本大学院の第二専攻が設置されたのは1993年4月。私はその当初から文化人類学分野の協力教員として大学院教育に携わってきました。創設から関わってきた教員の、残り少ない一人だと思います。東北大学文学研究科の博士課程在学中にロンドン大学経済政治学院(London School of Economics and Political Science: LSE)に留学。国立民族学博物館で助手として1年10ヶ月働いた後、1988年6月に京都大学人文科学研究所に異動しました。

人間・環境学研究科設置の目玉の一つとなる文化人類学講座に、人文科学研究所から谷泰教授と私が協力講座のメンバーとして参加してほしいという要請があった時、人文研ではかなり議論があったと聞いています。「研究所」としてのアイデンティティの根幹を揺るがすと受けとめられたからだったようです。当時、私は人文研に就任して3年ほど、まだ30代半ばでした。人文研の今後を考える意識もなく、谷教授の苦悩を十分に理解していたとは言えませんでした。あまり深刻に考えずに大学院教育に関わることになったのです。

博物館や研究所には学生がいません(現在、民博には総合研究大学院大学の博士課程が設置されています)。学生不在の世界から、大学院だけとはいえ教育に関わることになって一番実感したのは、季節感が戻ってきたということでした。学生のいない世界には学校行事と呼べるものがほとんどありません。入学式や試験・採点、公聴会、年2回の大学院入試、そしてなによりも夏休み! 大学院で教え始めて、再び学校行事に出会ったわけです。それまでは、大学近辺にやってくる初めて、ああ、今日は入学式なんだなどと気づきます。フラットな研究生活にリズムが生まれたのですから、これは大きな変化でした。

変化は季節感だけではありません。毎年大学院に進学してくる院生たちとの出会いは、私の人生に大きな影響をもたらしました。直接指導した修士課程の学生は60人以上、博士論文を指導した学生も15人になります。もちろん学生全員が論文を提出するわけではなく、途中で一般企業に就職して大学以外の道に踏み出していった者も少なくありません。しかし、そのような学生たちも私には刺激的な存在でした。例えばある学生は、FROG (Feminist Radical Onanie Group, 1996-?)という集団を紹介してくれました。

FROGのニューズレター『けもの道 あくまで実践、獣フェミニスト集団FROG』創刊号の記事「FROG設立までの道のり」に次のような説明があります。

・・・そう言えば、男からオナニーの話聞いたことはあるというのに、女からオナニーの話聞いたことがない。他の女はどうしているのか。3人で話すだけでも、「えっそうなん。」と驚かされること数多。もっとたくさんの女と話してみたら、もっとおもしろいんじゃないのか。(中略)そしてまた、フェミニズムにおいてオナニーが語られることってあんまりないんじゃないの。フェミニズムってきれいすぎるんじゃない、汚れてないねえ。まっとうなフェミニストからも、フェミニスト嫌いからも嫌われてみてもよいかと「獣フェミニスト集団」という名が生まれ・・・。

FROGは、女性への差別を糾弾し、その地位向上を目指す主流派のフェミニズムに満足していませんでした。主流派フェミニズムにとって売春や露骨な性の表象は、女性の商品化にすぎませんでした。また、女性が積極的に自身の性欲を肯定することは、「いやよいやよも好きのうち」といった男性中心の論理に簡単に絡めとられてしまうという危険もありました。そういう状況でFROGは、オナ鍋会を催して男女がオナニーを論じる場を提供したり、女性のオナニーの多様性を明らかにしたり、性的主体性について考察していたのでした。私が売春の合法化を求めるサンフランシスコ生まれの集団COYOTE(Call Off Your Old Tired Ethics, 1973年設立)の存在について知ったのも、彼女たちを通じてだったと記憶しています。

そのころ、ロンドンで愛読していた*Spare Rib*という情報雑誌の広告から、私は女性のオナニーやオーガズムに関心を持ち、論文(「世界を構築するエロス——性器計測・女性の自慰・オーガズムをめぐる」青木保他編『岩波講座 文化人類学 第4巻 個からする社会展望』1997年、後に『癒しとイヤラシ——エロスの文化人類学』筑摩書房、2010年に所収)を準備していました。

しかし、売春に注目することになったのは、つい最近のことです。COYOTEのように、売春に携わっている女性たちに労働者

の権利を認めようとする運動は、今では世界各地に広がっていて日本も例外ではありません。しかし、それに賛同するフェミニストたちはまだまだ少数です。主流派は、売春を家父長制の最たる暴力とみなし、これを廃止し、女性たちを救済しようとしているからです。実際、合法化を求める運動のスローガンは「私たちを救済しようとする人々から救ってください!(Save us from Savors!)」です。

私はこういう状況で、売春女性(セックス・ワーカー)に会って、その実態を「やっとうホントの顔を見せてくれたね!—日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について」(『Contact Zone/コンタクト・ゾーン』6号、2014年)にまとめました。女性のオナニーやオーガズム、売春以外にも、AV、秘宝館、下着、精力剤、緊縛など、文化人類学の枠を超え、通常学術の対象として避けられてきた事柄を精力的に取り上げました。最近の試みに「セクシュアリティ・ジェンダー体制とその宗教的攪乱—デーヴァダーシーと子宮委員長はるをめぐって」(『宗教研究』395号、2019年)があります。

私が自分の問題意識の正しさに自信を持てるようになったの

は、遠い昔に「獣フェミニスト」たちと出会っていたからではないか。今ふり返ってそんな風に思います。

＊

最後に一言。長年私が、文化人類学者として研究と教育に関わり続けることができたのは、ロンドン大で受けた教育のおかげだと思います。当時の教員の方々には大変親切に指導していただいたという思いが強くあります。

そして、教育の場で不可避に生じる師への負債は返済すべきではなく、新しい世代に利子付きで先送り(いわゆる恩送りですが、『負債論』の著者、デヴィッド・グレーバーに敬意を払って負債という言葉を使います)すべきだというのが、いつからか私の思いになっています。恩返しの期待(真の教師はそんな期待を抱かないでしょうが)を裏切り続けることこそ、教育の真髄ではないでしょうか。もちろん、いい教育を受けた教師たちが、つねに負債の先送りに成功しているわけではありません。その意味で、私は大変幸福な25年を人間・環境学研究科で過ごすことができたと思います。

長い間本当にありがとうございました。



京都大学では文部科学省の指定を受けて、2018年秋、日本の人文・社会科学分野の研究の牽引役を担う「人文・社会科学の未来形発信ユニット」(代表：出口康夫)という組織が発足しました。2019年4月27日に開催されたその第1回全学シンポジウム「アジア人文学の未来」では、これまで京大が蓄積してきた「アジア人文学」(いわゆる京都学派)の伝統を継承しつつ、独創的な研究を進める3分野(哲学、東洋学、人類学)の研究者たちが登壇。私もそのひとりとして、霊長類学の山極壽一さん(当時総長)と「フィールド人文学の可能性」をめぐるお話し、男性中心の共同調査について問題提議をしました。司会は石井美保さん。この漫画は、そのポスターとして、はやのん理系漫画制作室により制作されたものです。→G34

私流文化人類学入門

田中雅一 語ったことと書いたこと(1981-2022)

私流文化人類学入門

田中雅一 | 語ったことと書いたこと (1981-2022)

2022年10月15日発行

著者 田中雅一

編集 石川泰子(編集工房i s)

デザイン・レイアウト 河村岳志

©Masakazu Tanaka 2022 printed in Japan

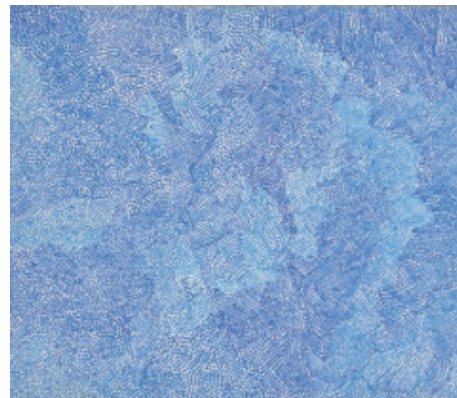
ISBN978-4-9904327-5-1 C0039

装画 田主 誠

表紙 「司馬史観」



目次・奥付「想II」





Don't get it right, get it written!



私流文化人類学入門

田中雅一

語ったことと書いたこと (1981—2022)